人の名前を間違う雪ノ下はまちがっている

生物産業

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

親から離れて自立の道を歩む男がゴーイングマイウエイするお話です。

目次

1話　秋田秋太という男　1
2話　雪ノ下雪乃　10
3話　侵し系女子　18
4話　俺が貴女を嫌いなのは……　27
5話　鬱陶しいから……　38
6話　なんて心が痛む提案を……　55
7話　あのダンベル……良い！　64
8話　ロマンがない　78
9話　夏休み、森で、熊さんに、出会った　87
10話　も、もう一度お願い　98
11話　私、可愛いもの　108
12話　お久しぶり　119
13話　貴方がいたから／納得いかない　132
14話　人気者の定義は難題　142
15話　悪の帝王に任せていいのかい？　154
16話　文化祭準備がようやく始まる　165
17話　文化祭準備がちゃくちゃくと　175
18話　舞い上がった俺を許してほしい　189
19話　文化祭が始まる　198
20話　男同士のお話　207
21話　最終回　前編　216
22話　最終回　後編　226

1話　秋田秋太という男

雪ノ下雪乃は窓際後方2番目の席に視線を向けていた。

（今日は居るのね）

机に突っ伏しながらも、その手は携帯を握っており、何やら打ち込んでいる姿が見えた。

彼に興味を持ったのは、一年の一番最初のテスト結果が張り出された時。自分の下に名前があったことから少し気になった。

一年の頃から同じクラスなのだが、今まで会話をしたことなど一度もない。

勉強ができるという程度なら、気にも留めないはずであるが、なぜか気になってしまった。

会話をしたことがない以上、観察したことでしか彼の為人が分からない。観察と言っても、凝視していればクラスメイトに勘違いされてしまうかもしれないので、読書の合間にチラチラ見るくらいだ。

雪乃が彼について分かることなど、多くはない。

学校を休む。それがサボっているのか、体調不良によるものなのかは分からないが、おそらく前者だと考えられる。

人とあまり交流をしない。他人のことを言えたものではないが、雪乃は彼が特定の誰かと楽しそうに話している姿を見たことがなかった。休み時間は寝ているか、携帯をいじっているか。昼休みになれば、そそくさと教室から消える。目的の場所は分かっている。生徒会室だ。なんどか彼がそこに行くのを目撃している。役職に名前がなかったことから、正式な生徒会役員ではないことは分かるが、学校をサボる人間が生徒会に顔を出す理由は分からなかった。

（いつも昼休みに持っていくケースは何なのかしら？）

雪乃は彼が昼休みには必ず持っていく黒いケースが気になっていた。

ただそれを尋ねるようなことはしなかった。自分と彼は関わるような人間ではないと思っているから。

二年に進級して、すぐの穏やかな春の日のことであった。

◆

「はい、どう～ぞ」

お茶がこんっと置かれた。

間延びした口調で。それだけで、人柄が分かってしまうようなそんな話し方だ。

ニコニコと笑い、席に戻るとテキパキと仕事を片付けていく。

生徒会室での日常的な風景だ。

「めぐり先輩、楽しそうですね」

めぐりと違い、パソコンを高速で打ち込んでいた男子生徒がそう尋ねた。

「そうなの！　今日、はるさんが遊びにくるんだって！　私も久しぶりに会うから楽しみだな～」

「……」

まるで恋に焦がれる乙女のように、めぐりは本当に楽しそうに笑う。

その一方で「魔王様降臨……」と小さく呟く男の表情はめぐりとは全く逆のものになっていた。

「あ、めぐり先輩。俺、今日ちょっと用事が有りまして、生徒会の方には来れないです。すみません」

「え～～！　せっかく、はるさんが来てくれるのにー。ぶーぶー」

頬を膨らませるめぐり。「この人、先輩だよね？」と子供っぽい彼女を見て男は苦笑する。

（そもそも、そのはるさんが来るから逃げるんだけど）

めぐりが文句を言っている傍で、男は気づかれないようにそっとため息を吐いた。

◆

雪ノ下陽乃は久しぶりに母校を訪れていた。

「めぐりはさ、進路決まってるの？」

「あ、はい。一応、はるさんと同じ大学で、推薦で受けようと思ってます」

「へぇ～、さすが生徒会長ー」

「えへへ」
褒められためぐりは素直に笑う。可愛いなと陽乃はめぐりを見て微笑んでいる。
「で、秋太(あきと)はどこに行ったの？」
「なんか用事があるみたいで、今日は早めに帰りました」
残念そうに言うめぐりに対して、陽乃の笑みは深まるばかりだ。ただ、それは楽しんでのことではない。
「ふーん、そう」
勘違いだろうか。めぐりは部屋の温度が急激に下がっていくのを感じた。春の陽ざしがその役目を果たしていない。
「あ、あのーはるさん？」
「なーに？」
めぐりが言っていいのか迷ってしまう。
陽乃が笑顔であるのは確実なのだが、形容しがたいなにか黒いオーラのようなものが、陽乃の背後からまるで噴き出すように、勢いよく飛び出しているのがめぐりには見えた。目をごしごしと拭ったが、その幻覚が消えることはなかった。
「怒ってません？」
「そんな訳ないでしょー。秋太が生徒会の仕事をサボってまで、私から逃げようとしたことくらいで、怒るわけないじゃん」
怒ってます、怒ってますよーと震えるめぐり。そんなめぐりを見ても、陽乃は笑うことをやめなかった。
「とりあえず、メールでもするか」
――ヤッホー。私だぞ♪　秋太が生徒会室にいなくて寂しいな。
ニコニコしながら陽乃はその内容でメールを送信した。
きっと、ぶっきらぼうな答えが返ってくるだろうと、陽乃は期待したのだが、予想外の返信に笑顔が固まった。
「メッセージを送信できませんでした……ね？」
「は、はるさん？」
「そうか。そう来るか。まさかメール拒否じゃなくて、アドレスごと変えてるとはね」

昨今、メールの拒否設定の場合、サーバーにメールが送られ、そこで削除されるため、自分の元に返信されない。だから送信者は拒否設定をされているとは分からない。
わざと自分のメールを拒否していると伝えている秋太の嫌がらせに陽乃は――笑った。
めぐりがその笑顔を見てドン引きしているが。
「そ、そんなに強く握ると、携帯さんが……」
めぐりの忠告を聞き流して、今度は電話を掛ける。
――お掛けになった電話番号への通話は、お客様のご希望によりお繋ぎすることができません。
「……」
ここに来て、陽乃の顔から完全に笑みが消える。能面のように全く感情を感じさせないその顔に、ひぃっと小さく悲鳴を上げためぐりは5歩ほど下がる。
「……私を拒否するとは、良い度胸じゃない」
「は、はるさん、きっと秋太くん携帯が壊れちゃったんですよ～。だから――」
「めぐり、秋太に電話してみなさい」
拒否は認めないと、陽乃の視線が脅しをかけていた。こくこくと頷くと、めぐりは履歴から秋太の番号を探す。先日掛けたこともあって、すぐに見つかった。
陽乃の強烈な視線に晒されながら、めぐりはスマホの画面を押した。
できるなら出ないで欲しいという願望と共に。
【めぐり先輩？　何か用ですか？】
めぐりの願いは叶えられなかった。日頃の行いは良いはずなのにと、心の中で神様に抗議を開始する。
めぐりが耳元に近づけずに電話を掛けたからだろう、電話先の声が生徒会室に響き渡る。それと同時に、部屋の温度が異様なまでに下がった。
【あれ？　おーい、めぐり先輩？　電波悪いのかな？】

もうめぐりは笑うしかなかった。あははは、と尻つぼみに声が小さくなっていくが。
神様、助けてくださいとめぐりは切に願う。
この世に神など存在しないが。
「めぐり」
言わずとも分かった。めぐりは自分の携帯を陽乃に差し出すと、黙って距離をあけた。
【めぐり先輩？　聞こえてい――】
【聞こえてるぞ♪】
【げ！】
【げとは失礼ね、こんな美人を捕まえて。まあ、良いわ、とりあえず――】
ツーツーと電話が切れる音がする。
切ったのだ。電話をしている最中に、話している人間が誰なのかを理解して、ためらいなく切ったのだ。
すっとめぐりに陽乃は携帯を返した。
陽乃は美人だ。それは自他ともに認める覆らない事実だ。
陽乃は異性から嫌われるという経験がない。少し声を掛ければ、勘違いする男など腐るほどいる。
陽乃は異性に電話を切られるなど、屈辱的な経験はない。相手に急ぎの用事が有るときでさえ、陽乃と話すことを優先する男がたくさんいる。無言で、しかも会話中に切られることなど、彼女の人生において初めてのことだった。
「あんにゃろ～！」
「は、はるさんが燃えてる……」
外面だけは完璧と最愛の妹に称されたその仮面は一人の年下の男の子によって簡単に剥がされた。
美人であるというプライドを傷つけられたのだ、これは怒らずにはいられなかった。
「めぐり！」
「は、はい！」

「私、またここに来るからっ！　あの小生意気なガキをぎゃふんと言わせないと気が済まないの」
　それだけ言うと、陽乃は部屋を出て行った。
「うぅ～はるさん、私とのおしゃべりは～」
　結局、ほとんど話すこともなく帰っていった陽乃にめぐりはがっくりと肩を落とし、怒らせる原因を作った秋太に、恨み言を言ってやろうと心に決めた。

◆

「もぅ！　酷いよっ」
　怒ってますと頬を膨らませる生徒会長。
「濡れ衣です。用事の最中に、電話を掛けてきためぐり先輩が悪いじゃないですか。しかも無言だったし、いたずらだと思って切っちゃいましたよ」
「そっちじゃないよっ！　秋太くんが電話を切るからはるさんが見たこともないくらい怒って帰っちゃたんだから」
「いや、それこそ俺の所為じゃないです。きっとめぐり先輩のエンジェルボイスが魔王様にはダメージだったということですね。さすがです」
「い、意味がわからないよ、もぅ！」
　ぽこぽこと擬音語にすればそれほどの威力ではない攻撃だが、めぐりは見かけによらず力持ちだ。そんな彼女の連続攻撃が痛くないはずがない。割と本気で、秋太はめぐりの両手を封じた。
「はぅ～」
「いや、そこで赤らめないでくださいよ。先輩の殺人パンチ、結構痛いから、止めただけです」
　めぐりの両手を両手で封じているため、二人の距離は触れるほどに近い。めぐりより頭一つ分違う秋太から見下ろされているような状態だ。壁ドンに匹敵する気恥ずかしさである。
「暴れないでくださいよ」
　秋太がそっと手を離すとめぐりは小さくなって俯く。「なに、この可愛い先輩」と秋太が、ときめいているとめぐりがぱっと顔を上げる。

「お、女の子は、ちょっと強引な方が、良い時も、あるんだ……よ？」
「ぐっ」
動悸が激しくなる。狙ってやっているのか、もじもじしながらそう答えためぐりに、秋太の理性という名のライフが大幅に削られた。
「……先輩、将来、絶対男を泣かせますよ」
「む～それは女の子には言っちゃいけないセリフだよっ！　まるで私が男の人を誑かすみたいに聞こえるから」
そう言ってるんですと秋太は呟いたが、めぐりには聞こえなかった。
「そう言えば、あの人はいつ来るって言ってましたか？　俺、その時に急用ができる予定なんで事前に言っておきますね」
「逃げる気満々だね」
めぐりは苦笑するが、当然だと秋太は頷いた。
「あの人、ホント邪魔しかしないし。人が仕事をしてるところにちょっかい出すから鬱陶しいんです」
「あはは、はるさんは気に入った人を構いたがる性格だから。秋太くんがはるさんに気に入られてるって証拠だよ」
「全然嬉しくないです」
秋田秋太は苦学生である。別に実家が貧乏であるわけではないのだが、とある事情で自分の生活費等を自分で稼がなければならない。
ただ幸いだったのが、プログラミングという技術。その才能があったのか、今ではプロ顔負けの技術を誇っている。
そのおかげも有って仕事には困っていないのだが、時間がやはり厳しい。高校に通いながらでは時間の制限がかなりできてしまう。
「折角、こんなに良い仕事場なのに、なんであの人呼んじゃうんですか？」
秋太は学校で仕事をするために、生徒会庶務という雑用を引き受けている。ネット環境が整っているのが特別棟だけであり、特別棟は生徒会室を除けば文化系の部室しかない。すでに部室は埋まっており、新たにパソコン部を設立することも不可能なため、秋太は生徒会の簡単な雑用を引き受けることを条件に、この場所を借りているのだ。

ほかの部活に入ることも考えたが、一人だけ全く別の活動をしている者を快く受け入れるとは思えないため、仲の良い教師の仲介もあって、生徒会を手伝っている。

少し前までなら問題はなかった。優しく優秀な生徒会長がきびきび働くため、自分に回ってくる仕事が殆どない。精々、報告書等の作成をする程度だが、秋太にとってそれは苦でもなんでもなく、手早く終わらせられるものだ。

問題があったのは一人の女性が現れたことだ。

めぐりの二つ年上で、秋太の三つ上だ。めぐりが一年の時の三年生であり、秋太は全く関係のない女性だった。

そう、そのはずだった。

――へぇー、秋田秋太（あきたあきた）って言うんだ。

秋太の持っていたノートを見て、女性はそう言った。一方、秋太は人の名前を間違える失礼な奴と認識した。

割とよく来る卒業生だとめぐりから紹介があり、流れで秋太も会釈程度には挨拶をした。その時は、特に何も問題はなかったのだが、彼女が総武高を訪れると、なぜか無駄に寄ってくるようになったのだ。

秋太が生徒会室で明らかに異質な行動をしているのが、彼女の何かを刺激したのかもしれない。

邪魔だ。

心の底から秋太は思った。直接的な妨害はたまにしか行ってこないが、秋太が仕事に集中していると、いつの間にか正面に座り、ずっと見ているのだ。これは完全に嫌がらせをしているのだと悟る。

そんな関係が二か月も続けば、秋太が女性を嫌うには十分だ。

「あはは、はるさんは大人びて見えるのに、子供っぽいところがあるからなー」

「……先輩はそのままで居てください」

「なんで?!」

子供っぽい先輩を相手しながら、秋太は陽乃対策を考える。

「先輩、生徒会長権限で、部外者の立ち入りを禁止してくれません？

というかこの学校緩すぎでしょ」

「うーん、それは無理かな。ちなみに学校の名誉のために言うけど、校内に入る場合は事前に事務の人に連絡して、許可証をもらっているんだよ。まあ、はるさんの場合は顔パスかもしれないけどね」
　仕事しろと叫びたい衝動に駆られた。少なくとも陽乃が来るときだけは、追い払ってくれないかと見知らぬ事務員さんに切実に願う。
「あ、そう言えば、はるさんには妹さんが居て、秋太くんと同じ、二年生なはずだよ」
「あの人の妹……小魔王か？」
「すごく綺麗な子だよ。同性の私が嫉妬しちゃうくらい」
「めぐり先輩も十分可愛いですよ」
「綺麗を可愛いに変えたのは減点かな。秋太くん、お姉さんポイントは上げられないぞ♪」
　にっこりと笑うめぐりはやっぱり可愛かった。
「そう言えば、あの人の名前ってなんでしたっけ？　めぐり先輩がはるさん、はるさん言うから、魔王としてしか認識してないんですよね」
「それ、はるさんとしても認識してないよね？　最初に自己紹介したでしょ。えっと、はるさんの苗字は雪ノ下。雪ノ下陽乃さんって言うんだよ」
「あ、妹の方、なんか知ってる人かも」
　そう言えば同じクラスにそんな苗字が居たなと、いつも不機嫌そうな顔をする少女のことを秋太は思い出すのだった。

2話　雪ノ下雪乃

翌日。国際科二年Ｊ組。普通科よりも少しばかり偏差値が高く、男女比が１：９の特殊選抜クラスである。

男子は肩身の狭さを感じ、ほそぼそと過ごすしかないのだが、今日はそんな弱者の立場にいる一人が、一人の女子に話しかけた。

男子は「何を早まっているんだっ」と制止の声を、女子は「は、何してんのあいつ？」をオブラートに包んだ表現で非難の声を上げた。

「ちょっと、良い？」

「何かしら？」

話しかけた男に対し、まるで威嚇するかのような鋭い目つき。本人は別にそんなつもりもないのだが、切れ長の目がそういう印象を相手に与えてしまう。それでも美人だと思わせるほど、彼女の容姿は整っていた。

「魔お――じゃなかった、雪ノ下陽乃さんって君のお姉さんだよね？」

陽乃の名前を聞いてから、女の子は警戒心を露わにした。

「なぜ、貴方が姉さんを知っているのかしら？　秋田秋太（あきたあきた）くん？」

ただ問いかけられているだけなのに、脅されているような感覚。さすがは魔王の妹と心の中で秋太は拍手を送る。そして人の名前を間違えるところもそっくりだと。

「秋太（あきと）だから。姉妹揃ってマジで失礼」

不快感を露わにした秋太に女の子が慌てる。

「ご、ごめんなさい。漢字でしか見たことがなかったから」

「自己紹介で言ったような気がする」

「貴方、一年生の最初の日ですら欠席してたじゃない。だから誰も貴方の名前を聞いた人なんていないわ」

国際科は特別編成クラスであるため、クラスメイトはほとんど変わらない。入学式の日の自己紹介を逃せば、自分を紹介する機会など早々ない。

秋太がクラスに溶け込んでいるのであれば、会話の中で間違いに気づく訳だが、休み時間になれば仕事のために教室からいなくなる彼が

クラスメイトと友好な関係を築いているわけがなかった。
年間の重要な行事も基本的に欠席しているため、秋太はクラスで浮いている。だから秋太と話そうという人間は皆無だった。
秋田と認識されていても、名前までは分からない。そんな存在だ。
「むむ、それはこちらの落ち度か。まあ、良いや。で、お姉さんのこと――」
秋太が話を戻したところで、授業のチャイムが鳴った。
「昼休み、時間もらえる？」
「ええ、分かったわ」
短く会話を切り上げ、秋太は席に戻った。自分の席に戻る途中で、なぜか女子生徒に厳しい目で見られたが、とりあえず気にしないことにした。

◆

雪ノ下雪乃は動揺していた。一体なぜ？　今の彼女にはそんな疑問でいっぱいだ。
（姉さんのことで話があるみたいだったけど）
雪乃の姉の陽乃は美人だ。それは身内びいきという点を差し引いても美人と言えるほどに。社交性も高く、誰とでも仲良くなれる姉を雪乃は尊敬すると同時に苦手にしていた。嫌っていると言ってもいいかもしれない。
（またいつもの事かしら？）
美人である姉は人気者だ。だから紹介して欲しいという同世代の男子は少なからずいる。雪乃からすれば、どうぞご勝手にと言いたいところなのだが、人気者に話しかける勇気のないものは二の足を踏んでしまう。
そんなことではどうせ相手にはされないだろうと、雪乃は思うが、自分には関係ないと適当に話を終えてしまう。
秋太も同じだったのかと、思うと少なからず落胆した気持ちになる。彼は他とは違う、そう思っていたことが裏切られたように感じだ。
ただ、それは自分の勝手な期待である。彼に罪はないと言い聞か

せ、昼にどう断ろうかと考えだした。
（なんか私、姉さんのマネジャーみたい）
雪乃は小さくため息をもらした。
◆
「ここよ」
話が長くなるかもしれないからと秋太が言うと、少女は「じゃあ私の部活に来てちょうだい」と秋太を部室に誘う。そのことにクラスが一瞬、ざわついたが、二人が首を傾げると収束した。
「何の部活？」
「奉仕部」
なんだそれ、と言いたくなかったが特に興味もなかったので、秋太は自分の要件を優先した。
「で、君のお姉さんなんだけど」
椅子に座りながら、秋太が話を切り出す。
「鬱陶しいから何とかして欲しい」
「ふぇ？」
普段の少女からは絶対に出ないような、変な声が発せられた。
「まあいきなり言われても困るだろうけど、なんか目を付けられちゃったんだ。少し前までは我慢もできたんだけど、そろそろ本格的に鬱陶しくなってきた。だからお姉さんに言って、ちょっかいを掛けるの止めてもらえない？」
「姉さんの連絡先を知りたいわけじゃないの？」
「はあ？」
素っ頓狂な声を今度は秋太が上げる。
「私に近づく異性は大抵、私に好意を寄せるか、姉さんに取り次いで欲しいかの2択だったから」
少女は自然に自分がモテると宣言した。それを否定できないほどの容姿であるが、真っすぐに言われると呆れてしまう。
「……お姉さんに連絡を取りたいわけじゃない。むしろ断固拒否する。こちらの願いは、お姉さんと俺との関係性を断ちたいってこと」
「あ、貴方、姉さんとどういう関係なのかしら？」

「ざっくり言えば、先輩と後輩。具体的に言えば、魔王様と蹂躙される騎士B」
「意味が分からないのだけど……？」
「困った顔は似てないんだね。えっと雪ノ下雪乃さん？」
　陽乃と妹である雪乃の顔立ちはよく見ればそっくりである。ただ陽乃がその名を体現するように、明るい表情する女性であるのに対し、雪乃は大人びた表情をする女性だった。
　秋太もなんとなく似ているなと思ったが、困惑で見せた表情は自分の知る女性と少しばかり違う。やっぱり姉妹かと少しばかり納得した。そして何よりホッとした。同じ人間が二人もいたら発狂していただろう。
「姉さんと私は似てないわ」
「そう？　黙っていれば結構そっくり。まあ、あの人は笑い方が邪悪すぎるから、美人とか以前に怖いけど」
「姉さんが邪悪……ぷっ」
　雪乃が小さく噴き出した。そして肩を小刻みに揺らしている。
「貴方は姉さんの本質に気づいているのね」
「人を苛めることが大好きってこと？」
「ふふ、そうね。でも珍しいわ。姉さんが外で取り繕わないのは。いつもニコニコと皆が求める雪ノ下陽乃を演じているのに」
「あ～あの笑顔ね。あれ凄いよね。で、一瞬で真顔になると超怖い」
「姉さんが本当に怖いのは笑っているときの方なのだけどね」
　なぜか陽乃の悪口で意気投合する二人。お互い溜まっていたものが相当あるようで、口からするすると言葉が出てきた。
「ふぅ～、ちょっと気が晴れた」
「身内が迷惑をかけてごめんなさい」
「いや、君が悪いわけじゃないから。ただお姉さんの件はよろしく頼む。仕事を邪魔されるのは本気で困る」
「仕事？　あ、そう言えば生徒会の――」
　雪乃は秋太が生徒会室に行くのを何度か見たことがある。同じ特別棟に生徒会室と奉仕部の部室があるのだから当然だ。

「そっちじゃない。俺のバイト、と言えるかは分からないけど、そっちの方。一応プログラマーをやってます」
「もしかして、貴方が時々欠席するのは……」
「そ、仕事。期限間近だと時間が欲しくてね。去年は単位がギリギリ過ぎて危なかった」
　留年して無駄に高校に通うなんてありえないと秋太は続ける。
「興味本位だから、言いたくなければ言わなくても良いのだけど、なぜと聞いても良いかしら？」
「お金だよ、お金。生活費を稼いでいるの」
「ご、ごめんなさい。気軽に聞いていいような内容ではなかったみたいね」
　高校生が生活費を稼ぐと言っている。それは事情があると言っているようなものだ。それも決していい話ではない。
　それが分かったからこそ、雪乃は謝った。
「別に、家が貧乏とかってわけじゃないから。ん、でも、俺の財布は暖かくないわけだし、貧乏と言えば貧乏かな？」
「……？」
　雪乃は秋太の言っている意味が分からず、小さく首を傾げる。
　ただ秋太本人が気にしてない様子から、雪乃はもう少しだけ踏み込んだ質問をする。
「ねえ、秋田君。貴方はなぜ学校で作業を？」
「学校に通ってるから」
「仕事をしているのだから、わざわざ学校に通う必要はあるのかしら？」
　秋太は既に稼ぎを得ている。秋太の言葉から高校に行く意味をあまり感じていないようだと分かる。では、なぜ通っているのか、雪乃はそれを疑問に思った。
「親の面子」
「え？」
　予想外の答えだった。もっとちゃんとした理由があると思っていたからだ。

「家の親って学歴にうるさいんだよね。なんかコンプレックスがあるみたいで。で、そんな親だから、勉強しろってうるさかったわけ。中学時代は本当に面倒だった」
　苦虫を噛み潰したかのような顔をした。
「ただ、俺たちの年代は反抗期じゃん？　まあ親の言いなりになるのが嫌なだけなんだけど」
「……それは分かる気がするわ」
　雪乃は何かを考えて少しだけ表情を強張らせた。
「でも、親に養ってもらってる身だと文句を言っても聞いてもらえないし、自分の方が正しいみたいな言い方をしてくる。これはもう、あれだよ、自立しろっていう神様からのお告げだよね」
「……それはちょっと」
　大人の階段を上っているとはいえ、中学生はまだ子供だ。経済力などない子供に自立しろというのは無理な話である。
「で、親の言いなりになりたくなかったから、手に職をつけたわけ。最初は大変だったけど、気合と根性とガッツを必要とするプログラマーの仕事は俺に向いてた」
「私のイメージするプログラマーとは違うようだけど」
「そんなイメージは捨ててしまえ。で、そっち方面の才能を持っていた俺は一人暮らしを宣言。ただ中学を出て働くって言ったら、今まで養ってきた分を返せとかキレる訳ですよ。親としてどう思う？」
　そんな問いに答えられない雪乃は、ただ曖昧に苦笑するしかできなかった。
「で、一応県下でも名の通ったこの学校に進学することを条件に、返済期間を延期してもらってる訳。稼いだ分をコツコツと返済に回しているの」
「それは……」
　家庭環境としては最悪と言っていいだろう。言うことが聞けないなら金を払えなどと言う親だ。普通で考えればありえない。
　ただ、それで束縛から解放されるならと秋太は喜んでその条件を受け入れた。親戚に面子を保てるだけの有名進学校に通っていれば、と

りあえず親からは文句を言われない。そして高校に通っている間に親の要求した金額を稼ぐ気なのだ。
「たぶん、今年中には返済できる。そしたら高校辞めて、自由に過ごすさ」
「……貴方は凄いのね。しっかりと自分で自分のやりたいことをやってる。私とは違う」
「そりゃあ、育ってきた環境が違えば、歩む人生も違うでしょ。俺は俺がやりたいことのために我を通して、それで発生した責任を自分で負ってるだけ。特別なことじゃない。進んで苦労を背負ったんだから、それに文句なんて言えないでしょ」
　自分で負ったものなのだから、それに対してとやかく言うことはないのだとはっきりと雪乃に告げた。
「君だって、やりたいことがあってこの部を作ったんでしょ？　何の活動をするのか、よく分からないけど、とりあえず何かをしたかった。やると決めて、行動する。その点に関しては俺も君も変わらないよ」
　言いたいことだけ言って、秋太は作業に戻った。
「やると決めて、行動する」
　秋太の言葉を雪乃は小さく呟く。ただの言葉だ。だが、雪乃にはとても重要なことのように思えた。
「あ、貴――」
「ゆきのーん！　やっはろ～！」
　雪乃が何かを言いかけたとき、元気いっぱいの声が部屋に響いた。ドアが無遠慮に開いていて、今どきの高校生と呼べる少女が手を振りながら入ってくる。
　彼女の後ろには死んだ魚のような目をした少年が、面倒くさそうに付いてきていた。
「由比ヶ浜さん、ノックは教養ある人間の証よ」
　雪乃は固くしていた表情を一瞬で朗らかなものに変える。入ってきた女の子を見て、どこかホッとしているようだった。
「あ、ごめんね、ゆきのん。それに――」
　由比ヶ浜と呼ばれた少女は、ちらりと雪乃の正面に座っていた秋太

に視線を送る。
「時々思うけど、この学校に居たらおかしい子っているよね。今、目の前にして、ホント不思議に思う」
「なんか遠まわしにバカって言われた気がするんですけどっ！」
「由比ヶ浜、それは勘違いだ。単純にバカって言ってるんだよ」
「そっちの方が酷いしっ！　ヒッキーマジキモい！」
　俺のキモさは関係ないだろと、少年がぼやく。
「なるほど。ここは奉仕部という名のお笑いクラブな訳か。文化祭では頑張って」
「秋田くん、変な勘違いは止めなさい。お笑い担当はそこの二人だけよ」
「ゆきのん!?」
「俺もかよ」
「比企谷くんは嘲笑されているだけなのだけど」
「うわぁー、雪ノ下さんのっけから飛ばしてきますね。何か良いことでもありましたか？　それなら俺に優しさをくれても良いと思うんですけど」
　比企谷と呼ばれた少年は、雪乃の先制パンチに小気味よいカウンターを返す。
「ねえ、ヒッキー。ちょうしょうって何？」
　その場にいた全員がよくこの高校を受かったなと本気で思った。

3話　侵し系女子

「由比ヶ浜結衣です♪」
「比企谷八幡。どうも」
「秋田秋太です。雪ノ下さんとは清いお付き合いをしています」
「「な!?」」
　雪乃は絶句し、結衣は紅潮し、八幡は目を見開く。
「嘘です。クラスメイトだけど、話すのは今日が初めて」
「秋田くん、言っていい冗談と悪い冗談の区別もつかないのかしら？
　訴えるわよ」
「び、びっくりした～。ゆきのんが遠い存在になったかと思ったよ」
　まくし立てる雪乃に対し、結衣はホッとした様子だ。八幡は無言だったが、チラチラと会話の成り行きを見守っている。
「お笑い研究部なら、これくらいは軽いジャブかなって」
「違うから。ここはそういう部じゃないからっ！」
「じゃあ何をする部なの？」
「え、えーっと……ヒッキーお願い」
　結衣自身よく分かっていないようだった。
「まあ、お悩みを解決する部活だな」
「ほほう、それは今の俺にとって凄い甘美な言葉」
「姉さんのことなら私が何とかするわ。だから部で活動する必要はないの」
　雪乃がきっぱりと拒否した。話の内容がよく分からない八幡と結衣だったが、姉という単語に雪乃が反応しているのはなんとなく理解した。
　秋太は「何でもいい」と、厄介者がいなくなるなら、雪乃一人でやろうが、部でやろうが気にならない。重要なのは陽乃という存在が遠くに行ってくれることだった。
「じゃあ、お願いの件はよろしく」
　それだけ言って、秋太は奉仕部の部室を出て行った。
「さてと、生徒会室に行くか」

足は生徒会室に向かう。
秋太はのちに後悔した。なぜこの時、素直に帰っていなかったのかと。

◆

「……」
「うふーん♪」
生徒会室に来てドアを開けた瞬間、秋太は素早く撤退を試みた。
だが、そんなチープな行動は簡単に読まれており、入り口の近くに控えていた生徒会役員によって捕まってしまった。
卒業生のはずが、なぜか生徒会を支配していることに呆れを通り越して、称賛すらしてしまう秋太だった。
「なんですか？」
「別に♪」
「じゃあ、向こうに行ってくれません？　超目障りなんですけど」
「酷いな～。こんな美人なお姉さんを目の前にしてそんなこと言っちゃう秋太には――お仕置きしちゃうぞ♪」
言葉の最初は穏やかだったのに、最後の言葉だけは声色がものすごく低かった。
笑ってはいるのに、お仕置きの言葉には異様な力が込められている。
「意味が分からないです。横暴反対」
小さく抵抗を試みるが、それを許してくれるほどの生易しい相手ではない。
「ふーん……」
空気が一段と変わる。めぐりを除く生徒会役員が「お、お先に失礼します」と走り去るようにして消えていった。
「その無駄なプレッシャー止めてくれません？　俺に罪はないんですけど」
「秋太が私との連絡手段を断ったことに、深く傷ついているんだけどな～。初めての経験だよ。えーん、えーんって泣いちゃうところだった」

「ざまぁ――おっと、携帯をうっかり壊してしまいまして」
「本音が出てるから。それとめぐりの電話に出た時点でその言い訳通じないから」
「道具も持ち主に似るって言うじゃないですか？　俺に似て携帯も反抗期だから、ちょっと相手を選んじゃうんですよ。困ったやつです」
　清々しいほどの戯言をほざく秋太に、めぐりは「お～」と小さく手を叩いていた。
「秋太くん、お姉さんとお話しようか？　できれば二人っきりで」
「あ、俺は女性と二人きりになると、ストレスで胃痛が起こっちゃうんですよ。すみません」
　女性の部分をお前と言い換えているようにも聞こえる。
「ふーん、めぐりとは平気なのに？」
「先輩は癒し系ですから」
「私は？」
「侵し系ですかね。俺のプライバシーとか」
　ぶっと陽乃から噴き出す声が漏れた。それさっき見たと、雪乃を思い出しながら秋太は目の前の女性を見る。
「ぷはははっ、本当にバカ！　バカが居る～！」
「は、はるさん、笑い過ぎですから～」
　腹を抱えて笑い、机を叩いて笑う。雪ノ下陽乃が壊れだした。
「はぁ～久しぶりにこんなに笑った。やっぱ秋太は面白いね」
「罵倒されて笑うとか……変態だったんですね。近づかないください」
「もう、そういうところは私の妹と違うな」
「ああ、雪乃さんでしょ？　実はクラスメイトでした」
「ありゃ、知り合ったの？　あんたら二人は絶対に関わらないと思ったんだけどなー」
　まるで二人が知り合って欲しくないような口ぶりであったが、その言葉に反して陽乃はとても嬉しそうだった。
「おかげさまで。さっき、傍若無人な姉乃さんについて愚痴を言い合ったところです。仲良くできそうでした」

「姉乃さん……うん、いい感じだね！」
反応するところはそこかと、秋太が呆れる。そんな中、陽乃は何かを考えていたようで、思いついたかのように口を開いた。
「秋太と雪乃ちゃんはよく似てるよ」
「いや、どちらかと言えば、俺と貴女が似てますよ」
「……ふーん」
陽乃にしては珍しく、ずいぶんと間を置いた返答だった。めぐりもそれが気になったのか、「は、はるさん？」と心配そうに見ている。
「秋太の目には私達はどんな風に見えているのかな？」
問いかけているようで、聞いてはいない。秋太はなんとなくそう思った。
「じゃ、私帰るね～。秋太、今度連絡先変えたら、本気で怒っちゃうぞ。じゃーね」
ひらひらと手を振り、そのまま陽乃は消えていった。
「ホント、あの人、何しに来たんですか？」
「さ、さあ？」
急に帰ってしまった陽乃に、めぐりと秋太の二人はしばらく困惑していた。
◆
「謝罪を要求する。もしくは抗議する」
翌日、雪乃が登校してくると同時に、秋太はそう言い放った。
「姉が迷惑をかけてごめんなさい」
秋太の意図を察した雪乃が頭を小さく下げる。それを見ていたクラスメイトが、
「雪ノ下さんが頭を」
「あいつマジでなんなの？」
「お姉さまが……ぐへへへ」
「謝るゆきのたん萌え～」
国際色豊かなこのクラスでは次元を飛んでしまうものが何人かいた。
「なんだか騒がしくなったわね」

「とりあえず、後で」
クラスの様子の変化に気づいた二人は後で話し合おうと、その場は別れた。
放課後まで、雪乃と秋太がクラスメイト達の不躾な視線に晒されたのは言うまでもない。
◆
「え、姉さんが昨日来たの？」
「そう。しかも意味の分からないタイミングで帰ったし。文句言っておいて」
「それは構わないのだけど、そうするとまた来ると思うわ」
「うん、文句はなしの方向で」
放課後になり、秋太は雪乃とともに奉仕部にやってくる。まだ結衣も八幡も来ておらず、図らずとも二人きりだ。
「姉乃さんを止めて欲しい」
「姉乃……なんだか面白い呼び方ね」
姉妹の感性はやはり似ているのだと秋太は昨日の陽乃の言葉を思い出した。
「姉さんを止める努力はするけど、まさか昨日のうちに来るとは思わなかったから」
「努力なんていらないんですよ！　結果を俺は求めてる！　頑張りましたが許されるのは義務教育まで」
しっかりしてくれと無茶ぶりをする秋太。昨日、秋太が奉仕部を出て、そのすぐ後に陽乃と会っているのだ。雪乃が未来予知の能力でも持たない限り、二人の接触を止めることは不可能であった。
「そうね、姉さん対策となると……」
顎に手を当てて考える雪乃の姿はとても美しい。一枚の絵に収めてしまいたいほど、美的に綺麗だった。
「興味の対象を別に移すことかしら？　もしくは貴方が姉さんに好かれた理由を突き止めて、それを変えるとか」
「あの人が興味を持つものなんて知らないしなー。俺がなんでちょっかいを掛けられているのかもよく分からないし。めぐり先輩も弄ら

れることはあるけど、俺ほどじゃない。妹さん的にはなんかないの？
あの人の好き嫌い」
「……面白いことかしら？」
それ範囲広すぎーと秋太は机に突っ伏した。人の面白さなど、それこそ千差万別。他人が面白いと思うことでも、自分がそうとは限らない。
秋太は自分をクラスで人気のでるよう面白い人間ではないと思っている。
そう考えれば、陽乃の求める面白さは世間でいう所の面白さではないということだ。
「他に何か言ってなかったかしら？」
「他？　あー、俺と君が似てるって言ってたよ。で、俺が姉乃さんの方が俺と似てるって言ったら、なんか雰囲気が変わった」
「私と貴方が？」
「そう。まあ、見た目ってことはないだろうから性格的なことなんだろうけど、俺は君のことほとんど知らないから何とも言えない」
「私にしてもそうね。でも、貴方と姉さんが似ているのはなんとなく分かる。たぶん、姉さんもそう思ったから言葉に詰まったんじゃないかしら？」
雪ノ下雪乃は、秋田秋太のことをほとんど知らない。よく学校を休む人間であるということくらいだ。
ただ感覚的なもので、自分の姉と目の前の少年が似ている感じがした。どこがと言われれば、説明はできないが、文字通りの意味でそんな感じがしたのだ。
「でも、貴方はなぜ自分と姉さんが似ていると思ったのかしら？　似ていると言った私が聞くのもおかしな話だけど」
「んー、なんて言うか、たぶん姉乃さんは過去の俺がなるべきだった人なんだと思う」
「過去の貴方？」
雪乃は優しく問いかける。秋太は、「あくまで仮定の話ね」と前置きしてから、

「俺の親のことは昨日言ったでしょ？　学歴にコンプレックスを持ってるって」
「ええ」
「小さい頃から勉強しろって言われてさ、なんでって聞いたら、偉い人間になれないからだって言うんだ。まあ、間違ってはいないだろうけど、正解でもないと思う」
　世の中、学力がすべてではない。
「ただあの当時は、誇れるものなんかなかったし、そういうもんなんだと思って、勉強してたんだけど、小４だったかな？　どこかのパーティーに呼ばれたんだ」
　秋太の家は裕福であった。雪乃も秋太の言葉からそれはなんとなく分かっていた。陽乃が似ていると表現したのは、同じような境遇を過ごしたからなのではと、ここに来て考え始める。
「あの頃は、親が世界で一番正しいとか思ってた頃でさ、ガミガミうるさかったけど、一応は尊敬もしてた。でも、それが一瞬で無くなった」
「どうして？」
「正式なパーティーっていうのが、あれが初めてだったんだけど、親がさ、俺を紹介するとき、必ず付けるんだ、俺の自慢の息子だって」
　雪乃は困惑する。それはむしろ喜ばしいことではないのかと。
　そんな雪乃の疑問が分かったのか、秋太は苦笑し話を続ける。
「言葉の端々に俺が育てたって強調が入るんだよ。まあ、養ってもらっていた身だから間違いじゃないんだろうけど、俺があの人から教わったことなんて、勉強して偉い人間になれってことくらいだ」
「……」
　自分が親の見栄のために使われる。当時の秋太はなんとなくそれを感じた。
「子供を見栄に使ってまで誇らなきゃ自分を保てない親。あの時、ああ、絶対にこんな人みたいにはなりたくないなって思った。しかも、自分より上の人にはひたすら頭を下げるし、俺の自慢なんて絶対にしなかった」
　すべての人間に等しく子供を自慢するのであれば、親バカだ、でも

ちゃんと自分を見てくれていると思える。だけどそうではなかった。自分のプライドのための子供。それを理解したからこそ、幼き秋太は自分の親に失望したのだ。
「それからは親に従わない方法を考えた。で、今に至るわけ。でもさ、もしあの時、親に従う選択をしていたら、たぶん」
「姉さんみたいになっていたと？」
「たぶんね。親の期待に応えるためだけの自分。誰の人生なのか分かんないけど、そんな人間になっていたと思うよ。ま、仮定の話だけど」
「今、なんとなくわかったわ。貴方が姉さんに似ていると思った理由。でも、本当は全然似ていなかったのね」
「俺的には似てると思ったんだけど。同族嫌悪？　この場合適切か分からないけど、あの人を見たとき、ああームカつくわって思ったもん。たぶんあっちも俺をそう思ったんだろうね。だから嫌がらせをしてくるんだ」
　それは違うと雪乃は思ったが、何も言いはしなかった。
「貴方と姉さんの違いは鎖を切ったかどうかよ。ただ姉さんは鎖で繋がれていても、自由に動ける。長いのよ、鎖が。でも、私は鎖に縛られて生きている」
「親に反抗するって決めてる俺もある意味縛られてるからね。そういう意味では君と俺は似てるのかも」
「似てないわ、全然。私は私を知らないもの」
　雪乃はどこか弱々しかった。
「なんか重い話になっちゃったね」
「そうね。姉さん以外で、こんな真面目な話をしたのは、貴方が初めてよ。誇りなさい」
　それでも雪ノ下雪乃だ。儚げですらあった存在感を一瞬で戻らせる。
　ただそれは本当の自分を隠すための、偽りの姿でしかない。
「めっちゃ上から目線。雪ノ下家ってそうなの？」
「さあ、どうかしら？」
　クスクスと笑う雪乃。微笑む姿は弱くはあったが、それでも綺麗で

あった。秋太が、「美人は得だな」と思うほどには。
「こんな話をする予定じゃなかったんだけど、とりあえず姉乃さんが悪い」
「そうね、姉さんが悪いわ」
「文句言っておいて」
「ええ。任せてちょうだい」
その後、悪いのは全部陽乃という押し付け理論により、二人の話は終わった。
その晩、陽乃の携帯には、雪乃からいかに、陽乃が人の迷惑になっているかのメールが長々と送られてきた。
「……雪乃ちゃん？」
久しぶりに送られてきた可愛い妹からのメールの約８割が罵倒で占められていることに、陽乃は本気で困惑した。
冗談でなく、嫌われたかもしれない。陽乃は予想外の攻撃に、不安で眠れぬ夜を過ごすことになる。

4話　俺が貴女を嫌いなのは……

五月も終わり、肌寒さを感じていた季節から蒸し暑さを感じるようになった6月の初めの頃である。

仕事を終えて、寝ようかという時に、めぐりから電話が入った。

【秋太くん、明日って暇？】

【まあ、急ぎの要件はないですね】

【ホント！　それじゃあさ――】

――デートしよっか♪

その言葉を聞いた秋太が固まったのは言うまでもない。

◆

「ええ、分かってました、分かってましたとも。めぐり先輩が、男を誑かす悪女であることくらい分かっていましたよ」

「あはー人聞きが悪いことを言わないでほしいな～。私と二人でお出かけするんだから、デートでしょ？」

優しい笑みがそうさせるのか、いら立っていた秋太の心が平穏を取り戻していく。

ただ、前方に視線を向ければ、抑えられた怒りが湧き上がってくるのだ。

「ようこそ♪　大学の文化祭を楽しんでいってね☆」

なぜかバスガイドのコスプレをした陽乃が、二人の前で旗を振っている。

やはりこいつは敵なのだと、改めて秋太は認識した。

「はるさん、今日はお願いしますね！」

「まっかせなさーい。めぐりも総武高の文化祭に活かせるようにちゃんと見なさいよ」

「はーい！」

美少女二人がきゃっきゃと話している姿は、近くの男子たちには涎ものだった。若干、本気で興奮している者もいたが、警備員に呼び止められ、どこかに連れていかれる。

「で、機嫌を直しなさいよ。ほらほら」

陽乃が秋太にヘッドロックを仕掛ける。身長は秋太の方が幾分高いのだが、武術の心得でもあるようで、陽乃はなんなく秋太を押さえつけた。
「不快なものが当たってるんですけど」
「当ててんのよ。ふふーん、嬉しいでしょ♪」
揉みしだいてやろうかとも考えたが、それをすれば確実に通報されるので、我慢した。
「もーう、少しは反応してくれないとお姉さん、泣いちゃうぞ」
「好きでもないイケメンに、抱き着かれて嬉しいと言うなら、貴女に感謝を捧げましょう」
「ごめんなさい」
一部の男子が期待したが、陽乃は素直に謝ることに決めた。どんな男にでも愛想をふりまける彼女でも、見知らぬ男に抱き着かれるのは嫌だったようだ。
「めぐり先輩だったら良かったのに……」
陽乃から解放されて、秋太がそんなことを呟いた。
「えーそう？　なら……えい♪」
めぐりが秋太に抱き着いた。正面からはさすがに恥ずかしいようで、後ろから秋太を抱きしめる。
6月だ、服装も軽くなり、薄くなっている。背中に感じる、陽乃より少し小ぶりのめぐりのめぐりさんに秋太は顔を一瞬で染め上げた。
「ありがとうございますっ！」
「私との反応の差はなんなの!?」
「えへへ、ちょっと恥ずかしいかも」
天然のめぐりであっても少し顔を赤らめる。秋太は渾身のガッツポーズを決めるが、周囲の男性陣からブーイングが飛んだ。
「納得いかないんですけど」
「え、なに聞こえないー」
「クソガキ！」
「陽乃様がご乱心でござる～！」
めぐりの手を取り、魔王から離脱を試みる秋太。陽乃は普段付けて

いる仮面を忘れ、素で秋太たちの後を追った。
「あ、あれって、雪ノ下様だよな？」
陽乃が入学してすぐさま結成したファンクラブのメンバーが、感情を露わにする陽乃を見て呆然とした。
◆
「ハァ、ハァ、ハァ……魔王様、ヒールのくせになんて運動神経」
「ふーふーふー」
秋太もめぐりもベンチで力尽きていた。
「とりあえず、あんたは〆る」
「仮面が外れてますよ」
「大丈夫♪　映画の撮影とか言って誤魔化すから」
たぶん、本当に誤魔化せるのだろうと秋太は思った。そして陽乃主演の超展開映画が公開されるであろうことも頭をよぎった。少し見てみたいと思ったのは秘密である。
「それにしても意外と足が速いのね？　最後の方はめぐりを抱えているような状態だったのに」
「う～恥ずかしいよ」
「めぐり、貴女がさっきやったことを思い出しなさい」
「で、でもはるさん、乙女の秘密が……」
「いや、それは最初の段階で分かってます。大丈夫です、全然軽いですから。どこかの人と違って」
「ほーう、それは誰のことを言ってるのかにゃん？」
ぐいっと秋太の頬を陽乃が引っ張る。
「きょきょのきょいつ」
「秋太？　あんまり調子に乗ってると、この握り拳をぶち込むことになるわよ、この口に」
笑顔で脅迫する陽乃。ただ秋太の頬を掴んだ手は強まるばかりだった。
「ぎょ、ぎょめんにゃしゃい」
「分かればよろしい♪」
謝罪に満足した陽乃は、ようやく秋太を解放した。

「なんかはるさんと秋太くんって姉弟みたいですね」
「めぐり先輩、言葉の暴力って知ってますか？　城廻えぐりって改名しません？　人の心をえぐる的な意味で」
「しないよっ！　もう失礼しちゃうなー」
「失礼なのは先輩」
「本当に失礼なのはあんた。私の弟なんて、とても素敵なことじゃない」
肘で軽く小突く。
秋太を小突きながら陽乃は想像する。もしの世界を。毎日のように、しょうもないことで言い争って、けんかして、仲直りして、一緒に遊んで……そう思うと陽乃の顔は自然と緩んでいった。現実では起こらないもしの世界の話だ。
ただ次の一言が陽乃を現実に引き戻す。

「寝言は寝て言え」
こめかみがぴくりと反応した。なんのためらいもなく、そう言い切る男に、理不尽とは思ったが苛立ちを感じてしまった。もう少し可愛くできないものかと。
「ホント生意気ね。うちの大学の男子なら土下座して頼むところよ」
「そんな男子など退学させてしまえ」
陽乃の前にかしずく男たち。そんな嫌な光景を想像して、秋太は眉をひそめた。そしてそれが目の前の女性の手によって現実になることも理解すると、いっそう眉がひそまる。
「でも、ホント、なんで私に興味ないの？　私って可愛くない？」
まるでそれが当たり前のような質問。普通の女子がそんなこと言えば、「は？　何言ってんの？」と非難の言葉が飛ぶが、雪ノ下陽乃がそれを行うと不思議と自然にしか感じない。一般人とは一線を画す容姿をもつ陽乃にできる陽乃マジックである。
「そんな真剣に聞かれても困るんですけど」
「そうだけど、最初に会った頃から、そういう目で私を見たことないよね？　女の子は敏感だからそういう視線には気づくんだけど。ね、め

ぐり？」
「あ……はい、そうです……ね？」
「気づいてないらしいです」
「めぐりの純粋さが今の私には辛い」
　見栄を張ったためぐりだったが、二人にいち早く看破されてしまう。
　めぐりが気づかないのはモテないからというわけではない。人気投票に近い生徒会選挙で、大多数の支持を受けているのだから、彼女の容姿に関しては問題ないのだ。単純に、鈍いだけである。
「でも、秋太には私が可愛く映らないのかー」
「可愛くは映らないですけど、綺麗だとは思います」
「おろ、嬉しいこと言ってくれるじゃない」
　陽乃にしては珍しく、素直に喜んだ。笑顔が柔らかい。
「それじゃあ、私は魅力がないのかな？」
「さあ？　少なくともめぐり先輩の魅力を１００としたら、姉乃さんは５くらいですね」
「めぐりのあざとさに負けた……しかも大差」
「は、はるさん、私、あざとくないですよ～！」
「「それはない」」
「うぅ～ひどい」
　秋太と陽乃のコンビプレーにめぐりが撃沈した。
「まさか秋太にフラれるなんて……屈辱」
「むしろ好かれてると思われていることにビックリ」
「そりゃー、まあ、そうだけどさ」
　陽乃が口を尖らせながら、視線をそらす。
「なんか秋太を見てると、雪乃ちゃんを構ってるみたいで、ついね」
　てへっと可愛く笑う陽乃。それに対して、冷ややかな目を秋太は向けた。
「あ、それ、俺と妹さんが似てるってやつ、ちょっと議論になりました。ただそこまで仲良くなかったんで、お互いとも判断に困ったんです。で、最終的に姉乃さんが悪いという結論に落ち着きました」
「あのメールはあんたの所為だったんかい」

ばしっと陽乃が秋太の頭を叩く。
「もう二人とも、喧嘩はそこまでですよ。折角の文化祭なんだから、楽しみましょう♪」
天使降臨により、二人の言い争いは幕を閉じた。
◆
「さ、ここよ」
陽乃に連れてこられた場所には「ようこそ」と歓迎の文字とは真逆のどす黒い字で書かれた看板があった。
大学の教室を丸々使っているようで、中までは見えないがかなりの広さを誇っている。
「は、はるさん……」
「私所属のテニスサークルです」
「テニス関係なくない？」
デコレートされたこの一角は、なんというか禍々しさを放っていた。
「文化祭の出し物なんて、そんなもんでしょ。さ、二人とも、ごあんなーい」
ぱさりと捲られた黒いカーテン。秋太は魔王城に乗り込む、勇者の気持ちになった。
「あ、誓約書を書いてね」
「それ、文化祭のレベルちゃう」
「私はゴールで待ってるから♪」
陽乃は手をひらひらと振りながら去っていった。
入る前から涙を流すめぐりを連れて、秋太は魔王城に足を踏み入れる。
冒険の始まりだ。
◆
「ハア、ハア、ハア。どうなってんの？」
「……」
めぐりは開始早々に気絶し、秋太の背中に負ぶさった。秋太はめぐりを背負いながら、魔王城、もといお化け屋敷を制覇したのだが、恐

怖よりもその長さに驚きを隠せなかった。
「光のない本当の暗闇が一番怖いって、この前、心理学専攻の子が授業で聞いたんだって。だから試してみました♪」
陽乃が用意したお化け屋敷には脅かし役がいなかった。入る前の演出で、お化け役がいると思い込んだ客たちはただ暗い中を恐る恐る歩く。ルートは細く左右が壁で挟まれているため、脱線することはないのだが、どう仕切ればこうなるのかと、ひと教室では収まらないその長さに、精神的疲労と同時に肉体的疲労を感じる。
光という光が消し去られているため、本当に真っ暗なだけのお化け屋敷だ。
ただ自分が進んでいるのか、それとも戻っているのかも分からない未知の感覚に、客たちは出口にたどり着いてすぐ、力尽きた。秋太もその一人だ。めぐりを背負っていた分、通常の倍は疲労感を感じたことだろう。
お化け屋敷を出ると、めぐりを休憩室にあったベンチで休ませ、秋太も体の力を抜いて、背もたれに寄りかかる。直接ベンチで寝かせるのは可哀想だからと、めぐりには膝枕をした。
（本当は俺がしてもらいたい）
青白い顔で魘されるめぐりを見れば、そんなお願いもできないが。
「どうだった？」
「まあ、確かに怖かった。めぐり先輩のめぐりさんを背中で感じて、やばかった」
「エロガキ」
「健全な男子と言ってください。むしろ反応しない方が失礼」
「私に対して謝れ」
「あと１００年くらいしたら考えます」
「それ私死んでるから」
「たぶん、貴女は生きてると思う」
殺しても死ななそうとは思っても口にしなかった。
「もう少し、秋太が慌てるところが見たかったんだけどなー。それで私が優しく膝枕してあげるの。今のめぐりみたいに」

立場が逆ですけどねと秋太が苦笑する。
「それでお姉ちゃんの偉大さを知った秋太が、私に頭を下げるのであーる。ごめんなさいって」
「うざっ」
心の気持ちが思わず漏れた。
「生意気」
ぐりぐりと拳を秋太に当てる陽乃だったが、すぐに止めて、空を見上げた。
それからしばらく沈黙が続く。
陽乃は空の一点を見ているだけ。特に話す用がない秋太は、めぐりの看病に徹した。
「秋太がさ、私と似てるって言ったの、覚えてる？」
無言の時間が5分ほど続いたときのことである。陽乃が視線を空に向けたまま、口を開いた。
「記憶力は良い方なんで」
「あれさ、結構ビックリしたんだよね」
「まあ、珍しく沈黙しましたからね」
陽乃はその時の自分はきっと間抜けな顔をしていただろうと、ふふっと笑った。
「秋太はさ、もう親離れしてるじゃない？」
「まだです。今年中に返済して、晴れて自由の身です」
「あらもう？　でもさ、親から離れようとする秋太と、親の言うことに従った私。一体、どこが似てたのかなって」
「なんですか？　人生の先輩がお悩み相談ですか？　俺、人生経験豊富じゃないですよ」
「茶化さないの」
陽乃が視線を下げ、秋太の方を向く。その表情はいつもの陽乃ではなく、真剣そのものだった。
「いつもはそっちが茶化すくせに……。うーん妹さんとも話したんですけど」
「ぶーぶー、そこで雪乃ちゃんの名前を出すのは頂けないなー。お姉

さんポイントマイナス１０点」
「黙りますよ？　つうか茶化すなって言ったのは誰だ」
「ごめーん。さ、続けて、続けて」
「まあ、感覚的なもんですけど、初めて見たとき、ムカつくと思いました」
「あ、それ、私も思った。苛めてやろうって」
　陽乃がケラケラと笑うが、目だけは笑っていなかった。秋太の言葉を待っているかのように、視線だけは秋太から離さない。
「俺が貴女を嫌いなのは、無駄にちょっかい掛けてくるのがうちの親みたいだったから。でも、俺が貴女にムカついたのはたぶん嫉妬」
「……」
「小さい頃に、情けない親を見てこうはなりたくないって思ったし、親の言うとおりにするもんかって思った。でも、陽乃さんを見たとき、親の望んだ俺はきっとこうなんだなと思った」
　秋太は膝元で唸っているめぐりを優しくなでる。陽乃はその様子を黙ってじっと見ていた。
「人当たりが良くて、誰にでも優しくて、それでいて優秀。ただその用意された外面が親のためでしかない」
「自分がないって言いたいの？」
　酷く低い声だった。
「いや貴女は自己主張が激しいほど持ってますよ。自分を失くす環境で、それでも自分ってものを持ってる。それは俺にはなかったもので、嫉妬した理由なんだと思う」
「私は親に繋がれているのに？」
「繋いでる鎖で逆に縛ってそうです。妹さんが言ってましたよ、姉さんの鎖は私と違って長いって。さすがは妹って感じですよね。よく分かってる」
　鎖が長ければどっちが縛っているのかは分からない。
　陽乃は黙って繋がれているようなそんなか弱い存在ではないのだ。
「だとすると、私と秋太が似ているとこってないよね？　どこが似てると思ったの？」

「性格が悪くて、意地っ張りなところ。意地の張り方が違ったけど、たぶん根っこは同じ」
親に逆らうと決めた秋太と親に従うと決めた陽乃。形は違えど、自分の決断に責任を持っている。
「はぁー？」
「顔、顔。美人が台無しになってますよ」
陽乃はあんぐりと口を開け、だらしない表情をしていた。秋太がそれを指摘すると一瞬で美少女に戻ったが、それでも困惑の表情は取りきれていない。
「性格の悪さは言うまでもなく」
「私の外面は完璧よ。あそこでこっちをちらちら見ている男の人にだって、愛想を振りまいてみせれるから」
陽乃が見た先に、建物の柱に隠れて陽乃を観察している男がいた。なぜその格好で文化祭にというような、眼鏡にハチマキ、アニメキャラクターのプリントされたシャツに、たぼたぼのズボン、極めつけは何が入っているのかわからない、大きなリュック。オタクというか変質者一歩手前の男が陽乃を陰から凝視している。
「さすがに、あれは無理では？」
「……い、いける……はず……え、でも……」
「まあ、俺としては面白そうなんでどうぞご勝手にと言いたいところですけど、今は外面の話じゃなくて、内面の話です。最悪でしょ？」
「黙秘権を行使します」
「沈黙は肯定ってことで。で、後は今のがいい例ですけど、変な意地を張り通すじゃないですか。普通なら、それする？　みたいなことでも、やると決めたらやっちゃうところ。その辺りが似てますかね」
「似てない……わよ」
ぷいっとそっぽを向く陽乃。めぐりが言っていた、雪ノ下陽乃の子供っぽさが何も意図することなく自然に出た。
陽乃もそれを自覚したが、恥ずかしくて顔を元に戻すことができない。
「意地は張り通すもの。そう思いません？」

「そうね。そこは共感してあげる」
「なんで上から目線？　やっぱり雪ノ下家ってそうなんですか？」
「さあ、どうかしら？」
いつか見た雪乃と似た笑顔。やっぱりこの姉妹はよく似ている。
「貴女は貴女らしくしてください。ただ俺に迷惑は掛けないように。ホント、細心の注意を払ってください」
その後、秋太と回復しためぐりは陽乃に引っ掻き回された。
一番最悪だったのが、陽乃が無理やり参加させた演劇だ。「秋太に傷つけられたのがなんかムカついた」という理由で、部外者である秋太の参加が決まったのだ。
ロミオとジュリエットのオマージュ。陽乃が演出している割に普通だったのだが、とんでもない爆弾を終盤で投下した。
「私が辱められても、心だけは貴方に奪われないから!!」
迫真の演技だったが、劇の内容に一切関係ないセリフ。陽乃目当てで見に来ていた益荒男の皆様たちが、一瞬で殺気を漲らせた。
秋太に言われた通り、陽乃が陽乃らしく振舞った結果だ。
「この話はフィクションではありません、リアルです」
涙を流しながら、儚そうに最後の一幕で言い放つ。その日、秋太は大学中の男を敵に回し、命からがら逃げだしたのだった。
「魔王、許すまじ！　必ず復讐を！」
大学の文化祭なんて二度と行かないと心に決めた秋太だった。

5話　鬱陶しいから……

「はぁ～、あとひと月もすれば夏休みか～」
「俺としては早く来てほしいけど、受験生だと大変ですよね」
　日課となりつつある生徒会室での何気ないやり取り。めぐりが用意してくれたお弁当に感謝しながら、秋太は作業を進めている。
「私は推薦を狙ってるから、この夏が勝負なんだよねー」
「ねーって割に余裕そうですけどね」
「見えないところで努力してるんだよ」
　ハチマキをして必死に勉強するめぐりの姿が秋太には想像できなかった。
「秋太くんは？」
「俺ですか？　まあ、勉強は苦手じゃないです。この前のテスト、学年総合2位。実はやればできる子なんです」
「秋太くん、見かけによらず頭いいんだね」
「先輩にだけは、見た目で頭どうこうは言われたくない」
「なんでっ!?　もぅー怒った！」
　秋太が食べていた弁当をめぐりは奪い取る。
「ごちそうさまでした」
　しかし、すでに秋太は食べ終えており、弁当箱を返しただけになった。
「むぅー」
「先輩、そのあざとさ、大学行っても失わないでくださいね。俺は応援してます」
「あ、あざとくないからっ」
「ふぁいと」
「もうっ！」
　楽しく昼休みを終え、午後の授業も恙なく終了し、さて帰るかという時になって、長い黒髪の女性が近づいてきた。
「ちょっと良いかしら？」
　彼女が動けばクラスが騒ぐ。わさわさとクラスの至る所で会話が

開始される。
「とりあえず、クラスを出よう」
うるさくなったクラスから逃げるように、二人は奉仕部の部室にやってきた。
「で、話なのだけど……姉さんを襲ったって本当なのかしら？　昨日電話が来たのだけど」
あんにゃろ～！　と心の中のリトル秋太が怒りの声を上げる。
「オレアイツキライ。オッケー？」
「なぜ片言なのか分からいけど、姉さんの言ったことがウソなのは分かったわ。だ、だからその、笑い方止めてくれないかしら？　怖いわよ」
どちらかと言えば、雪乃も人に冷たい印象を与えてしまう方であるが、今の秋太はその雪乃からしても怖いと思えるほど、冷たかった。
「妹、とりあえずあのバカ女の写真があったら貸してほしい。俺の持てるすべての技術を使って復讐してやる」
「……ちょっと返答に困るお願いね。それと私には雪ノ下雪乃という名前があるのだけれど？」
「それはごめん。雪ノ下……だとアレと被るから、ゆっきーで良い？」
「……許しましょう。私のことをあだ名で呼ぶなんて光栄なことなのだから、胸を張って生きなさい」
顔を真っ赤に染めて、視線を右往左往する雪乃。無駄に張った意地の所為で、自分が恥ずかしくなるという自爆。
「照れるくらいなら言わなきゃいいのに。まあ、それはおいておいて、アレの写真を今度持ってきてね」
「照れてなんかいないわ……それで、姉さんの写真をどうする気かしら？　ないとは思うけど……卑猥なことに使うのはダメよ？」
「俺を変態にする気か。違う、合成写真を作って、アレに送り付ける。今頭の中に思い浮かんだのは、ランドセルを背負った大学生。他にも色々と作って見せる」
「ぜひ、協力させてちょうだい」
雪乃が珍しく満面の笑みを浮かべた。二人が手をがっちりと結び、

奇妙な連帯感が生まれる。
「そう言えば、他のメンツは？」
「そ、その事なのだけど……少し話を聞いてもらえるかしら？」
なんとなく雪乃が自分を呼び出した理由がこちらじゃないかと、秋太は思った。ダシに使われた陽乃が哀れにも思えなくなかったが、いや勘違いだと自分を律する。
それから雪乃は語り始めた。
「由比ヶ浜さんが部活に来ない？」
「ええ。どうやら職場見学の時に比企谷君と何かがあったみたい。私はクラスが違うから状況はよく分からないのだけど」
「ふーん。でもそれは二人の問題じゃん？」
二人の関係がこじれたからと言って、他の人間が介入しても状況は好転しないだろうと、暗に言葉に含めた。
「もし二人の仲互いの原因が第三者にあるとしたら、どうかしら？」
そう尋ねた雪乃は少し思いつめたような表情をしていた。
「なに？　ゆっきー争奪戦でも行われたの？」
「……なぜそんな話が出るのかしら？」
「今のタイミングで第三者なんて、ゆっきーでしょ。で二人が喧嘩するとしたら、ゆっきーを取り合うしかない。全く、悪女め」
「……はあ～。貴方って鋭いのか鈍いのかよく分からないわね」
それから雪乃はしばらく無言だった。手を握ったり、視線を動かしてみたり、挙動不審以外の何ものでもないが、秋太はちょっと面白くなったのか、そんな雪乃を微笑ましく眺めていた。
「ちょっと良いかしら？」
ちょうど5分。やっぱり姉と似てるなと先日の陽乃とのやり取りを思い出す。
雪乃は秋太の近くに椅子を運び、そこに座る。少しだけ躊躇いがちだったが、「そういう乙女な感じいらないから」と割と酷い言葉を投げかけられ、ポツポツと話し出した。
「ふーん、比企谷くんは一年前に犬を助けて事故に遭っていると」
「そ、そうね」

「で、その犬の飼い主が由比ヶ浜さんで、比企谷――言いづらい、八幡を轢いた車に乗っていたのが、ゆっきーであると」
「……」
「状況だけ聞けば、犬のリードを放した由比ヶ浜さんに原因があるし、ゆっきーは乗っていただけだから問題ないと言えばないけど」
　秋太の呆れた目に雪乃は耐えきれず、俯いてしまった。
「負い目を感じてるなら、謝れば？　というかそんな事件の当事者たちがここに集まるってどんな偶然？」
「そ、それは私も驚いているわ。平塚先生が比企谷くんを連れてきたときには、動揺を隠すのに必死だったもの」
「いや、たぶん失礼極まりない対応をとっていたと思うけど？」
　雪乃と八幡の出会いがどんなものだったかは秋太には分からない。ただ、初めて奉仕部のメンバーと会った時のやり取りをみれば、罵倒で会話が展開されていたのは理解できた。
「一年前のことを今更言われても、八幡は困ると思う」
「うっ」
「どうせあれでしょ？　八幡の入院先に行ければ良かったんだけど、親に言われて行けなかったんでしょ？」
「秋田くんは私の家のことを知っているのかしら？」
「いや、良くは知らないけど、お金持ちでしょ？　で、大抵の金持ちは面子を大切にする。事件の当事者だけど、乗っていただけだからお前に罪はないとかそれっぽいことを言って、親が勝手に話を進めた感じかな。騒いで事件を大きくすればゆっきーの学校での立場はなくなるし」
「……貴方、私の家に監視カメラでも付けているのかしら？」
　秋太の驚異的洞察力に驚く雪乃。そう言えば、初めて会った時もそうだったなとひと月以上前のことを思い出した。
「そんなもの付けなくても予想くらいできる。家の親も似たようなもんだし」
　秋太の家もそれなりに裕福であることは雪乃は知っている。だが、自分と秋太が似てないと思えてしまうのは、自分が親を避けながら、

頼ってしまっているところ。そう思うと、自分が情けない。
「まあ、今更と言えば、今更だけど、ゆっきーはどうしたいの？」
「わ、私は……」
言葉に詰まる雪乃。そんな雪乃を見て、秋太は彼女の核心を突く言葉を告げる。
「八幡に嫌われたくないの？」
俯いていた顔をぱっと上げた雪乃。考えないようにして、でもどうしても考えてしまっていたことだ。
最近までであれば、そうでもなかった。クラスが違うのだから二人が関わることは皆無と言っていい。
でも二人は関わってしまった。そして、少しずつ過ごす時間を心地よいと思い始めたのも事実だ。
もっと早くに謝るべきだったのかもしれない。そうすれば、こんなに思い悩むこともなかった。
結衣が居て、八幡が居て、そこに自分がいる。今のこの場は、今までで一番心地よい場所なのだ。
だから、それを失うことが怖かった。
八幡に嫌われることで、この場がなくなるのが嫌だった。
そして何より。ひどく利己的な考えをしてしまう自分が――とても嫌だった
「ゆっきーは、卑怯で臆病だね」
ずしりと圧し掛かる言葉。呆れたのか哀れんだのか、それとも蔑んだのか。どれにしても今の雪乃には判断がつかない。
「そしてバカだ」
胸が苦しくなる。酷く気分が悪くなる。自分が悪いということは分かっていても、それを口に出せなかった。親に反発して、八幡の病室まで行って、頭を下げるべきだった。
それが出来なかったのは自分が弱くて、卑怯だったから。
親を言い訳に、進んで楽をしてしまった。
「雪ノ下雪乃」
初めて、しっかりと名前を呼ばれた気がした。ただ雪乃にはそれが

終わりを告げる言葉にしか聞こえなかった。
涙があふれ出るのを止められない。こんなにも胸が締め付けられるような想いは初めてだ。辛い、痛い、苦しい……逃げたい。
雪乃はそう言った感情に支配されてしまった。
ただ秋太はそんな雪乃を見て、「泣くなよ」と呆れ、隣に座る彼女の肩にそっと手を置いた。
「とりあえず、謝ってこい。全てはそれからだ」
「へ？」
「へ？　じゃないよ。とりあえず鬱陶しいから謝ってこい」
「鬱陶しい……」
雪乃のガラスハートががしゃんと砕ける音がする。
「それで八幡に嫌われようが、その所為で部が崩壊しようが、それはそん時考える」
「で、でも……」
ここに来ても躊躇ってしまう雪乃。
ただ秋太はそんな甘えは許さない。
バシッと雪乃の頭に手刀をいれた。
「っ！」
「でもじゃない。ここで謝らないで、曖昧な関係で済ませたら、いつかは破たんする。遅いか早いかの差でしかない。だから選べ」
「……」
「自分の人生だから、どう生きようが君の自由。でも、自分に嘘を吐きながら生きていくのは、楽しくないぞ？　情報源（ソース）は俺」
「自分に嘘をつかない……」
「もし、八幡が拒絶するようなら、その時は俺が奉仕部の存続に尽力しよう。俺、実はできる子なんです」
壊れたのなら、直せばいい。秋太はそう言った。
「グダグダ悩むのは、悩める権利を得てからだ。今の君にはその権利すらない。権利を主張するなら義務を果たせ。君は最低限の義務すら果たしていない」
「私の義務……」

「あ、でもホントに壊れたら、そん時はごめんね」
「……どうして最後まで格好良くいられないのかしら？　最後の言葉で台無しよ」
　えーっと子供のような声を上げる秋太。雪乃はふふと小さく笑った。
「まあ、八幡も男だし、ゆっきーの初物でもあげてくれれば？」
「……訴えるわよ。貴方はデリカシーという言葉をその緩んだ頭に入れておきなさい」
「初ってところは否定しないんだ」
「……」
　絶対零度の視線が秋太を貫いた。
「貴方をセクハラで訴えるのはまた今度にしましょう。まずは私の義務を果たさないと」
「うんうん。あ、訴訟はなしの方向で」
「貴方、本当に変なところで気を遣うのね。小学生みたいなやり方だけど……」
　雪乃は八幡たちの元に歩き出す。そしてドアを閉める直前、
「でも、嫌いじゃないわ。自分で選択することができたから。ありがとう。あと、私が泣いたことは忘れなさい」
　雪乃はそう言って部室を出て行った。彼女の表情はいつものように凛とし、それでいて楽しそうに笑っていた。
「あれがツンデレ。ツンデレアプリでも作ってみるか？」
　ツンデレ測定メーターを開発できれば、自分の懐がかなり潤うのではないかと、しょうもないことを考えて秋太は奉仕部を出て行った。
　そしてその日の夜、秋太の携帯の着信音が鳴る。
【秋太、雪乃ちゃんを襲ったってホント？　それにしては上機嫌だったんだけど……】
【……ねえ、雪ノ下姉妹って、なんで俺を犯罪者にしたがるの？】
　姉と同じ手法を使った妹に、やっぱり似ている姉妹だと納得した。ついでに雪ノ下姉妹は自分の感情をさらけ出されると、逆恨みしてくるとも分かった。

「雪ノ下家、許すまじ！」

◆

「ふふ、もう俺頑張っちゃうぞ♪」

「秋太くん、笑顔でパソコン打つのやめようか。怖いよ～。しかも指が速すぎるし」

雪ノ下家に復讐を誓った秋太は、その日の夜から精力的に動いていた。徹夜したせいで、午前中の授業の記憶などないが、授業時間という名の仮眠時間を経て、今意識が覚醒している。

「俺の本気が雪ノ下に負けるとお思いで？」

「とりあえず、人の話を聞こうか」

テンションがおかしくなった秋太を、めぐりは強制的に黙らせた。

「ふぅー。めぐり先輩の淹れてくれるお茶は最高です」

「あはは、それは嬉しいな。秋太くんが普通に戻ってくれてよかったよ」

「何を言ってるんですかー。休憩したら作業を再開しますよ。ええ、あのバカ姉妹に裁きの鉄槌を下してやります」

笑顔でとんでもないことを言う秋太には、めぐりはもう諦めた。

「でも、具体的には何をするの？」

「今、画像編集のプログラムを組んでます。従来の編集ソフトではできなかった、あんなことやこんなことが可能になってしまう一品です」

「……秋太くん、それを製品化すれば、簡単にお金稼げるんじゃ」

「めぐり先輩はロマンってものを分かってない。俺は趣味でお金は稼がないんですよ」

めぐりには秋太の仕事と今やっていることの違いがちっとも分からなかった。故に、秋太の言っていることなど全く分からない。

「ほどほどにね……」

「了解です」

本日の生徒会室もいつもと変わらない。

◆

それから放課後になって、秋太は素早く教室を出た。
雪乃としては、昨日の背中を押してくれたお礼をしたかったのだが、本日は秋太が朝からずっと寝ていて、それでいて起きたらすぐに消えてしまうので、話しかけるタイミングがなかった。
よし、放課後ならとタイミングを見計らっていたのだが、秋太が荷物をまとめて走り去ってしまったので、何もできなかった。
（初めてね、自分から異性を追いかけるのは）
今までは、自分の容姿を目当てか、姉への取り次ぎ目当ての男たちが寄ってきたものだった。少し言葉を交わせば勝手に去っていく存在。自ら追いかけるなど一度もしたことがない。
でも、今日は違った。
少し前から気になっていた存在だった。自分と違い、自分というものをはっきり持っていて、そのために行動している。話してみれば、なるほど納得だと、今までいない異性だった。
（自分に自信を持っているところが、姉さんと似てる。だから彼が気になるのかしら？）
雪乃にとって会話をするほどの異性など、そう多くはない。親類を除けば、この学校にすべて集まっていると言っても過言ではない。
秋太はそのうちの一人で、とても気になる存在だ。別の意味で気になる存在である男は部活にいるのだが、秋太に対する〝気になる〟とは大きく違っているように感じる。
（……部活に行きましょう）
初めて感じる感情に、戸惑いながら、雪乃は教室を出て行った。

◆

「比企谷くん、呼んでくれる？」
「比企谷？　うちにそんな奴いたっけ？」
二年Ｆ組に走ってやって来た秋太は、ドア近くにいた男子生徒に八幡を呼ぶようにお願いした。だが、おかしなことに、そんな奴はいないという。自分がクラスを勘違いしたのかと、別のクラスに行こうとすると、目的の人物が教室を出てきた。
「いるじゃん、比企谷くん」

「はぁ？　ヒキタニだろ？」
「……」
なぜ秋太がここに居るのか分からない八幡は驚きのあまり、黙ってしまった。決して、自分の名前がクラスメイトに知られていないのを、秋太に知られて無言になったわけではない。
男子生徒たちは「あいつ、友達居たんだな」と陰口を叩きながら、離れていった。
「悪いな、友達扱いされて」
「別にいいよ。むしろ俺たちは大親友さ」
「……壺なら買わんぞ。俺は人を信用していない」
八幡が今までどんな友人関係を築いてきたのか、なんとなく察する秋太だった。
「俺、詐欺師ちゃう。今日は八幡にお願いがあって来たんだ」
「いきなり名前呼びかよ。ビックリして友達だと勘違いしちゃうだろうが」
「とりあえず友人うんぬんは置いておいて、おおっと」
秋太は何かを発見すると、八幡を置いて走り去る。
新手の苛めかと八幡が帰ろうとすると、「待ちなさい」とすぐに戻ってきた秋太によって捕まった。
「なになに？　私、なんで連れてこられたの？」
「由比ヶ浜を捕まえに行ったのか。斬新な苛めかと思ったぞ」
「二人にはＹＥＳか、はいの二つの選択肢がある」
「それ一択な」
「はい、由比ヶ浜さん、とりあえずはいと言いなさい」
「はい？」
訳も分からず、結衣は返事をした。
「ということで、二人には俺に協力する義務が発生したわけだが」
「いや、由比ヶ浜はそうかもしれないけど、俺は何も言ってませんよね？」
「八幡、男は小さなことを気にしてはいけない義務があるんだ」
勢いに任せた秋太によって、二人は連行された。

訳も分からず生徒会室に連れてこられた八幡と結衣。
「めぐり先輩、ちょっと世間話しますんで、気にしないでください」
「う、うん」
見知らぬ生徒が急に入ってきて驚いためぐりだったが、秋太の言う通り気にしないことにした。昼休みに行っていた作業の延長だろうとなんとなく理解したからだ。
「で、俺たちは何の用で連れてこられたの？」
「由比ヶ浜さんは、携帯を出しなさい。さあ、早く、疾く」
携帯を出せと言われて素直に従う女子高校生がいるだろうか、いやいな――くなく、結衣は、戸惑いながらも差し出した。
「お前、将来絶対に悪い男に引っかかるぞ」
「え!?　なんで!?」
「携帯は乙女の秘密でいっぱいだ。それを差し出すなんて、悪い男からすればカモだろ」
「ヒッキーまじキモい」
二人のやり取りを聞き流し、秋太は結衣の携帯と自分のパソコンをつなぐ。
そして目的の物を見つけると、パソコンにコピーし結衣に携帯を返却した。
「何したんだ？」
八幡が警戒した目で、秋太を見る。この状況で結衣に不利益なことをするとは思わなかったが、何をしたかくらいは聞いておくべきだと、さり気ない優しさを見せた。
「ゆっきーの写真をコピーさせてもらった。これで俺の勝利は確定した。さすが由比ヶ――言いづらいからガハマちゃん。良くやったよ、ゆっきーとの写メを撮っていたね」
「なんか変なあだ名付いたしっ！」
「驚くところはそこじゃねぇよ。つうか秋田って雪ノ下と仲良かったんだな。あ、あだ名で呼ぶとか」
顔を赤らめる八幡に、結衣が頬を膨らませる。

「ううん、そんなに良くないよ。あだ名で呼んでるのはゆっきーのお姉さんの名前を絶対に呼びたくないから。二人とも雪ノ下だと被る」
「そんな理由!?」
「むしろ、そんな理由であいつが認めたのがすげぇよ」
「誇りなさいとか言っていたけど、今はどうでも良い。ふふふ、ガハマちゃんはとりあえず帰っていいよ」
「なんか意味も分からず帰されるんですけど!?」
「なら俺も帰っていいですかね？」
「八幡には仕事がある。今から俺が作る画像をあのいけ好かない雪ノ下に見せつけてやるのだ。こう、恥辱を与える感じで」
「話がぶっ飛び過ぎてよく分かんないですけど」
　八幡の言葉を無視して、秋太はパソコンを超高速で打ち出した。自分専用にカスタマイズした画像編集ソフトを使い、結衣から奪った写真の加工を始める。
　驚くべきは、手だ。本来、画像編集にはペンタブレットを使うのが普通だが、そんなものでは生ぬるいと言わんばかりに、すべてキーボードで行っていた。それをするためのプログラミングを作るあたり、秋太の本気度が見える。
　八幡と結衣はその異様な光景に絶句し、しばし呆然としていた。
「はは、やっぱり驚くよね」
　生徒会の仕事をしていためぐりだったが、八幡と結衣が固まったのを見て二人に話しかけた。ちょんちょんと手招きをして、二人を自分の元に呼び寄せる。さりげにお茶を用意するあたりが彼女の素晴らしいところだ。
「あ、どうもありがとうございます」
「どうも」
　二人はめぐりにお礼の言葉を告げる。
「君たちは秋太くんのお友達なのかな？」
「えーっと」
　結衣が返答に困る。秋太と会ったのは今日を除けば一度しかなく、その時も自己紹介をした程度だ。少なくとも友達と言える関係を築

いてはいない。
「違います。まあ、知り合いってところですかね」
「まあ、そうだろうね。そんな感じがしたし」
少し言いづらそうにしていた結衣に代わって、八幡が答えた。
その答えに納得した様子で、めぐりは小さく笑った。
「城廻先輩は」
「え、なんでヒッキー名前知ってんの、まじキモい」
「……城廻生徒会長は」
八幡がそう言って、結衣は顔を真っ赤にしてめぐりに謝罪した。学生の代表であるめぐりは行事の度に人前にでるため、普通の生徒は彼女の名前ぐらい知っているのだが、結衣の乏しい記憶力ではその名前を覚えることを許さなかったようだ。
「秋田とどういう関係で？　というか秋田は生徒会の一員なんですか？」
「違うよ。秋太くんはあの通りパソコンに強いから、記録とか生徒会関係のネットワークとかで協力してもらっているんだ。私と秋太くんは、友達……かな？　だぶんそれが一番ピッタリだと思う」
「へぇー。あ、でも先輩と接点があったことが意外です」
結衣が素直な感想を述べる。普通に考えれば、秋太とめぐりに接点などないからだ。
「平塚先生の紹介でね」
「なんなのあの人。ホントどんだけ色んなところに関わってんの？」
自分を奉仕部に引き入れたり、生徒指導をしたり、ホント何でもやってるなと八幡は静の働きぶりに困惑した。
「できたぞっー！」
秋太が非常に満足げな表情でガッツポーズを決める。
結局何をしているのか分からなかった、八幡と結衣は秋太のパソコン画面をのぞき込んだ。
「か、かわいい」
「……」
結衣は素直な感想を、八幡は無言で頬を赤く染め上げた。あまりに

集中しているのか、瞬きを一切せずに、画面の中にいる幼女を見つめ続ける。
「ヒッキー」
結衣の冷たい声が、八幡に届いた。いつもの「まじキモい」ではなく、ただ名前を呼んだだけ。それなのに、ひたすら謝りたくなる威圧感に八幡は黙って頭を下げた。
画面の中には幼女が居た。幼稚園服を着て、胸のあたりには「ゆきの」と可愛い字で書かれた名札をつけ、ニッコリと笑う幼女だ。
現在高校生である雪乃をそのまま小さくしたような子で、非常によく似ていた。
「ふふふ、これが俺の実力です」
不敵に笑う秋太は気持ち悪かった。
秋太は結衣から奪った雪乃の写メを元に、データを登録。骨格の分析から始まり、成長曲線の計算まで緻密に仕上げ、幼き頃の雪乃を作り上げた。
冷たい印象を与えてしまう雪乃であるが、画面の中ではとても可愛らしく笑っている。八幡の赤面がなかなか戻らないのが良い証拠である。
「ちなみにこんなのもあります」
ぽちっとキーを押すと、魔法少女のコスプレをした雪乃が現れた。こちらは高校生版である。
「ぐはっ」
八幡が多大なるダメージを負い、膝をつく。普段の雪乃では想像できないような可愛らしい笑顔を浮かべ、魔法ステッキを持ちながら、キラキラしているのだ。アニメプ〇キュアを愛する八幡からすれば、もう天使が降臨したようにしか見えない。
「ゆきのん、超可愛い！」
純粋な結衣はただただ雪乃の可愛さにやられていた。汚れている八幡とそうでない結衣の決定的な差がここにはあった。
「……秋田、お前、とんでもない奴だな」
「言っておくが、俺の実力はこんなものではない。変顔のゆっきーと

かもできちゃうぞ」
「……すげぇ見たい」
「だろ？」
　秋太が可能性を提示すると、八幡の関心が膨れ上がった。普段、睨むか嘲笑するか、侮蔑の表情くらいしかない雪乃の表情が自由自在。年齢設定も自由自在。秋太という神に八幡は屈服することを選んだ。
「とりあえず、これをゆっきーに見せつけてきて。態度次第ではデータを消すことを約束しようとだけ言っておいて」
　八幡のアドレスに、秋太は画像を送り付ける。
「了解だ」
「ちなみに八幡の携帯に送ったそれは、五分経ったら勝手に消えるから」
「なにその凄い技術⁉」
「キモい」
「由比ヶ浜さん、もう少しだけ感情を込めていただけませんか？　真顔でそんなこと言われちゃうと、八幡くん、現実世界からＲｕｎａｗａｙしちゃうよ」
「キモ」
　結衣の一言に八幡は再度膝をついた。八幡は結衣の侮蔑の視線に晒されながら、生徒会室を出て行った。
　二人が出て行ったあと、どんな画像なのか気になっていためぐりがパソコンをのぞき込んだ。
「わぁ～ホント、可愛いね。雪ノ下さんって綺麗ってイメージだけど、これは本当に可愛い」
「めぐり先輩もやります？」
「いやいやいやっ！　ちょっとこれは恥ずかしいかな」
　照れるめぐりだったが、少し興味がありそうだった。
　それからしばらくめぐりと話していたのだが、タッタッタと駆けてくる足音が聞こえてすぐ、生徒会室のドアが勢いよく開いた。
「秋田くん、裁判の日付のことなのだけど？」
「俺の名誉毀損の件ですか？」

「私の名誉毀損の件よ」
　にらみ合う二人。多少疲れているのか、現れた人物は肩で息をしていた。
「あ、雪ノ下さん」
「こんにちは、城廻先輩。ただ今は用があるので、その男を貸してもらえないでしょうか？」
「あはは、今回は秋太くんの悪ノリが過ぎるみたいだしね」
「……城廻先輩、画像を見ましたか？」
「あはは……ごめんね」
　可愛く謝るめぐりに雪乃はそれ以上何も言えなかった。
　ぶつけようのない怒りは、こいつに向ければいいと秋太を睨みつける。
「データの消去を行えば、見逃してあげるけど？」
「ほほう、ネット社会の恐ろしさを知らないな？　学校のサイトに流せば、今までの雪ノ下雪乃のイメージがすべて吹き飛ぶぞ。コスプレイヤーとしてデビューしたいと？」
「……ぐっ、それは明確な脅し行為よ」
「脅しとは人類が最初にとった交渉手段だって、姉乃さんが言ってた」
　全く言っていないのだが、雪乃もめぐりも、陽乃ならありえると否定する気が全く起こらなかった。
「こ、交渉をしましょう」
「聞きましょう」
「姉さんの写真を渡すから、私の写真は消してくれないかしら？」
「ほほう、姉を売ると」
「むしろ喜んで売るわ」
　そもそも二人は陽乃に対抗することに関しては、すでに結託しており、これは交渉とも呼べないものだ。だが、めぐりは「これが心理戦」となぜかドラマのワンシーンを見ているかのように、固唾をのんで見守っている。心理もくそもないのだが。
「それと、冗談とはいえ、貴方を貶めたことは謝罪するわ。ごめんなさい」

「こっちもやり過ぎた。ごめんね。あと、八幡の携帯の画像はもう消えているころだから心配しないで。コピーとかもできないから」
「それを聞いて安心したわ。どうやって比企谷くんの携帯を壊そうか考えていたもの」
　本当に安心したのは八幡であることだろう。
「それで明日で良いかしら？　微力ながら、私も協力できると思うわ」
「あの世界は私を中心に回ってるとか勘違いしてそうなバカ女に目にもの見せてやる」
「ええ、全力を以て行いましょう」
　一部始終を見ていためぐりはこう語る。
「陽さん……強く生きてください」
　その後、陽乃が携帯に送り付けられた画像を見て、叫んだのは言うまでもない。

6話　なんて心が痛む提案を……

とある日の授業だった。昼前の3，4時限目の時間を使っての家庭科の授業だった。

そしてその授業で、秋太は世知辛さを感じるのだった。

「調理実習ってさ、班でやるはずじゃん」

「そうね」

「うちのクラスって26人いるわけじゃん」

「4人ひと班で構成されるから、二人余る計算ね」

「で、こうなったと」

昼食前の2時間が家庭科の調理実習にあてられた本日、秋太は現状に納得がいかなかった。

「いやいや、おかしいでしょ。普通どこか5人になるとか、そういうフォローがあって然るべきだと思うんですけど」

秋太の嘆きに、雪乃は同意しつつもこの状況がなるべくしてなったことは理解していた。そもそもの問題は秋太なのだということを彼女は分かっているからだ。

「クラスの内情を家庭科の先生が把握してないのが原因ね。私はともかく、貴方が他のクラスメイトに受け入れられるわけがないもの」

「現実を見ろ。今ハブられているのは二人。つまりお前も受け入れられてないから」

「現実を見るのは貴方よ。私を招いてくれるクラスメイトはたくさんいるわ。私がここに居るのは、貴方を憐れんでのことよ」

雪乃の言うことは事実だ。秋太と組まされた雪乃を自分の班に誘おうとする生徒はちらほらといる。サボり魔の秋太と違って、美人で凛とした雰囲気を持ち、成績優秀な雪乃はクラスで一目置かれる存在で、表立ってはないが、皆が彼女を崇拝している。

人望の差が如実に表れた結果だ。

「あれ、でもこれって自由にやっていいってことじゃん」

「物は言いようね。それよりも貴方は料理をできるのかしら？」

「特定の料理だけ。肉まん、ハンバーグ、オムライス、シュークリーム」

「……好きなのね」
「うん」
凝りだしたら止まらない性格なので、自分の好きな料理だけは好みに合わせて作れるようになった秋太だった。
「なら貴方は好きなものを作ってちょうだい。私も自由に作るわ。材料はなぜだかたくさんあるから」
雪乃も自分の家から食材を持ってきてはいたが、明らかにそれ以上の材料がこの場には存在している。本日が調理実習であることを学校をサボっていたせいで知らなかった秋太。食材など持ってくるはずもないとクラスメイトは予想する。それによって崇拝する雪乃が不利益を被るなど我慢できなかった面々が、食材を持ち寄り今に至ったのである。
「ほーう、それはつまり俺に勝負を挑むと？」
「私に勝てると思っているのかしら？」
「負けた方が勝った方の言うことを一つ聞くということで」
「受けましょう。私が負けるわけないもの」
判定を教員に任せて、二人は調理に取り掛かる。会話を聞いていたのか、クラスメイト達は自分の作業を止めて、二人の勝負に目をやった。
「ゆっきー、卵取って」
「はい。そっちの調味料をとってもらえるかしら？」
「ほい。
あ、辛すぎるのはあんまり好きじゃない」
「別に貴方のために作っているわけではないのだけど。あ、ダメよ、ピーマンは。苦味で料理が台無しになるわ」
「お子ちゃまめ」
見守っていたクラスメイト達は能面のような表情になって自分の作業に戻った。独身であり、アラサーをゆうに超えてしまった家庭科教師は、二人の新婚さんのようなやり取りに、ハンカチを噛んで悔しがった。
秋太と雪乃の両名は調理技術に加え、視野が異様に広かった。互い

が互いを邪魔しないように行動し、必要であればアイコンタクトで調理道具の貸し借りを行う。
味見をして欲しい時は、すっとスプーンをお互いに差し出し、こくりと頷いて終了する。
――ちょっと、雪ノ下さん、笑ってるわよ。
――あ、秋田の奴、雪ノ下さんの顔に触れたぞっ！　許さん。
――小麦粉を付ける雪ノ下さん可愛い。
――なんか、二人の息ピッタリじゃね？
見ないようにしていたのに、見てしまう。二人の醸し出す何とも言えない雰囲気に、クラスメイト達が撃沈した。
「出来た」
「私も」
タイミングよく二人が作業の終了を告げる。秋太が用意したのは、オムライスに肉まん、そしてシュークリーム。雪乃が用意したのは、麻婆豆腐、かに玉、杏仁豆腐。
「なんてバランスが悪い」
「貴方に合わせたのよ。つまり貴方が悪いわ」
「ここで料亭もビックリな和食を期待したのに、がっかりだ。中華とか何やってんの？」
売り言葉に買い言葉。二人の軽いジャブの応酬が始まった。
「私の作ったものになにかご不満でも？　貴方が辛い物がダメだというからのチョイスなのだけど」
「なんて性格の悪い。最低だ」
「ピーマンを分からないように刻んで入れた貴方に言われたくないわ」
「子供に食べさせるには分からなくするのが一番」
「貴方も十分最低よ」
どっちもどっちだというのが見ていた生徒たちの意見だ。
「さて、言い争いはここまで。敗者を決めようか」
「それは自分だと宣言しているのかしら？」
二人が自信満々に自分こそが勝利者なのだと確信している。

「では、いただきます」
教師がスプーンをオムライスに入れた。半熟状にしたオムレツをチキンライスの上で割るタイプではなく、従来の卵で閉じ込めるタイプのオムライスだ。
ソースは市販のデミグラスソースに、調味料、香辛料を加え香りを立たせている。中の卵に閉じ込められたチキンライスの風味を壊さず、むしろ加速するように調整されている。
スプーンで中を開けると香りがさらに広がり、見ていた生徒たちが涎をぬぐった。
「……卵の半熟加減は絶妙。香りの立ち方も申し分ないわ。ピーマンを細かく刻んだことで、柔らかな中に小気味よい歯ごたえ。家庭料理のレベルは十分に超えている」
秋太がガッツポーズを決める。
雪乃は澄ました顔をしているが、足元が忙しなく動いているため、動揺はしっかりとしている。
「では、雪ノ下さんの麻婆を」
不公平にならないように、今度は雪乃の料理を口に運んだ。
「とろみ加減は完璧ね。舌に不快感を残すことなく、それでいてはっきりとしている。匂いは強烈だけど、それがお腹を刺激するから逆に高評価。辛さは火が出るようだけど、それでも手が止まらないわ。汗が噴き出るのが心地よく感じるなんて初めての経験よ。これは良いダイエッ――健康にいいかも」
雪乃も小さく拳を握る。
秋太も平静を装ったが、背中に汗がじわじわと溜まりだす。
それから審査は進み、肉まんとかに玉が教員のお腹に消えていった。デザートは別腹と用意されたシュークリームと杏仁豆腐もするりとなくなった。
「ふぅ～仕事を忘れて堪能してしまったわ。では、審査結果を発表します」
ごくりと息をのむ。クラス全体が息をひそめて言葉を待った。
「オムライスと麻婆豆腐、これは私の好みに合った雪ノ下さんね。決

して秋田君の料理が劣っていたわけではないわ。単純に好みの問題。ダイエット効果が望めるとか、そんなことは考えていないから」
次にと続ける。
「肉まんとかに玉では、秋田くんね。生地のふわふわとしながらももっちりとした食感を残した技術は素晴らしい。中の餡は決して最高というものではないけれど、生地との調和を考えれば、満点。一方で雪ノ下さんのかに玉は強さがなかった。これは単純に作ったものの差。だから秋田君に軍配が上がる」
同じ料理を作ったわけではないからしょうがないと補足した。
「二つの料理を総合すれば、互角。勝負を分けたのはデザート」
一呼吸置いてから。
「甘さを抑えた雪ノ下さんの杏仁豆腐。おそらく雪ノ下さんの料理だけを食べていたのなら、完璧だった。ただ秋田君のシュークリームの後では味が足らず、何を食べているのか分からなくなってしまったわ。だから秋田君の勝ち」
「よしっ！」
「先生、それは食べた順番の問題です。もう一度食べていただければ……」
教員は首を横に振り、にっこりと笑った。
「お腹一杯になっちゃった♪」
アラサーを超えた妙齢の女性のてへぺろにクラスのほぼ全員が、気分を悪くした。その事に、悲しくなったのか、しくしくと泣き出す家庭科教師。
「ふふーん」
「ぐ、偶然よ。食べた順番の問題だわ。味で負けた訳じゃない」
「え、聞こえなーい。勝者には敗者の声など届きません」
ドヤ顔で勝ち誇る秋太を悔しそうに睨みつける雪乃。
「これは料理勝負。食べる順番も勝負のポイント。それを見越して料理を作らなきゃ」
「貴方はそれをしていたとでも言うの？」
まさか、そこまで先を読んでいたのかと雪乃は驚きの感情を隠しな

がら、そう尋ねた。
「いや、全然。今日食べたいなと思った奴を作っただけ」
「運で勝っただけじゃない」
「勝負の世界でそれを言ったら終わりだよ。運も実力のうち。俺が勝者で君が敗者。これが現実」
「……」
本気で負けたことを悔しがっている雪乃。負けず嫌いの彼女はどんな勝負でも負けることを許さない。
「これヤバい！　二人の料理、超美味いんですけど！」
「おいおいマジかよっ。俺にも食わせろ！」
二人が子供のような喧嘩をしている間、お腹を空かせた野獣たちが二人の自分達用に用意していた料理に群がった。奪い合うようにして、料理を口に運び。各々が感想を述べる。
「私は雪ノ下さんかな」
「俺も。ていうか雪ノ下さんが作った時点で、雪ノ下さん」
「私もそうかな」
「雪ノ下さんっ！」
料理の差は人気の差であった。
その真実に、秋太は無言で耳を塞いだ。
「気にしない方が良いわ。勝負は私の負けなのだから」
ぽんと優しく雪乃が秋太の肩を叩く。
ただ優しい言葉とは裏腹に、その表情には満面の笑みが浮かんでいた。
◆
「えーゆきのん、料理勝負したの？　なんだ残念。私も食べたかったのに」
放課後になって、雪乃が奉仕部にやってくると今日有った話を食いしん坊そうな結衣に話してみた。
案の定、結衣は食いつき、雪乃の料理が食べられないことに体全体で悔しさを表現する。
「でも、負けたんだろ？」

「何か言いたいのしら？　人生に負け続ける負け谷くん？」
「いや、ちょっと聞いただけだろ。お前、反応し過ぎだから」
　それ以上言ったら殺すと言わんばかりの雪乃の鋭い視線に、八幡は気圧された。
「所詮は負け犬。今日からゆっきーを負け乃と呼んでやってくれ」
「なぜ貴方が当たり前のようにここに居るのかしら？」
「それは勿論、敗残兵であるゆっきーに勝者としての要求をするため」
　八幡の近くに座り、不敵に笑う秋太。雪乃はそんな彼を冷たい目で見ていた。
「ア、アッキー！　えっちなことはダメだからねっ！」
　結衣が顔を真っ赤にして、エロい要求は良くないと叫んだ。
「どうして、俺の周りの女性陣は俺を変態の道に誘おうとするのだろうか？　そんなことしたら犯罪者確定であることが分かると思うんだが」
「由比ヶ浜はビッチだから。そういう方に妄想が逞しいんだろ」
　八幡は何を想像していたのか、顔を赤らめて視線を雪乃からそらしている。それを隠すために結衣を使うあたり、なかなか最低の男だ。
「はあ⁉　だから私は処女だって前にも――ああ、今のなし、なしだからっ！　もうヒッキー、まじで最悪っ！」
　今度は全身が赤くなるほど、結衣は興奮し慌てだした。
「なるほど、こうやって未経験アピールをするわけか。あざとい」
「ち、ちがっ！」
「これがガハマちゃんテク。ゆっきー、見習いなさい」
「なぜ上から物を言ってくるのかしら？」
「俺が勝者だから。で、思い出した。俺の要求を発表する……部室貸して」
「え？」
　反応したのは雪乃ではなく結衣。
「生徒会室はどうしたのかしら？」
「うーん、まだ大丈夫だと思うんだけど、夏休みが終わると文化祭とかあるし、その後には生徒会選挙があるじゃん。今はめぐり先輩のご厚

意であそこにいさせてもらっているけど、忙しくなればそれも難しいし、新しい生徒会長なら追い出される可能性が高い。今のうちに他の作業場を用意した方が良いかなって。勝負をふっかければ簡単に乗ってくると思ったから狙い通り」

雪乃が唇を噛みしめる。

「まあ、料理勝負は偶然だったけど、勝てて良かった。で、ゆっきーさん、ご返答は？」

「わ、私の一存では……」

「静先生なら問題なし。あとは八幡とガハマちゃんだけど、問題ないね」

言葉の最後に、断ったら、どうなるか分かってるよね、と秋太は笑みを深める。

結衣と八幡はコクコクと頷いた。

秋太の能力は理解している。もしそれが自分に向けられてしまった場合、学校に来れなくなることだって十分に考えられる。高レベルな危機察知能力を発動した二人は、素直に秋太の言葉に従うしかなかった。

「はい、あとは君が頷くだけ。さあ頷け」

「……勝負に負けたのだから、仕方がないわね」

「よし。あ、奉仕部の活動の邪魔はしないから。あっちの方で勝手にやってるよ」

教室の隅を指し、秋太の交渉は終了した。

「秋田くん、ちょっと」

話を終えて帰ろうとした秋太を雪乃が手招きして呼び寄せる。結衣や八幡から少しだけ距離を取り、しゃがみこませた。

「姉さんへの嫌がらせ写真は用意できないかしら？　いざという時、持っておいた方が都合がいいと思って」

「むむ、なんて心が痛む提案をしてくるんだ。俺だって女性のだらしない顔を写真にするなんて良心が……」

そういう秋太の笑みはあまりに深く、清々しかった。

「ええ。でも仕方がないの。これも人助けよ」

「人助けなら仕方がないな」
二人が怪しく笑う姿を見ていた八幡と結衣は軽く引いていた。内容が分からずとも、かなり良くないことを話しているのだろうというは理解できた。
「これからも良い関係を築いていこう」
「そうね」
二人は固い握手を結び、同志となった。
「ヒッキーあれが宿敵ってやつなんだね！」
「いや、違うだろ。共犯者だ」
ただ性格が悪いだけである。

7話　あのダンベル……良い！

――明日は予定があるかしら？

秋太のスマホにそんなメールが送られてきた。差出人は雪乃。

陽乃に対する共闘の一件で、二人が連絡先を交換したのは少し前の話。

それからちょくちょく連絡を取っているのだが、雪乃から暇かどうかを聞かれたのは、これが初めてのことだった。

雪乃は自他共に認める美人だ。そんな女性から予定を聞かれるのだから、男として気持ちが高揚するのは仕方がない。当然、秋太もテンションを上げている……はずである。それはメールの返信にも見て取れる。

――睡眠で忙しい。

気持ちが高ぶりすぎてしまった結果の返信だ。

――セクハラの訴訟の相談があるのだけど。

――それに関してはお互いに納得したはず。

――何を言っているのかしら？　私が言っているのは、貴方が私を叱りつけたときの話よ。写真のこととは別問題だわ。

――はい、わかりました。暇です、ちょー暇です。だからこれでチャラにしてね。

――それなら、明日私に付きあってくれないかしら？　考えておくわ。

デートのお誘いですかと返信したら、そのまま返ってくることはなかった。

翌朝、秋太が目を覚ますと集合場所と時間がメールで送られていた。

いそいそと身支度を整え、集合場所に秋太は向かった。指定された時間の5分前のことである。

◆

「遅いわ」

「俺に罪はない。返信のタイミングを間違えたゆっきーが悪い」

「あ、貴方が変なメールを返すから……」
　耳を赤くする雪乃。
「お前は中学生か。もっと大人な対応を身に付けた方がいい。将来、チャラ男に絡まれるよ？」
「現在進行形で絡まれている場合はどうすれば良いのかしら？」
「これは手厳しい」
　雪乃の雰囲気は普段のそれと大きく違っていた。白を基調とした可愛い目のワンピース。その上から薄い青色のカーディガンを羽織っている。足元はヒール付きのサンダルで、シンプルな装いだ。休日用なのか、髪型は少し高めのツインテールだ。
「なんか、今日のゆっきーはふわって感じだね」
「擬音語で伝えるのは止めてくれないかしら。由比ヶ浜さんみたいよ」
「あんなに酷くはない。失礼な」
「そうかしら？」
　くすくすと笑う雪乃はとても魅力のある女の子だった。周りで雪乃に声をかけようと狙っていた男たちが「ほわぁ～」と骨抜きにされている。
「でも意外ね。貴方もまともな格好ができたのね」
「本当に失礼。身なりくらいは整えるのはマナーの問題だから」
　オシャレな青のシャツの上に、黒のジャケット。全体的に清潔感のある服装だが、首元から見えるリングだけは、少し気取っている感じを与える。ただ雪乃個人の感想としては自分よりも頭一つは大きい秋太にはよく似合っていると思えた。
「普段が子供っぽいからもっと、あれな感じかとも思ったけど」
「素直に褒める優しさはないの？　これならもっとダボダボで不清潔な感じで来ればよかった」
「それは止めて……まぁ、格好良いんじゃないかしら。服は」
「そんな倒置法いらないから。服なんて「あれはないわー」とか言われるレベルじゃなければなんでもいいと思う。格好悪くないことが大切」

「それもそうね」
　雪乃はそう納得して、てくてくと歩き出す。まだ何をするのか、目的すら告げられていない秋太は、そんな彼女に呆れながら、隣を歩いた。
「今日は、由比ヶ浜さんの誕生日プレゼントを買いに来たのよ。６月１８日が誕生日だって言っていたから」
「それでなぜ俺が召喚されるんですか？」
「自慢ではないけれど、私は普通の高校生とは離れた価値基準を持っているの。だからアドバイスをと思って」
「人選ミスでしょ。俺も普通とは違うと自覚してるんだけど」
「……確かに」
「そこは否定するところ。まあ、ここなら人も多いし参考にしたら良いんじゃない？　もしくは服じゃないものを贈るとか」
　二人がいるのは県内でも屈指のショッピングモール。休日であれば、若い男女であふれている。当然、秋太と雪乃もその内の一人なのだが、一般的な高校生と離れた価値観を持っている二人では周りが少しおかしく見えた。
「とりあえず、品物を見て回りましょう」
「ほーい。あ、そう言えば、八幡は誘わなかったの？」
「一応、声を掛けようとは思ったのだけど、彼の連絡先を知らなかったのよ」
「部員の連絡先を管理してない部長……ね～？」
「最近は、色々あったから」
「ガハマちゃんの連絡先は知ってるんでしょ？　八幡ちょー可哀想。一人だけ省かれて」
「こ、今度聞いておくわっ」
　秋太の非難の目に耐えられなくなった雪乃はスタスタと店内に入っていった。「たぶん、八幡はその時でも罵られるんだろうな」と可哀想な未来予測をする秋太だった。
　二人は開始早々に服を買うことを諦めた。通行人を見ても、これというのが無く、皆同じように見えてしまった。一部、なぜその服を選

んだのかと問い詰めたくなる輩も発見したが、個性の一つだと割り切り、視界から消した。
服はハードルが高いと開始１０分で分かってしまったため、結衣をイメージして、ファンシーショップにやって来た。可愛いものが列をなす姿は壮観で、秋太はかなり気後れした。
雪乃は、パンダのパンさんに異様なまでの興味を示したが、秋太の手前、自分の個人的趣味は封印し、ちらちら見るだけで済ませた。
「欲しいなら買えば？」
「べ、別に欲しくなんてないわっ」
「なんで慌てるのさ。女の子がああいうのに、興味を示すのは普通でしょ？「あのダンベル……良い！」とか言わない限りは、別に気にしないよ」
「貴方の中の私は一体どんな女の子なのかしら？」
笑っている。これ以上なく笑っている。でも、目だけは笑っていない。うわぁ～と秋太が引くほどの魅力的な笑みを浮かべた雪乃。それを遠巻きで見ていたカップル集団はそそくさとその店を後にする。
これ以上、ここに居ては、店の不利益になってしまうため、秋太は雪乃を連れて退散した。
「誕生日プレゼントを選ぶことがこんなに大変だとは思わなかったわ」
ベンチでふぅーと息をつく雪乃の表情には疲労の色が見て取れる。
「ほい」
秋太は近くの自販機で買ってきた水を雪乃に渡した。雪乃はお金を払うと言ったのだが、ただの水だからと雪乃の申し出を断った。
「やはりここは八幡愛飲のＭＡＸコーヒーを選ぶべきだったか？　逃げの一手で水をチョイスした自分が情けない」
「どこに後悔をしているのかしら？」
「いや、コーヒーを飲んだゆっきーがその甘さに噴出したところを激写。それをガハマちゃんの誕生日プレゼントになるように編集して渡そうかと」
「変なところに才能を使うのは止めなさい。それに私は吐き出したり

しないもの」
「いや、出さなかったら出さなかったで、横腹辺りを突いて、強制的に出させようかと」
「それは完全なセクハラよ」
「俺とゆっきーの仲じゃん？」
「どういう仲なの？」
　改めて考えてみると、雪乃は秋太と自分がどういう関係なのかが分からなかった。クラスメイトと言えばそうであるが、他のクラスメイトとは明らかに違うというのは雪乃にも分かる。結衣との距離感は友人と言って問題ないものだが、隣に座る男はどうだろうか？　雪乃は明確な答えが出なかった。
「友達？」
「そうなの……かしら？」
「いや、首を傾げられると困るけど。休日に買い物を一緒にするくらいだし、友達と言ってもいいと思う。定義があいまいだから分からないけど」
「そ、そうかもしれないわね……友達」
　友達と言われたことに素直に雪乃は嬉しい思いがあった。ただ、微妙な違和感も感じている。それが彼女には何なのかが分からなかったが、特に気にするようなことではないと頭の片隅に追いやった。
「そう言えば、貴方も由比ヶ浜さんへの誕生日プレゼントを用意するのね。あまり接点がないから、気にしないと思っていたのだけど」
「一応、この前は協力してもらったしね。そのお礼」
「何を贈る気なのかしら？」
「俺の持てる技術のすべてを総動員した八幡画像集」
「……それは何の嫌がらせかしら？」
「……ゆっきーって鈍いって言われない？」
「……鈍いって言われるほどの友人関係をこれまで築いてこなかったから、言われたことがないわね」
「……なんか、ごめん」
「止めて、なんだか比企谷君みたいで悲しくなるから」

雪乃は自爆し、落ち込んだ。完璧そうに見える隣の少女が、実はかなりのポンコツなのだと、改めて確認すると、秋太はくすくすと笑った。
「あれ、雪乃ちゃん？」
とんでもない美人が二人の前で足を止めた。一見すると腕や肩の露出度が高く、白い柔肌を惜しげもなく晒しているが、決して下品というわけではない。
総じて、凄い綺麗な人という感想だが、秋太の眼は彼女の白さに反比例して闇に染まっていく。
友人たちとこの場を訪れていたようで、彼女の後ろに男女が数人見える。「先に行ってて」と友人たちを送り出し、二人のもとに近づいてきた。
「……ね、姉さん」
姉の登場に、どこか顔をしかめる雪乃。それを見て、「ひどーい」と甘えるような声を上げて、雪乃の元までやって来た。
「ん？　あれ、もしかしてデート？　やだ、雪乃ちゃん、このこの～……って、秋太じゃない!?」
「気づくの遅い。ということで帰れ」
「この生意気な態度、やっぱり秋太ね。幻覚かと思ったわ」
「ゆっきー帰れコールを」
「え？　ええ？」
秋太と姉の陽乃が知り合いなのは二人から聞いて、雪乃は知っている。
ただ二人の正確な仲を理解していなかった雪乃は困惑した。
「初対面らしく、自己紹介しようか？　私は雪乃ちゃんの姉の陽乃です♪　どうぞよろしく～」
からかう気満々といった感じで、陽乃は秋太に絡みだした。その際、雪乃とは違う豊満な胸を秋太に押し付ける。純情な男子ならこれで骨抜きだ。
「佐藤一郎です。初めまして。そして永遠にさようなら」
陽乃のはるのさんに特に反応することもなく、平気でうそをつき、

端的に自分の心の内を告げた。
「酷いな～。普通、偽名とか使う？　あ、もしかしてデートだから？　二人とも付き合っていたの？」
弄るぞーというのが陽乃の顔には全面に出ていた。
それに対し、秋太は笑顔でカウンターを放つ。
「今日が初デートなんですよ。でも、どこかの誰かさんの所為で邪魔されているんです。姉乃さん、どうにかしてくれませんか？　これでは初デートが台無しです」
おどけながら秋太はそう言った。雪乃は待ってと動きそうになったが、秋太が視線で止める。
「ふーん、そう来るか。やっぱり秋太は面白いね」
「よく言われます。クラスではアイドルです」
「ぷはっ。あははは！　秋太、それ冗談にしては笑えないから」
「うっせ！　さっさと帰れ。邪魔」
手をお腹にあてながら、くくくと笑う陽乃。こんな姉を見るのは初めてなのか、雪乃は困惑気味だ。
「ひぃー、ひぃー」
「気持ち悪いわ。笑い過ぎだ」
「だって秋太がアイドルとか……ぷぷ」
「これは殴っても許されるんじゃないだろうか？」
「別に構わないけど、私やられたら倍返しじゃきかないから」
「ちっ」
秋太は露骨に舌打ちをし、さっさと帰るように陽乃を手で払った。
「全く、こんな綺麗なお姉さんに向かって、邪魔だから帰れとか失礼しちゃうわ」
「そんな酷いことを誰が言ったんでしょうね」
「ここのこいつ」
ぐにっと秋太の頬を引っ張る陽乃。
「ちょっと生意気だけど、雪乃ちゃんにはピッタリかもね。じゃ、私は二人の恋路を邪魔しちゃう悪者だから、退散するね」
よっと飛ぶようにして、ベンチから立ちあがると、陽乃は手をひら

ひらさせて立ち去ろうとする。
「あ、そうだ。秋太？」
「何ですか？」
「雪乃ちゃんを泣かせたら、許さないぞ。あともう少しちゃんと偽名を考えなさい。安易すぎ」
「全国の佐藤一郎さんに謝れ」
　じゃーねとウインクしてから、陽乃は去っていった。
「台風みたいな人だ」
「あ、秋田君？」
「どうしたの？」
　顔を真っ赤にした雪乃が震えながら声を絞り出す。
「ね、姉さんとの会話で、つ、付き合って――」
「とは言ってない。デートって言っただけ」
「ね、姉さんに誤解を」
「大丈夫、気づいていたよ。だから、ゆっきーが揶揄われるだけ」
「……それを大丈夫とは言わないわよ」
「俺に被害はないし」
　知らんぷりを決め込む秋太に雪乃がぐっと睨みつける。それも少しの間のことで、すぐに肩の力を抜いた。
「外であんな姉さんを見るのは久しぶりね」
「俺の知る姉乃さんはいつもあんなのだけど？」
「姉さんは雪ノ下陽乃であることを求められているから。あまり自分を表に出さないの」
「いやいや、あの底意地の悪さは完全に素だから」
「だからよ。いつも楽しそうにしているだけの姉さんが、さっきは本当に楽しんでた」
「違いが、よく分からないけど、さすがは姉妹ってところなのかな？」
「付き合いが長ければ、分かることよ。だからたぶん貴方もそのうち分かるようになるわ」
「嫌な断定なんですけど。さっき断交したはずなのに」
「姉さんはしつこいから」

そう言った雪乃は自然に笑った。飾ることなく、本当に自然な笑顔だ。
「あー分かる。雪ノ下の人間だもんね」
「……私の顔を見て納得したのはなぜかしら？」
笑ったままなのに強烈なプレッシャー。あ、これ見たことある奴だと秋太は、陽乃を思い出しながら無言で頭を下げた。
◆
陽乃と遭遇してから1時間ほどして、二人はモール内にある飲食店に入った。
「ガハマちゃんへの誕生日プレゼントにエプロンを選ぶあたり、ゆっきーの鬼っぷりがうかがえる。あの子、絶対に料理とかできない感じでしょ」
「失礼なこと言わないでちょうだい。由比ヶ浜さん、料理に興味を持つようになったみたいだから」
「そして、八幡が病院行きか。八幡を2度も病院送りにするなんて、ゆっきーは鬼」
「貴方の由比ヶ浜さんへの評価の方が鬼じゃないかしら。まあ、否定はしないけど」
どっちもどっちだった。結衣が聞いていれば、確実に涙を流すことになっただろう。
「はい」
注文した軽食を口に運んでいた秋太の手が止まる。なにげなく雪乃から差し出されたのはラッピングされた箱だった。
「……ちょっと、早いというか。あ、気持ちは嬉しいんだけど、まだお互いに分からないことがたくさんあるから」
「……何を勘違いしているのかしら？　この大きさで、貴方の勘違いするようなものではないことは分かるでしょう？　それにあれは男性が女性に贈るものよ。そんなことも知らないのかしら？　非常識ね。そもそも――」
「あーはいはい、悪うございました。冗談に乗ってくれる優しさって必要だと思う」

そんな言葉に、雪乃はぷいっと顔を背ける。
「開けていい？」
「どうぞ」
綺麗にラッピングを外し、箱を開けるとケースが中に入っていた。なんて斬新な嫌がらせと秋太が思ったのだが、ケースの中に黒縁の眼鏡が入っているのが分かると、おぉ～と声を上げる。
「それは今日付き合ってくれたことのお礼よ。パソコンをよくやる貴方だからそれが良いと思ったの」
雪乃が用意したのはブルーライトをカットするパソコン用の眼鏡だった。
「ありがとう。普通に嬉しい」
「そう素直に喜ばれると、照れるのだけど」
雪乃が恥ずかしそうに、視線を下に向けていく。秋太の顔が見れないのだ。
「大事に使わせてもらうよ」
「ええ」
雪乃はその言葉を聞いて、小さく笑った。人に何かを贈るということがこれまでなかったため、喜んでもらえてホッとしている。
「さて、それなら行きますか？」
「どこへ？　何か買い忘れたものが？」
きょとんとする雪乃。良いからと雪乃の手を引き、彼女が持っていた荷物も強引に持った秋太。
レジで会計を済ますと、足早にモール内を進んでいく。
（男の人に手を引かれるなんて、父さん以外では初めてかしら？）
払えば簡単に外せそうな力で握られた手。女子の手を握っているのに、特に何の反応も示さない秋太に少しだけ不満が募る雪乃。ただ、彼の手を離そうとは思わなかった。
「着いた」
着いた場所は先ほどのゲームセンター。秋太の目的の物はここにある。
「なぜここに来たのかしら？」

「それはお楽しみ」
秋太はチラチラと周囲を探る。「有った」と見つけると、雪乃を連れて真っすぐに進んだ。
「……これは？」
「ＵＦＯキャッチャー。知らない？」
「知ってはいるけれど、やった事はないわね。それで、問題はそこではないの。なぜ、私がここに連れてこられたかを聞いているのよ」
「さっき、パンさんグッズを食い入るように見てたじゃん」
「見てないわ」
雪乃は視線を思いっきり秋太から逸らす。ただ横目でボックス内の可愛らしい人形に目を向けてはいるが。
「ゆっきーがパンさんを好きなのは分かった。あの店で買っても良かったんだけど、店で買えるものならすでに持っている可能性が高い。ゆっきー、拘りがありそうだから」
「全く、以て、ご、誤解なのだけど、私は一度始めたら、完結させる主義なの。だから決して人形を集める趣味があるというわけでは――」
「だから、変なところで捻くれるなって。八幡って呼ぶぞ」
「それは人を人とも思わない暴力行為よ。苛めだわ」
「お前が苛めだわ。八幡じゃなかったら、絶対にキレられてるからね？　八幡に対する優しさをもう少し持ちましょう」
「……考えておくわ」
自分でも酷いことを言っている自覚はあるらしい。雪乃は少し思いつめた表情をする。
「まあ、八幡もあれで楽しんでいるっぽいから、もう少し柔らかめな感じで罵ってあげれば良いんじゃないかな」
「なぜ私が比企谷くんを罵らなければならないのかしら？　私は常に彼を更生させるための助言を与えているの」
「ごめんね。俺の認識では助言と暴言はイコールではないんだ。不出来な俺を許してほしい」
「……」
「なんで悔しそうな顔をするのさ？」

面倒な子、秋太は雪乃のことを本気でそう思った。
「まあ、良いや。とりあえず、この中で持ってないものを選んでほしい。ゲームセンターでしか取れないものもあるはずだから」
「なぜ？」
「それは、俺が君にプレゼントするからさ」
「そうされる理由がないわ。さっきのことを気にしているなら――」
凸ピンを雪乃の額にかます。咄嗟のことに避けることができなかった雪乃は額を少しだけ赤くした。
「今日はデート。女の子からプレゼントを貰ったのに、こちらは何もしないなんて、男の沽券に関わるでしょ？　男は見栄を張る生き物だから、俺に見栄を張らせてほしい」
「……そんな言われ方で物を貰うのは初めてね。いつも、付き合ってくださいとかそんな感じだったから」
「さり気に自慢入りましたー」
茶化した秋太に対し、少しだけ強く手の甲を雪乃は抓った。
「今日はデートなのでしょ？　なら相手役が他の男の話を出したのだから、それを窘めるのが貴方の役目ではなくて？」
「ムッキーとかすれば良い？」
「貴方に普通を求めた私がバカだったわ」
「そうゆっきーはバカ。ついでに言うとかなり面倒くさい」
「貴方も言葉には気を付けなさい。私以外の女性なら泣いているところよ」
「ゆっきーが泣いたら本気で改めるよ」
「あら、では本気で泣いて見せようかしら？」
なぜか勝ち誇った表情をする雪乃だったが、秋太が「さあ、どうぞ」と満面の笑みを浮かべると旗色が悪くなる。一度恥ずかしくなれば、もう取り返しはつかない。
「では、どれを取ってもらおうかしら？」
「清々しいほど話をそらしたね」
「黙りなさい――あれが良いわ。あのエクスカリバーを持ったパンさん」

「なんで剣の名前がそんな具体的なの？　というかなんで剣を持ってるの？」
「だって書いてあるもの」
雪乃がゲーム機の下の部分を指さすと、そこにはパンさんの種類と説明が書かれていた。
――魔王討伐のため、聖剣エクスカリバーを携えた勇者パンさん。ディスティニーの最新作です。
「それ、パンさんのちゃう。パンさんはどっちかといえば魔王側」
東京ディスティニーランドの【パンダのパンさん】は、きらりと光る牙を持ち、リアルなら恐ろしくてしょうがないほどの凶悪な目と爪を持つ、人気キャラクター。
爪が長すぎて、剣が持てないだろというツッコミがあるが、それはご都合主義の名の下に、剣を持つ側の爪が切りそろえられていた。偽物だろと秋太が思うのも無理はない。
「貴方、パンさんのことが何もわかっていないようね？　良い？」
話が長くなる予感がしたため、秋太は百円玉を機械に投入した。
「3回かな」
無駄にハイスペックな頭脳を使って空間把握。キャッチャーのアームで直接持ち上げることは不可能と判断し、押し出す作戦。角度を計算し、パンさんの転がるルートを確定。三回やればいけると判断した。
雪乃はじっとボックス内を見つめる。一回目で秋太が取り損ねたときは、何をやっているのかと非難の眼を向けた。雪乃はクレーンゲームというものを知らないため、掴もうとしなかった秋太の操作に、不満を持ったのだ。
そんな雪乃に苦笑しながら、2枚、3枚とコインを入れる。程よくバランスを崩されたパンさんは、ぐらりと揺れるとそのまま転がっていき、綺麗に穴の中に落ちた。
「ほい」
ボックスから取り出すと、秋太はそれを雪乃に渡す。雪乃は一瞬ためらったが、「あ、ありがとう」と言って、嬉しそうにパンさんを抱き

かかえた。
「へぇー」
「あ、あまり不躾に見るものではないわ――似合わないかしら？」
「いや、似合ってるよ。ゆっきーのイメージとピッタリ」
「そ、そうかしら？　周りからは冷たいとか、気取っている感じがあるって言われるのだけど」
「そんなことはないさ。俺の知るゆっきーは負けず嫌いのポンコツ。クールって言葉が全く想像のつかないお子様な感じだけど？」
「……む」
　喜びたいのに喜べない。雪乃は今まさにそれだ。小さい頃から、陽乃に比べて社交性や感受性がないとよく言われてきた。面と向かってはなかったが、周囲がそう囁いていたのは知っているのだ。
　そんなことはない。その言葉は単純に嬉しかったが、余計な付属物がいけない。それさえなければと思えて仕方がなかった。だから、黙るしかない。
「ま、大切にしてくださいな。初デート記念」
　秋太が無邪気に笑う。
　雪乃の頬は朱く染まったが、人形に顔をうずめるようにして、小さく頷いた。
（今日は私、変だわ……）
　調子を狂わす原因を、雪乃はパンさんで顔を隠しながら睨みつけた。

8話　ロマンがない

総武高の夏休みは学生に優しい設定になっている。7月の終わりから8月の最終日まで丸々休みだ。課外なども入れることはなく、部活に入っていなければひと月以上学校に行くことはないのだ。生徒の自主性を重んじる高校側の方針である。

夏休み明けに大変なことになる生徒がたくさんいたとしてもだ。

「夏休みの予定ですか？　まあ、仕事ですね」

「それってかなり急ぎの話？」

「……そうですね」

秋太の面倒事センサーが鋭敏に反応した。目の前で、がっくりと肩を落とすめぐりに悪いと思いつつ、めぐりの後ろに透けて見える嫌な気配に秋太は警戒心を強める。不敵に笑うどこかの誰かの幻覚が見えてくる。

これは断るべきだと、脳内で警告がされた。

「実は、はるさんが小旅行しようって誘ってくれたの。私は受験生だけど、息抜きも必要だって。空き時間には勉強も見てくれるって言ってたし。秋太くんも一緒に来てくれたら楽しいと思うんだけど……」

城廻めぐりは生徒会長である。それも圧倒的支持を受けて当選した強者。顔立ちは非常に整っており、彼女の支持層の中に思春期の男子高校生が多分に含まれているのは仕方がない。

そんな美少女の上目遣い。狙ってやっているのか、判断はつかないが、ぐらりと揺れる心を必死に抑えて、ごめんなさいと秋太は頭を下げる。

学年一の美少女と目される雪乃とのじゃれ合いがなければ陥落していたところだ。

「しょうがないね……」

「今度、なにかお詫びに奢りますよ」

「ホントー？　やったー！」

胸の前で小さく手を合わせて喜ぶ先輩を見て、秋太は少しだけ罪悪感を抱いた。

◆

断った手前、めぐりと同じ空間に居づらくなった秋太は、もう一つの仕事場である奉仕部の部室を訪れていた。

「夏休みの予定？」

「そ。姉乃様のお呼び出しがめぐり先輩にあったみたい。ゆっきーはそういうのないの？」

「ゆっきーって……雪ノ下がそう言われることにすげぇー違和感があるな」

「比企谷くん、黙りなさい」

「えー可愛いじゃん。ヒッキーまじでキモい」

「俺のキモさ関係なくない？　由比ヶ浜、とりあえずキモいって言っておけば許されると思っていたら大間違いだから」

罵倒を受け入れている八幡。このメンバーでいると必ず八幡が標的にされているのだが、陰湿なものではなく、じゃれ合いの一環だ。八幡も雪乃や結衣を揶揄することはある。ただ雪乃たちと八幡のやり合いの差が、９：１であるのだが。

「で、ゆっきーはなんかないの？」

「私は、これと言ってないわね。ただ姉さんと旅行にだけは絶対に嫌ね」

「相変わらずの仲だね。雪ノ下家は面倒じゃないといけないみたいなルールとかあるんじゃない？」

「人の家にケチを付けないでもらえるかしら？」

「俺に実害のある某長女さまが居るんだから、文句も言いたくなるよね」

雪乃は自分の家を非難されるより、姉の迷惑を受け続ける秋太を不憫に思ってしまった。

若干、憐れんでもいる。

「ねぇー、アッキー。ゆきのんにはお姉さんがいるの？」

「いるの。総武高のＯＢで今は大学生。神出鬼没で、気づいた時にはもう遅い。気が付けばふとそこに雪ノ下陽乃。これをキャッチフレーズにできそうなくらい」

「え、なにそれ怖い……」
「八幡の腐った目を暗がりで見るのと同じだよ」
「笑顔で酷いこと言うのやめてくれない？」
「俺と八幡の仲じゃん」
「どんな仲だよ。友達でもなんでもないだろ」
「え、大親友でしょう？　話したことは数える程度だけど」
「話した人間をすべて親友と定義するなら、そうだろうな。お、これは俺には友達がたくさんいるってことになるな」
　雪乃と結衣が八幡を憐れむ。
「ヒッキーまじで可哀想。わ、私は友達だから！」
「比企谷くん、私は友達ではないけれど、悩み事があれば相談くらいには乗るわ。だから強く生きて欲しい」
「本気で反応するの止めてくれない？　雪ノ下に至っては冗談ですら友達になるのを拒んでるし」
「ごめんなさい。私は正直者なの。心の底から比企谷くんとは友達になりたくないと思ってしまう私を許してちょうだい」
　申し訳なさそうに雪乃が頭を下げた。
「もう雪ノ下の俺への遠慮のなさは友達レベルだぞ」
「俺の知る友人関係とは違うけど」
「秋田君、たまには俺にノッてきて！」
「比企谷くん、友達がいないからって踏んでほしいとか言わないでくれるかしら。ここは学校なのよ？」
「ヒッキーまじでキモい」
「さすがに俺も……」
「なんでお前ら俺を苛める時だけ、そんな連携が上手いの？　由比ヶ浜は本気で勘違いしてそうだけど、そこの二人は絶対わざとだろ」
　一人だけバカ扱いされた結衣が怒りを露わにするが、誰も結衣がバカであることは否定しなかった。結衣との付き合いが浅い三人であるが、彼女の言動から判断すれば、おおよその知能レベルは判断できる。その点に関しては、三人は同じ判断をしているということだ。
「あ、でも夏休みに何もないなら、どっか行かない？　皆で」

「いってら～」
「ああ、俺は無理だわー。ちょっと家の用事が」
「比企谷くん、家でも忘れられている貴方が、家族行事に参加するわけないでしょ？　嘘は止めなさい」
「なんで、お前が比企谷家の内情を知ってるんだよ！　お前はユキペディアか」
「って言うか、ヒッキーもアッキーも断るの早すぎだからっ！　もっとこう……じっくり熟考して！」
　頭痛が痛いと同じ原理である。
「由比ヶ浜、なんかごめん」
「ガハマちゃん、本当に申し訳ない」
「由比ヶ浜さん、今日は帰った方がいいわ。頭を使うと知恵熱が出るというから」
「皆が酷すぎる……ええ～ん！」
　結衣が泣きながら部室を飛び出して行こうとしたその時。
「あ、居た♪」
　悪魔の声が部室に響いた。
◆
「雪乃ちゃんの姉、陽乃です♪　よろしくね」
「由比ヶ浜結衣です。は、初めまして」
「比企谷八幡です」
「……」
「……」
　結衣は困惑気味に、八幡は懐疑的に、秋太と雪乃は敵意をむき出しにして、陽乃を見る。
「今度の生徒総会で抗議してやる。部外者を校内に立ち入らせ過ぎだから、この学校」
「私も尽力するわ」
「も～雪乃ちゃんも秋太も酷いんだから。この学校は地域交流を掲げているから、ＯＢを邪険にできないよ？」
　割と本気で悔しがる秋太と雪乃に、結衣と八幡の顔が引きつった。

雪ノ下陽乃。雪乃の姉。二人にとってはそれだけの情報しかないのだが、秋太達の様子から、かなり厄介な相手であることは直感できる。
「それで、何の用かしら？」
「雪乃ちゃん達には特に用があるわけではないんだけど」
「よし、お帰りだ。八幡、丁重に校門までお連れして。できるだけ迅速に」
「なんで、俺なんだよ」
「尊い犠牲になってくれ」
「怖えよ。え、なに、俺食べられちゃうの？」
「気づけば海の上なんて可能性も」
八幡が陽乃からかなり距離を取った。
「こーら～、嘘を言って比企谷くんを怖がらせないの。由比ヶ――ガハマちゃんで良いかな？　彼女も怖がってるでしょ」
「あ、アッキーと同じだ」
「……俺、もう帰る。なんて日だ。ちょっと自分の感性について見つめ直す」
「辛いとは思うけど、頑張って」
雪乃が小さくグーを作り、応援する。
なんでこんな状況になったのか分からない陽乃はニコニコとしながらも、首を傾げた。
「なんで秋太が落ち込んでるの？」
「秋田が由比ヶ浜に付けたあだ名もガハマちゃんなんですよ。たぶん、被ったのがショックだったんじゃないですかね」
八幡が説明を加えると、陽乃は本当にうれしそうに笑い、帰ろうとした秋太の肩に手を置いた。
「んふふ、秋太くん？　私たち、やっぱり似てるね」
「穴が在ったら、埋めたい」
「それ犯罪予告だから」
「似非人類と言われた雪ノ下陽乃と同じ発想をするなんて……寝込みそう」

「心中お察しするわ。秋田くん、今日はぐっすり寝なさい」
「あらら？　これはあれかな？　私をバカにしているのかな？」
　秋太の肩に置かれた手に力が入る。
「なんか怒ってるのに笑ってるのがゆきのんそっくり」
「奇遇だな。俺もそう思った」
　八幡と結衣は陽乃と雪乃を見比べて、よく似ている姉妹だなと感想を述べる。
　その言葉に雪乃が嫌そうに反応するが、陽乃は逆に嬉しそうだった。
「あ、そうだ秋太。夏休み、軽井沢行かない？」
「行くわけがない。めぐり先輩に聞かなかったの？」
「聞いたけど、私が誘えば来るかなーって」
「とんだ勘違い。むしろ、めぐり先輩と二人なら確実に行った」
「年上美人お姉さんと二人きりを希望だなんて、エロガキ」
「どっかの大学のお姉さんに反応しないんで、許してくれませんか？」
「ぐっ。なかなかのジャブね？」
「幕ノ内とでも叫べば良いんですかね？　お望みならデンプシーロールでもお見舞いしましょうか？」
「私のハートブレイクショットが火を噴くわよ？」
「まあ、ある意味今日はハートブレイクです。傷心中な後輩を労わって、帰るという優しさが欲しいですね。年上なら」
　ふふふと二人が不気味な笑いを浮かべ、周囲の人間が軽く引いていた。
「姉さん、仮面を被り忘れているわよ」
「おっと、やっぱり秋太がいるとダメね。ムキになっちゃうから」
「ムキムキになるとか、ちょっと怖いんですけど。私の腹筋は鉄以上とかやめて」
「アンタはもう少し女性を気遣いなさい」
「誠に遺憾ながら、それには同意するわ」
「……ゆっきーに裏切られた」
　雪ノ下姉妹の攻撃に秋太が敗北した。

「あ、そうだ！　皆で行かない？　雪乃ちゃんはもちろん、ガハマちゃんや比企谷くんも！」
「私は断るわ」
「ゆきのん、断るんだ」
「あ、俺も無理です。知らない人には付いていくなって躾けられているんで」
「ヒッキーも断ってるし」
　陽乃の提案に乗ってくるものは誰も居なかった。
　陽乃は狙いを変える。この中で最も扱いやすそうな少年、八幡の元に近寄っていく。
「軽井沢には別荘があって、近くには川も流れているから水遊びできるよ？　比企谷君？　お姉さん達の水着姿みたくない？」
　雪ノ下陽乃は美人である。それでスタイルもかなり良い。出るところは出ているし、引っ込むところは引っ込んでいる。有体に言ってしまえばエロい体という奴だ。
　そんな魅力的な女性が水着姿になる。八幡は一瞬で脳内にその姿をイメージし、顔を赤らめる。
「ヒッキーまじ最低」
「比企谷くん、自首しなさい」
「あはははは、比企谷くん、凄くわかりやすーい！」
　部活仲間の二人に侮蔑の眼で見られる八幡だった。
「秋太は？」
　秋太がバレないうちに帰ろうと、手を掛けた瞬間、陽乃が振り返る。
「マジでレーダーでも付いてるんじゃ」と陽乃の気配察知能力に驚きを隠せない秋太。
「めぐりが新しい水着を買いに行こうって言ってたんだよねー」
「めぐり先輩だけなら、泣いて喜んだところ。でも、魔王様同伴がマイナス一万ポイント。つまり行かない」
「雪乃ちゃんの水着姿が見られるんだよ？　この学校プールないから、もしかしたら一生見られないかも」
「姉さんっ！」と顔を赤くする雪乃。普段は澄ましていても、やはり

同世代の男子に水着姿を見せるのは恥ずかしいのだろう。結衣も、自分の水着姿が見られるのだと気づき、小さくなっている。
「ゆっきーの水着姿になんか興味はない。上げて寄せてもＡカップ。ロマンが足りない」
　秋太の放った一言で、空気が変わる。「お前、勇者すぎる」と八幡が合掌をした。
「私の何が何なのかしら？」
「お、おぅ」
　一瞬で詰め寄ってきた雪乃。その速さにさすがの秋太もたじろいだ。
「さて、女性を辱めた罪は非常に重いのだけど、覚悟はできているかしら？」
「八幡を普段、辱めてるゆっきーが言っても説得力がない。男女平等は大切」
「黙りなさい」
　秋太を黙らせると同時に、雪乃は八幡の方に視線を向ける。それだけで意味を理解した八幡は両手をあげて、降参の意を示した。口は出さないと、小さく頷く。
「秋田くん？　私、女性としての尊厳が踏みにじられたのだけど？」
「貧乳にときめく男子もいるはず、ｄｏｎ，ｔ　ｍｉｎｄ」
「ぶっはははは！　バカだ、本当のバカだっ！　普通、空気くらい読むでしょっ！　秋太、アンタバカすぎっ！」
　陽乃が爆発した。笑い過ぎて、自分を支えられないのか、机に倒れこむようにして笑っている。陽乃は胸元の開いた服を着ており、動くたびに八幡の視界に入ってくる。見ないようにと己を律しながらも、チラチラ見てしまう八幡に結衣が足を全力で踏みつけた。
「ヒッキーキモい」
　今年度最高のキモいが八幡にさく裂した。足の痛みと精神的な痛みで八幡は膝から崩れ落ちる。
「正直な俺を許してほしい」
「許さないわ。私は傷ついたの。償いを要求するわ」

「……ふむ、諭吉が何十枚必要？　さすがに3桁は勘弁して欲しい」
「高校生では絶対に出てこない言葉ね。お金は良いわ。そうね……」
雪乃は何かを考えると、
「一緒に軽井沢に行きましょう」
笑顔でそう言い放つのだった。

9話　夏休み、森で、熊さんに、出会った

「夏休み、森で、熊さんに、出会った」
「不吉なこと言わないでちょうだい」
「いや、不満も言いたくなるでしょ。なんで貴重な夏休みを、こんなIT社会に反抗している大自然で過ごさないといけないのさ」
「貴方が罪を犯したからよ。女性の名誉は軽くないの」
　夏休みに入り、秋太は軽井沢に連行された。男女比がおかしくなるという理由から八幡も無理やり連れてきた。
　彼を家から引っ張り出すのがとても苦労したが、「水着がいっぱい」という悪魔のささやきで、彼を連れだすことに成功した。所詮、男は皆同じ。
「テニスコートがある。お金持ちはホント、考えることが一緒。どうせ作るなら、サッカー場でも作ってほしい」
「貴方、サッカーなんてやるの？」
「ただ言ってみただけ」
　ハアーと呆れた雪乃は、秋太を連れて別荘の中に入る。すでに到着していた陽乃とめぐりは、楽しく談笑していた。
　八幡は一人部屋の隅で座っているが、結衣が元気に話しかけている。
「無駄に広い」
　いったい何人泊まれるんだというほど、別荘は広かった。二階奥には扉がいくつも見え、少なくともこの場にいるメンバー一人一人に部屋を与えても問題ないことが分かる。
「今日は自由行動。外でテニスをするもよし、秋太を苛めるのもよし」
「姉乃さんを川に沈めるのもよし」
　陽乃の軽口に秋太が素早く応戦する。
　少しばかり言い争ったのだが、めぐりが仲裁に入って、戦いは終了した。
「でもちょっと悔しいなー。秋太くん、私の誘いは断ったのに、はるさんの誘いに乗っちゃうなんて」

「めぐり先輩、情報に大きな誤りがありますね。俺が承諾したのは姉乃さんじゃなくて、妹。ちょっとｗｉｔに富んだ掛け合いをしたら、問題になってしまって」
「はるさんは水着に釣られたって言っていたけど……」
「本気で、あのおバカさんを沈めてこようかな」
　雪乃に無駄に絡んでいる魔王。いつか絶対ぶっ飛ばすと心に誓い、
「明日あれを沈めますんで許してください」とめぐりに謝った。
　ダメだよ～とめぐりが止めるが、秋太は微笑みながら首を横に振るだけだった。
「さて、ちょっと仕事しますかね」
　ぐっと背伸びして、「あそこ借ります」と適当な部屋を指さして、そこに向かった。
　陽乃がつまらないと不満を垂れたが、「自由にしろって言ったじゃん？」の一言で、去っていった。
　秋太に倣えの八幡は「じゃあ、俺も」と同じように部屋に消えていく。旅行に来たはずなのに団体行動がとれない男勢がそこには居た。
　それから一時間ほど作業に打ち込んでいると、こんこんと部屋の扉がノックされる。
　どうぞと促すと、意外な人物がいた。
「お、おう……」
　八幡だった。
　ボッチのエリートを公言する彼が、自ら秋太の部屋を訪れる。
　秋太の灰色の脳細胞が嫌な未来を予感した。
「まさか……告白？　ご、ごめん、俺、男に興味ないから」
「違ぇよ。なに、俺ってそんな奴だと思われてたの？　俺は健全な男子だから」
「ガハマちゃんの胸とかガン見してるもんね。あらやだ、八幡いやらしい」
「やめて、ホントやめてっ！　由比ヶ浜も最近、俺に対して遠慮がなくなってきてるからっ」
「元々、遠慮なんてないでしょ？　ヒッキーキモいを定型句のように

使ってるし」
「……実はだな」
「無理やり話を逸らしたね」
「実はだな。秋田に作って欲しいものがあるんだ」
　そう言って、自分の携帯を八幡は差し出した。
「……八幡、犯罪だよ？」
「ば、ばか、違ぇから。これはあれだよ、あれ、そう！　友人の頼みだから仕方なく……」
「八幡の大親友である俺が頼んでいないから、その理論は崩れる」
「なんで俺の友達がお前しかいないことになってんだよ。言っておくけど俺には戸塚という天使が」
「天使って友達じゃないし。へぇーでも戸塚さんか。写真の八幡が顔を赤くして可愛さ半減してるけど、それでも十分可愛いね」
　八幡が差し出した携帯の画面には美少女と八幡のツーショットが映し出されていた。
「……男だけどな」
　秋太の手が完全に止まる。
　壊れたブリキのぎぎぎと嫌な音が立ったかのように、秋太はぎこちなく八幡の方に顔を上げる。
　分かる、その気持ち、凄い分かるぞと八幡が深々と頷いた。
「人類の神秘だ。肌とかゆっきー並みだよ」
「戸塚は、戸塚って性別だから。人類の神秘というのも間違いじゃない」
「え、でも、じゃあ、これを俺にどうしろと？　いくら俺でも男を女に変えるなんて無理だよ？」
「お前に頼みたいのは加工だ。天使戸塚にこの服を着させてほしい」
　八幡が画面を操作すると、メイド服が現れた。なぜそんな写真を収めているのか、非常に気にはなったが、秋太はぐっとこらえて八幡の話を聞く。
「戸塚の許可は取ってある。さすがに自分で着るのは恥ずかしいらしいが、写真が加工される分には問題ないらしい。俺の真摯な説得の賜

物だな」
「土下座ね」
　八幡に男としてのプライドはない。八幡ならやるだろうと口にしたが、案の定、八幡は面白いように顔に出した。
「ちなみに写真の用途は？　流石に自家発電に使われるとなると、躊躇うんだけど」
「生々しいから止めろ。ただ戸塚に頼まれたんだよ。お前のことをちらっと話したら、凄そうだねって。だから僕もやってみたいなんて言い出すんだ。俺はあの笑顔を守りたい」
　ニヤける八幡を本気で気味が悪いと思ったが、ただならぬ熱意に負け、画像の編集を承諾する。
　不毛な時間が開始された。
「なあ」
　八幡がきょろきょろと視線を変えながら、秋太に話しかけた。秋太は画像をいじくりながら、八幡に答える。
「なに？」
「お前、雪ノ下のことどう思ってんの？」
　キーを打つ指がゆっくりになっていき、そして止まった。秋太は八幡の方に視線を移す。
「まさかの恋バナですか？」
「違ぇよ。ただ、なんだ、単純な興味っていうか……」
「八幡がゆっきーに惚れるのは一向に構わないよ？　俺とゆっきーは別にそんな関係じゃないし」
「だから、違ぇよ。雪ノ下のことは、なんつーか、同じ部活の人間として気になるというか」
　八幡がぶっきらぼうに答える。そしてその時、部屋の扉の前で何かぶつかる音がした。八幡は首を傾げたが、気のせいかと秋太の方に視線を移す。秋太はちらりとドアの方を向いた後、はぁーと呆れるようにため息を漏らした。その様子に八幡はさらに首を傾げることになる。
「うーん、八幡はさ、自分よりも優れた人間が自分より前を歩いていた

らどうする？」
「そりゃー真似するだろ。度合いにもよるだろうけど、真似できるなら、そのレールを歩いていけば人生は簡単だからな」
「そ。たぶん、ゆっきーはそのレールを歩いてきたんだと思う。幸いと言っていいか、不幸と言っていいか、真似できるだけの才能もあったから」
　秋太が本当につまらなさそうに、まるで雪乃をバカにしているかのようにそういった。
　少なくとも八幡にはそう思えてならなかった。
　ただそれは、同じ部活仲間で雪乃に対して尊敬の念すら抱いている八幡にとって容認できるものではなかった。すぐさま反論に出る。
「別に良いだろ。成功が約束されているなら」
「まあね。悪いとは思わないし、良いことだと思う。本人が納得してればだけどね」
「雪ノ下は納得してないのか？」
「してないから奉仕部をやってるんだよ。初めて話した時はそうでもなかったけど、今は分かる。ただ姉と違うものが欲しかっただけなんだ」
「そりゃあ、何から何まで同じって訳にもいかないだろ。雪ノ下とお姉さんは違う人間なんだから」
「そう。実に単純なこと。違う人間なんだ。だからゆっきーにはゆっきーにしかないものがすでにある。姉乃さんにもゆっきーとは違うものがある。それはどう頑張っても手に入らないもの」
　秋太の言葉には呆れが混じっている。至極当然のことがなぜ分からないのかと。
「……お前は、雪ノ下が嫌いなのか？」
「うじうじしているところはね。あの負けず嫌いは好きだよ。話して楽しいし」
　罵倒は勘弁だけどと小さく秋太は笑う。
「全部が全部好きになるなんてことはない。全部が全部同じになるわけでもない。ただの一つで十分なのに、全部を求める。なかなか強欲

だよね。でもゆっきーはそれが分からない。分かっていれば、自分を知らないとか情けないことは言わない」
「お前は雪ノ下に厳しいんだな。だからアドバイスはしないのか？」
首を横にふるふると振る。
「ゆっきーは強そうに見えて、実は心が酷く弱い。だから、今俺があーだこーだ言えば、簡単に影響されるよ。あの子の根底を支えるものを姉乃さんがボッキリ、バキバキに折ってるからね。俺は別に、あの子に皆の望む雪ノ下雪乃になって欲しいわけじゃない。ただ、自分の立ち位置くらい自分で決めろって思ってるだけ。可愛いからすべてが許されるみたいな痛々しい発言を平然と言うくらいのメンタルになって欲しい」
秋太はちらりと視線をドアの方にやる。
「すげぇ上から目線。やっぱ稼いでいるとそういう言葉がでるのかね。俺には無理だわ……お前、雪ノ下の姉ちゃんにそっくりなのな。怖ぇよ」
「……つまり、それは俺に喧嘩を売っていると。ほーう、八幡、俺は喧嘩は高く買う男だよ」
「ば、なんでそんな話になっちゃうわけ？　褒めてんだよ」
「八幡、良いことを教えてやろう。雪ノ下陽乃と似ているという発言は、お前地球人じゃないだろと同程度の差別発言だ。辞書を引いてみろ、雪ノ下陽乃の下に、人の尊厳を失くす言葉って書いてあるぞ」
「ねえよ。お前、どんだけあの人嫌いなんだよ」
「言葉で言い表せない自分が憎いっ！」
八幡は、秋太にここまで言わせる陽乃に恐怖した。以降、絶対に関わらないと心に誓う。
怖さからか、八幡は話を元に戻した。
「結局、お前は雪ノ下のことどう思ってるの？」
秋太は止めていた手を再び動かす。そして、パソコンを見ながら楽しそうに言った。
「ポンコツ」
「お前、凄ぇな。あの雪ノ下にそんなこと言えるなんて」

「八幡の知る〝雪ノ下〟と俺の知る〝ゆっきー〟は違うってことだよ。人は見方を変えれば別人に見えるから。だからあの雪ノ下陽乃に惚れるバカな男がこの世に存在する」
最後の部分だけ本当に苦々しく言う。本心を見抜けと叫んでいるようにも、八幡には見えた。
「よし、できた。こんな感じ？」
完成と同時に、八幡が食い入るように画面を見た。そして画面上を舐めるように見まわした後、小さく首を横に振る。
「いや、これはダメだ。戸塚はもっと清楚なんだ」
「ならこう？」
「んーいや、良いんだが。それはスカートが長すぎる。清楚の中に隠されたエロ――」
「……」
「本気で引くのマジで止めて」
「いや、俺何してんのかなって。なんか悲しくなってきた」
それからああだこうだ言いながら二人の作業は終了した。
編集した画像を八幡の携帯に送り付ける。
「マイエンジェル彩加」
キャラが崩壊し、画面にキスしかねない八幡。変態の扉を開けさせてしまった秋太は、その光景を見てかなり後悔している。
自分は翼を与えただけ。別世界に飛び立ったのは八幡自身。そう納得して、秋太はそっと部屋を出た。紅潮した八幡をみるのは限界だったようだ。
秋太は精神的に疲労し、「人はなぜ人を愛するのか」と哲学の道に足を進めてしまった。
◆
「あら珍しく元気がないのね？」
広間のソファーに腰を掛けている美少女、雪乃。
（髪が少し濡れてる。テニスでもして掻いた汗を流したのかな？）
ごく自然に隣に座ると、女性特有の良い香りが秋太の鼻に入ってきた。

雪乃も雪乃で、自然に隣に座った秋太に特に文句も言うことなく、普通に寛いでいる。
「道を誤った友人を諭すことができなかった。むしろ開けてはいけない扉を開けてしまったよ」
「……とりあえず、寝なさい」
雪乃は少しスペースを開けて、秋太が横になれるようにした。ごろんと上体を倒し、雪乃の横で秋太は小さくなる。
「何してたの？」
「姉さんが無理やり外に引っ張って行ってテニスよ。由比ヶ浜さんたちはまだやってると思うわ。私は少し疲れたから、早めに上がって、シャワーを浴びたの」
「なるほど、それでこの匂い。女子って凄いよね。俺が同じシャンプー使っても、この感じはでないなー」
「立派なセクハラだから止めなさい」
「褒めてるんだよ。絶賛してる」
「例え褒め言葉でも、セクハラになることは覚えておきなさい。と・く・に、女性の身体的特徴を述べるのはマナー違反よ」
「そう？　ならこれからゆっきーを説明するときは、特に何の特徴もない平凡な子って言うことにするよ」
雪乃がムッとする。それはそれで嫌なのだが、争い続けても面倒になるので、そのまま聞き流した。
「この旅行の目的ってなんだろうね？」
「姉さんの道楽以外の何物でもないでしょう？　貴方、すぐに裏を読むのは止めた方が良いわ。純粋に楽しみたいって思いは人であるなら当然備わっているものよ」
「あれに純粋とか人だからって理論は通用しない」
「人の姉をあれ呼ばわりも、人外扱いするのも止めて欲しいのだけど？」
「俺と姉乃さんの距離感はそんなもんだからしょうがない」
「姉さんとの距離感……。貴方たちって、仲良いのかしら？　それとも悪いのかしら？」

「うーん、どうだろう？　少なくともゆっきーたちの仲よりはましじゃない？」
　陽乃と雪乃は他者から見て明確に分かるほど仲が悪い。陽乃が雪乃を構い過ぎているのが原因だが、その接し方がいじめっ子のそれなのだ。同じ苦労を味わう秋太からすれば、雪乃が姉を嫌う理由は非常によく分かる。
「私は姉さんが嫌いなのかしら？」
「かしらって言われても困るけど、少なくとも好きではないでしょ」
「好きの反対は無関心なんて言葉もあるから、そういう意味で言えば私は姉さんを好きではないのかもしれない」
「無関心ではいられないもんね。何をやっても、必ず前にいるから」
「貴方って、本当に私の心が分かるんじゃないかしら？　盗撮で訴えるわよ」
「なら心の警察を連れてきて。いや、別にゆっきーの心が分かるわけじゃないよ。たぶん、ああいう人を家族に持てば抱える問題だと思う」
　兄にしろ、姉にしろ、優秀すぎるというのは困りものだ。子が優秀であれば、親であれば手放しに喜ぶものだが、弟や妹は別だ。
　すぐに負けを認められるような性格であれば、良かったかもしれない。自分の兄は、姉は、優秀なんだと誇らしく思えるから。
　でも、そうではない性格の人間であればどうだろうか？　何をしても先にやった者がいる。しかも自分以上にだ。比べられ落胆され、そして諦められる。
　自分が望んだわけでもないのに、勝手に期待されて諦められるのだ。雪乃はそんな経験を数えきれないくらいしてきた。
「諦めれば？　って言うのは簡単だよね」
「ええ。でも、それができるような性格ではないの、私」
「俺は越えるべき壁なんて、強いて言えば父親なんだけど、さすがにあれに負けるとは思いたくないな」
「自分の親にすら辛辣なのね」
「親に感謝することなんて、産んでくれたことくらいだ。それもこっ

ちが望んだわけじゃなくて、勝手に合体して作ったんだから、感謝しろってのも中々ふざけた話だよね」
「合体？　……っ！　貴方、そういうのは女性の前では慎むものよ」
「乙女かっ。ちゃんとオブラートに言ったでしょ」
「そ、そうだけど……」
　雪乃は顔を真っ赤にしながら、ぷいっと顔を逸らす。見た目と違って中身がちぐはぐな雪乃に秋太は苦笑した。
「子作りに関しては脇に置いて、ゆっきーは姉乃さんに勝ちたいの？」
「……勝ちたいのかしら？　――そうね、勝ちたいのね、私」
　雪乃からはっきりとした答えを聞いたのは、秋太にとって初めてのことだ。
「挑み続ける人生ってのも面白いかもね」
「面白いと思えたことは一度もないのだけど？」
「ゆっきーはまだゲーマーの入り口だね。どんなクソゲーでも、必ず攻略法はあるんだよ。凄く根気が必要だけど、その辛さも楽しくなって来たら真のゲーマー」
「別にゲーマーになりたいわけではないのだけど？　でも、そうね。私はまだ足りていなかっただけなのね」
「そう！　ゲームオーバーになりながらも、次回のクリアに繋げるのがポイント。一瞬の操作ミスでゲーム機を壊そうと思うこともあるけど、そこをぐっと堪えて挑戦するのが大切」
「例えがあれすぎて、イメージがし辛いけど、要はまだ姉さんに負けたと認めるのは早すぎたということね？」
「そう。例え、負けたとしてもいかにも平静を装って、「あれ、もしかして動揺してない？　何か隠し玉が……」みたいな展開が理想。ゆっきーはすぐ顔に出るから」
　なるほどと、なぜか納得する雪乃。彼女は聡明であるが、意外とポンコツなのだ。
「まず弱パンチから。ガードを固めて、嫌がらせ」
「そろそろゲームで例えるのを止めてもらえないかしら？　分からな

いのだけど」
「小さな勝利の積み重ね。しょうもないことでも勝つことに意味がある。それを俺が証明して見せよう」
にっこり笑う秋太に、一瞬だけハッとなった雪乃だが、言われた通りに平静を取り繕った。
「なんかゆっきーの顔、キモ」
秋太の顔にクッションを叩きこんだのも、平静であるが故だ。

１０話　も、もう一度お願い

女子陣が作った夕食に舌鼓を打っているところに、秋太が爆弾を投下する。
「ふーん、勝負。秋太が私と？」
私に勝てると思っているの？　陽乃はそう言いたげに秋太を見る。
「雪ノ下陽乃は大したことない。そろそろ周囲に教えておいた方が良いと思いまして」
お前こそ、何言ってんの？　と秋太も不敵に返す。
「へぇー、珍しいじゃない。アンタから挑戦してくるなんて。それじゃあ、勝利者には敗者に何でも言うことを聞かせるって言うのはどう？」
「さすがに結婚してくれとかは嫌なんですけど……ごめんなさい」
「なんで私がアンタのことが好きって前提になってるのよ。しかも秋太負けてるし」
「おっと、本能が警戒してたんで。いや～人間、本能には逆らえないとはよく言ったものです」
「ホント、生意気。こんな美人なお姉さんが告白して来たら、それは狂喜乱舞するところでしょ？」
「ええ、嬉しくて木に藁人形と五寸釘を打ち付けますね。なんなら祈祷とかしちゃいます。払い給え～清め給え～」
「それは狂気。乱舞の方は間違ってない気もするけど、私に対して失礼過ぎ」
二人の話が脱線しかけていると、雪乃が短くため息をもらす。
「二人で漫才がしたいなら、相応の場でやってもらいたいのだけど」
「姉乃さんがボケるから」
「秋太がボケてるから」
「それ、ちょっと意味が違いませんか？」
八幡のツッコミが入るが、陽乃がにっこり笑って黙らせる。
「で、お二人は一体何の勝負をするんですか？　もう夜だし、外でテニスって訳にも行かないですよね？」

「めぐり先輩、心配ご無用。これはゆっきーへの愛を測る勝負」
「あ、愛っー!?」
結衣がなぜか一番動揺している。あわわと秋太と雪乃を交互に見て、顔を真っ赤にする。
「そう。お姉ちゃんたる姉乃さんなら当然勝てるはず。こちらが勝負を提示しているわけだし、相手に有利な条件で始めてあげないと、不公平になっちゃう」
「この私にハンデ？　自殺行為もいいところね」
「姉さんがそう言うと、本当に秋田くんを殺しかねないから不思議よね。気を付けてね、秋田くん。負けたら川に身投げよ」
雪乃が放り込んできた爆弾で、八幡と結衣が「ひっ」と距離を開ける。
「こらこら、私を狂人にするなー。もう雪乃ちゃんはホント、酷いんだから」
「……ちょっと本気で実行するんじゃないかとドキドキした。さすがは姉乃様」
「比企谷くん、ガハマちゃん、これは軽い冗談だから。秋太がふざけてるだけだから。だから、そんな人を化け物を見るような目で見るのは止めて欲しいなー。さすがの私も傷つくから」
陽乃の言葉に二人は慌てて謝るが、一旦できてしまったイメージを拭い去るのは難しいらしく、二人して震えている。陽乃が微妙に顔が引きつり、雪乃はお腹を押さえて可愛く笑っていた。
「……で、勝負の内容は？」
旗色が悪いと、陽乃が話を元に戻す。
「ルールは簡単。今から俺とゆっきーが姉乃さんに声を掛けます。どっちが本物のゆっきーかを当ててください」
「いやいや、さすがに秋太と雪乃ちゃんを間違えるわけ――」
「姉さん、本当に間違えないのかしら？」
「え？」
秋太を除く全員が、ぽかんと口を開ける。秋太の口から絶対に聞こえない、女性的な声が聞こえてきた。しかも、自分たちがよく知る人

間の声だ。驚きで言葉がでないのも無理はない。
「俺の４７ある都道府県の一つ、声帯模写」
「お前は全国に一人いるのかよ。それ、特技ってレベルじゃねぇぞ。ビックリ人間だ」
　八幡が少しばかり興奮している。
「昔、漫画を読んでて、できるんじゃないかって思ってやってみた。自分は出来る、天才なんだって思い込んだら意外とできた」
「暗示のレベルでもないんだけど……」
「ちなみに、中学生の時、俺はこの特技を使って、悲しい事件を起こしてしまった」
「な、なにしたの？」
　結衣が緊張の面持ちで秋太に尋ねる。
「当時、校内でもやんちゃでイケイケ系で通っていた九十九里くん。ちょっと怖いけど、美人でモテてたギャル系女子あーしに告白したわけだ。で、あっけなくフラれたわけだけど、何をどうとち狂ったのか、告白したのは俺だという噂を校内に流すわけだ」
　本来なら告白など個人間で行われるものであり、それが成功しようとしなかろうと二人の間の話でしかないのだが、プライドの高い人間というのは自分が敗北者であることを認めることはできない。だから、自分の評価が下がらぬようにスケープゴートを用意するのだ。
「大方、クラスでいつも一人でいる俺なら、自分の恥を擦り付けても大丈夫だと思ったんだろう。反論されてもどうとでも丸め込める自信があったんじゃないかな。しかも運悪く、告白された女子がインフルエンザに掛かってしまって、学校を休んでいたのが、噂の拡散を大きくしてしまった」
「あ、それ俺も経験ある。何もしてないのに、女子が泣いたら俺の所為みたいな噂が流れるんだよなー」
「比企谷くんのそれは本当に比企谷くんの所為で泣いていたのではないかしら？　きっと席が隣同士になってしまったのね、可哀想に」
　雪乃の言葉に、八幡が沈む。
「で、九十九里くんの友達も、なぜか便乗してくるわけですよ。九十九

里くんの名誉を守りたかったのか、脅されたのかは分からないけど。で、放置してたら学年中に知れ渡るはめに」
「あー、なんか中学の頃って、普段目立たない系の子が告白とかしちゃうと、すぐに広まるよねー。うちの中学でもそういうの有った」
「由比ヶ浜さん、いくら秋田くんが目立たない男子であっても、それを本人の前で言うのは失礼よ。もう少し気を遣ってあげて」
「お前が遣え」
　秋太が雪乃を睨むが、雪乃は澄ましたように笑うだけだ。
「で、変な目で見られるのが鬱陶しかったから、校内放送で事の真相をバラしてやった。もちろん九十九里くんの声で。二日後、彼は別の学校に転校していったよ。悲しい事件だ」
「その九十九里くんとやらに同情はしないけど、貴方もなかなかやるのね」
「叩くなら相手の心をへし折るまでって姉乃さんの言葉を実践したまで」
「言ってないわよっ！　その頃、私とアンタは出会ってもいなかったじゃない」
「大邪神、ハルーノのお告げ」
「人を人外にするな」
　陽乃は近くにあったお手拭きを、秋太に向かって投げつけた。簡単に躱されてしまったが。
「で、俺の特技の素晴らしさを理解してもらったところで、姉乃さん、勝負しますか？　まあ、逃げてくれても良いんですけどね。姉乃さんが家族としてゆっきーを愛しているなら、こんな楽な勝負に負けるはずがないとは思いますけど」
「ふっふっふ、その挑発受けましょう。私の雪乃ちゃんへの愛を確かめるいい機会」
「姉さん、気持ち悪いから、２０ｍくらい離れてくれないかしら？」
　姉を全力で拒絶する妹。周囲が「仲悪いなこの姉妹」と思考が一致した。
「では、目隠し――はないから、伏せ」

「アンタ、後でぶっ飛ばす」
秋太に悪態をつきながら、陽乃はテーブルにうずくまる。これで二人のどっちが喋っているかは見えない。
「ではゆっきーはこっちに。位置で判断されても困るからね」
「ちっ」
露骨な舌打ちが、陽乃から聞こえたが秋太はスルーした。
「めぐり先輩とガハマちゃんも目を閉じてて。二人はすぐに反応して声を上げそうだから、それでバレる可能性がある。八幡は……好きにしてて」
「俺だけ扱い酷くね？」
結衣とめぐりは秋太の指摘に自覚があったのか、二人して目を合わせると、一つ頷いて目を瞑った。八幡は不満そうに、テーブルに肘をつき、手の上に顔を乗せて秋太達をみる。
「では……姉さん」
雪乃の声が部室に響き渡る。
「今のは紛れもなく雪乃ちゃんの声」
陽乃が確信めいた反応をするが、次の瞬間その確信が音を立てて崩れていった。
「姉さん……」
全く以って瓜二つの声が、部室に響き渡った。
目を閉じて聞いて居ためぐりと結衣も一様に首を傾げ、どちらが本物なのか分からない様子だ。
「い、今のも……雪乃ちゃんの声」
「さあ、どっちが本物でしょうか？　まさか分からなくて俺を選ぶなんて簡単にわかるでしょ？　本当にゆっきーが好きなら、違いなんて止めてくださいよ。ゆっきーがショックのあまり寝込むかもしれません」
「寝込まないわよ」
陽乃は必死になって考える。雪ノ下陽乃の人生の中でこれほどの選択場面があっただろうか？　秋太か、それとも雪乃か答えは二つに一つだ。

出だしを考えれば秋太の可能性が高い。だが、秋太の性格を理解している陽乃はそれが罠だと確信している。
わざわざ周囲の反応を消すような行動をとっておいて、そんな初歩的なミスは犯さない。
だが、それで雪乃と答えて良いものかどうか。裏の裏ということもある。罠と思わせておいて、実は本物でしたなどというのは、秋太ならやりかねない。
そう思ってしまうと、選べない。迷った挙句、陽乃がとった行動は、
「も、もう一度お願い」
泣きのもう一回をお願いした。
「全く、本当に全くだよ。俺と姉乃さんの仲だからやってあげるけど、だらしないぞ。本物の愛を示してよ。ただ少し条件が変わるけど良い？」
「問題ないわ。雪ノ下陽乃に二言はない」
雪ノ下陽乃史上最高の集中力を発揮する。全神経を聴覚に集中させ、どんな些細な違いも聞き取ってやると、気合を入れる。
「大嫌いよ、姉さん」
先程のようにその声は雪乃の声だった。その内容は大きく変わり、陽乃を攻撃してきているが。しかも割と本気の声色であるため、陽乃が胸を押さえて苦しむことになる。
これが少し変えた条件かと、なかなかのダメージに陽乃は納得した。
「大嫌いよ、あ、姉さん」
一瞬の油断。姉さんと言おうとした瞬間に詰まらせてしまった、一声。男にしては少しばかり高いが、それは紛れもなく男の声だった。
陽乃はがばっと起き上がり、満面の笑みを浮かべた。
「フフフ、油断したね、秋太？　いくら声真似が上手くても、今のは誤魔化せない♪」
「ちょっと待て。今の無し」
「見苦しいわよ。真剣勝負に待ったなど存在しない」
「雪ノ下さん、さっきもう一回を使ってましたよね？」

八幡が冷静にツッコんだが、ニッコリと笑ったまま、八幡の方を見て、陽乃は黙らせた。
「最初に言った方が、雪乃ちゃん」
「本当にいいの？　誤解しているという可能性があるよ。もう少し考えた方が……」
秋太も必死の抵抗を試みる。なんとか、陽乃に答えを変えさせようとしていた。
「諦めが悪いぞ♪　この陽乃様に二言はないのであーる」
胸を張り、豊満なそれを見せつける。勝ち誇った顔も忘れないのが陽乃だ。
だが、その言葉を待っていた男がいる。焦りの表情から一転、いやらしい笑みを浮かべた。
罠にかかった。その顔はそう言っているようだった。
「あ～あ、折角のチャンスだったのに」
「は、ハッタリ？　この場面でそれは中々だけど、さすがに誤魔化せないわよ？」
「じゃあ、答え合わせを。公平を期すために、スマホで撮影しておいたから。どうせ八幡の言葉じゃ信じないでしょ？」
「おい、さらっと俺の信用度を公開するんじゃない」
テーブルの上に立てかけられていたスマホ。
動揺していた陽乃だったが、これで自信を取り戻す。
私が負けるはずがない。そう思って、スマホを覗く。
「……」
陽乃絶句。私もとめぐりと結衣もスマホを覗き込み、そして陽乃と同じように言葉を失った。
画面に映る存在は秋太と雪乃。だが、雪乃は秋太の一歩後ろに控え、何も言葉を発していなかった。
「雪乃ちゃんがしゃべってないじゃないっ！」
そう、最初に声を発したのも、後にわざとらしく失敗したのも、どちらも秋太だった。
「だって、少し条件を変えるよって言ったじゃん。その条件を貴女は

呑みましたよね？」
「でも、言った内容が変わって……は！」
「気づきました？　最初から俺かゆっきーが貴女に声を掛けるというのが勝負内容です。声の掛け方に制限なんてない。だから俺はルールに違反していない」
　秋太は笑みを深めていく。
「で、条件変更を求めて、貴女はそれを受け入れた。だから俺が二度声を出してもなんら問題ないわけですよ。一応は止めましたよ？　本当に良いのかって？」
　確かに秋太は止めてはいたが、普通誰もそんなことは考えない。性格がねじ曲がっている秋太ならではと言える。
「まぁ、良いよ、俺が卑怯だと罵ってくれても。でも、姉乃さんが最愛の妹と俺の声を間違えたという事実は変わらない。ほら、ゆっきーも悲しそうだ。男の声に間違われるなんて、さぞかし彼女は心を痛めているだろう。姉乃さん……最低だね」
　雪乃は悲しんでいなかったが、そのフリだけした。秋太の視線に、しっかりと反応した彼女のファインプレーだ。
「ち、ちがうの、雪乃ちゃん！　これはちょっとしたまち――」
「間違いなんて言わないよな？　陽乃様に二言はないって言ったのは、貴女ですよ？　本当、最低だよ。人に嫌がらせをする前に、最愛の妹を気遣った方が良いですよ」
　ここぞとばかりに、秋太は責め立てる。
　動揺し、心を乱した者には、逃げる状況を許してはいけないのだ。
　敵は確実に仕留める。これが彼なりの流儀だ。
「きっとゆっきーは今日の夜、悲しみで枕を濡らす羽目になるだろう。男の声と間違えられたゆっきーの悲しみは想像を絶するね」
「……」
　陽乃は何も言えなかった。ただ悔しそうに、秋太を睨む。若干、涙目になっているのが、雪乃には衝撃的だった。そんな姉の様子を初めて見たのだから。
　いつも自信に溢れていて、それでいて本心は絶対に人に悟らせな

い。
強い人、それが雪乃の陽乃に対するイメージだ。
だが、目の前で悔しがっている陽乃は、どこか自分に似た印象を受ける。負けたことが悔しくて、でもプライドが邪魔して何も言えないところがそっくりなのだ。
「ね、姉さん」
思わず、そんな姉に声を掛けてしまった。姉の姿を見て動揺していた。それがいけなかったのだろう。陽乃には本当に雪乃が落ち込んでいるように見えてしまった。そんな妹の言葉に耐えられなくなったのか、陽乃は「ごめんね」と一言だけ残して、自分の部屋に戻っていった。
「あんなはるさん、初めて……私、ちょっと行ってくるね」
めぐりは陽乃の後を追って、去っていく。
「姉乃さん、ゆっきーのこと本気で好きだったんだね」
「……そうかしら？」
珍しく雪乃が嬉しそうにした。お互いに嫌っていると思っていた。だけど、先ほどの陽乃は素であったと雪乃は確信している。
自分に謝ったときの、弱々しい陽乃を見て、本当に悔しかったのだと分かる。そして何より、本当に自分を大切にしてくれていたんだと分かる。
「なんかイメージ変わったな。雪ノ下を苛める姉って感じがあったからな」
「私もー。陽乃さん、凄く良いお姉さんだったんだね。ゆきのんとかアッキーを苛めるだけじゃなかったんだ」
二人の陽乃のイメージは相当ひどかったのだと、雪乃は少し姉を気の毒に思う。
「ゆっきー。勝つって言うのはこういう事だよ。どんなくだらない勝負でも、相手に負けを認めさせれば勝ちなのさ。ふふーん」
「女性を泣かせておいて、どうして勝ち誇れるのかは分からないけど、貴方の言いたかったことはなんとなく分かったわ。まあ、こんな勝ち方は貴方にしかできないでしょうけど」

「勝ったものが正義。なんて素晴らしい言葉」
「では、私と勝負しましょうか？　そうね。頭脳戦の得意な秋田くんにはチェスなんていいんじゃないかしら？」
「なにそれ、ルールとか知ら――」
「逃げるのかしら？」
　雪乃の挑発的な笑みに、秋太は軽々と乗った。
「負けたら、語尾ににゃんって付けて一日中話させてやる」
「ふふ、無理なことは口にするものではないわよ」
　それから１０分後。秋太は完膚なきまでに叩きのめされた。当然だ、ルールなど知らないのだから。見よう見まねで、駒を動かしただけで勝てるはずがない。秋太も陽乃と同じで、変な意地を張り通したのが仇になった。
「勝った者が正義。とてもいい言葉ね？」
　悔しがる秋太を見て、雪乃が見下すようにそう言って笑った。
「おいおい、雪ノ下さんがなんか覚醒しちゃってるけど。あれ、やばくね？」
「ゆきのん、超良い笑顔なんですけど！　あんな楽しそうなゆきのん、初めて見たよっ」
　今までにない雪乃の笑顔を見て、結衣と八幡が魅入ってしまったのは、仕方がなかったのかもしれない。

11話　私、可愛いもの

「なんで俺の部屋にいるのかにゃん？」
　美女二人が秋太が宛がわれた部屋に鎮座していた。その半端ない存在感に、秋太が扉を閉めかけた。
「ぶーぶー。秋太は傷心中の美女に、優しさが足りないぞー」
「あはは、ごめんねー。陽さんが秋太くんの部屋に行くって聞かなくて」
　めぐりが申し訳ないと謝るが、本当に謝るべき人間は、「うりゃー」と秋太のベットにダイブしていた。
「私の匂いを染み込ませてやる。秋太が夜な夜な発電を開始するように」
「……」
「秋太くん？　あのー、せめて反論なりなんなりして欲しいんですけどー。お姉さん、割と恥ずかしいかなー」
「めぐり先輩。発電の意味を考えなくていいので、とりあえず部屋を出ましょう。変態はここに閉じ込めるべきです」
　陽乃の言った意味がよく分からなかった純粋なめぐりは「秋太くん、自転車でもこぐの？」ときょろきょろと発電機を探していた。
　そんなめぐりを穢すまいと秋太は、彼女を連れてこの部屋を脱出しようとする。
　簡単に、陽乃によって防がれてしまうが。
「アンタはそこに座ってなさい」
　ベッドに腰かけた陽乃が床を指さす。カーペットが敷かれているため、めぐりもその場に腰を下ろしているのだが、借りているとはいえ、部屋の主である自分が床に座らされるのはいかがなものかと、視線を陽乃の方に送るが、効果はなかった。
「私、秋太に泣かされた」
　秋太が不満そうに腰を下ろすと、陽乃がポツリと呟く。
　女性を泣かせたという事実は、秋太も認識しているので、居心地悪そうに視線を逸らす。

「はるさん、泣かした張本人の部屋で寛いでいるのに、それを言ってもー」
「めぐりの正論が辛い」
「めぐり先輩に泣かしたとか責められると、ちょっと心が痛い」
　天使めぐりの攻撃で悪魔二人はダメージを負う。
「ふぅー、やっぱめぐりは強力ね」
「はるさーん、私を武器みたいに言わないでくださいよ～」
「あはー、ごめん、ごめん」
「それで、お二人……というか姉乃さんはなぜここに？　リベンジマッチですか？　やりませんよ」
「即答すぎるでしょ。そうじゃないわよ。ちょっとお話にね」
　弱々しく笑う陽乃。普段の彼女とはまるで違う。めぐりが秋太に目配せをする。どうにかしてくれないかと。そんなめぐりの意図を含んだ視線を理解した秋太はこくりと頷き、そして、
「邪魔。部屋に帰って」
　あっさりと切り捨てた。
「秋太くんっ！」
「え、いやだって。俺が姉乃さんを励ます意味が分からないですもん」
「そ、そこは、珍しく弱ってるはるさんを気遣って……」
「めぐり先輩。いくら相手が弱ってるからって止めをさせとかやりすぎですよ」
「ち、違うからっ！　どうしてそんな話にっ!?」
　ぷんすか怒っためぐりは、秋太をポコポコ殴る。やはり見た目によらない威力だったため、秋太は後ろからめぐりを羽交い絞めにし、なんとか攻撃を止めさせた。
「アンタら仲良いわね」
　そのやり取りを見ていた陽乃は呆れている。ただそれでもどこか羨ましそうな顔をしていた。
「秋太は兄弟っている？」
「いるように見えます？」
「全然」

「正解」
「秋太くん、そろそろ離して欲しいな。なんか耳元で会話されるとこそばゆい」
　暴れないでくださいと秋太は念を押してからめぐりを解放する。雪乃や結衣辺りなら、異性とこれだけ密着すれば顔を赤く染め上げるのだが、そこは天然城廻めぐり。「秋太くんに抱きしめられちゃったー」と嬉しそうに笑うだけだった。
「なんて眩しいのかしら？」
「姉乃さんの心が汚れているからでは？」
「若干、アンタも顔を赤くしてるわよ。エロガキ」
「めぐり先輩がいけないんです」
「なんでっ!?」
　ぶー垂れるめぐりを秋太が宥めていると、陽乃が先ほどの会話に戻した。
「自分を真似する妹ってどう思う？」
「ゆっきーのこと？　うーん、まあどうだろう？　人間は模倣することから始めるって言うし。良いんじゃない？」
「何をやっても一緒なのよ？」
「て言っても、すべてが全く同じってわけじゃないじゃん。別人なんだから。ゆっきーと姉乃さんじゃまず友人関係の時点で完全な別物。それでも姉乃さんが一緒だと思うのは、姉乃さんがしょぼいだけ」
「どういう意味？」
　秋太の言い方に陽乃が少しだけムッとする。
「ゆっきーの越えられない壁を意図してか、そうでないのかはわからないけど実践してきたわけでしょ？　圧倒的上位者の立場であれば、向かってくる下位者をよしよしと撫でてやることはできる。だけど、実力が拮抗してしまえばそれもできない。姉乃さんの姉としての立場も危ぶまれるわけだ」
　雪乃が陽乃を評価しているように、陽乃も雪乃を評価していた。雪乃は姉を越えられない壁として妬み、陽乃は自分の領域まで自分と同じように進んできた雪乃に無意識に焦りを感じている。

「さっき負けて半泣きしたのも、姉の負ける姿を見せたくなかったからじゃない？　素な感じだったから、無意識だろうけど」
「……私が泣いた理由」
　よくよく考えれば、先ほどなぜ泣いたのか。陽乃は分からなかった。だが、秋太の言葉を聞いてその理由が分かった。
「はるさんは、雪ノ下さんの目標であり続けたいんですね」
　めぐりがニッコリ笑うと、陽乃がうっと枕に顔をうずめる。止めろと、秋太が言うが、陽乃は自分でも気づかなかった内心を見透かされて恥ずかしくて堪らないのだ。
「シスコン」
「うっさいわよ。アンタも弟とか妹ができれば分かるわよ」
「無茶言うな」
　キッと睨みつける陽乃を見て、「はるさん可愛い」とめぐりは陽乃をさらに真っ赤にさせていた。陽乃の頼れるお姉さんの立場はここで完全に失われている。
「でも、意外だね。姉乃さんはゆっきーを苛めて楽しんでいるだけの人だと思ってた」
「アンタ、本気で殴るわよ？　妹を大切にしない姉はいません。雪乃ちゃんは優柔不断なところがあったから、私が退路を断ってあげてただけなの」
「なのとか言ってますよ。めぐり先輩、あれどう思います？」
「逃げ道を失くして、自分のしたい方向に誘導。これが上に立つ人の力なんだね。うー私には無理かなー」
　あくまで純粋にめぐりは陽乃を上に立つ者として褒めているのだが、秋太と陽乃は戦慄した。この人、相手を追い込む才能が有り過ぎる、と二人の意見が珍しく一致したのだ。
「ん？」
「……めぐり先輩。なんか、すみません」
「……ごめん、めぐり。なんか、ごめん」
「なんでっ!?」
　二人して頭を下げだしたことにめぐりが慌てる。結局、この三人が

揃えば碌な話し合いにならないのだった。
その後、メッキが完全に剥がれた陽乃は持ってきたワインで自棄酒を開始。仕事をする秋太に絡みまくった挙句、ブチ切れられて部屋を追い出された。めぐりだけは丁重に扱われていたが。
「ね、姉さん……」
酒による紅潮。秋太と激しく争ったせいで乱れた衣服。その現場を目撃する妹。
「……お盛んね」
「ちょっとっ!!」
最愛の妹に侮蔑の目で見られた陽乃は、夜な夜な枕もとを濡らす羽目になるのだった。
◆
「今日は……水遊びをしたいと思います」
やけにテンションの低い陽乃に、八幡と結衣が本気で心配する。
「二日酔い。川にリバースとか勘弁してほしい」
「私は立派な乙女。そんなはしたないことはしません」
秋太の言葉で少し元気を取り戻した陽乃は、女子勢を引きつれ、自分の部屋に戻る。水着に着替えるのだと、男勢を挑発するように言って去っていた。
「八幡、今部屋に飛び込めば。君は勇者だ。ラノベの主人公なら絶対に持っているラッキースケベ。発動するときは今だよ」
「バカか。そんなことしたら、俺は真っ先に豚箱行きだ。俺に主人公属性はない」
「目が腐ってる主人公とかそういないもんね。あと性根も」
「秋田くん、言葉の暴力には気をつけなさい。八幡くんがわんわん泣き出しちゃうから」
「ヒッキーまじキモ」
結衣の声で八幡を沈める秋太だった。
それからしばらくすると、女性陣が着替えを終えてやって来た。
「秋太〜、鼻血出していいよ♪」
「指を鼻に突っ込めと？　なかなか斬新なお願いですね。俺としては

拳をその無駄に整った鼻にぶち込みたいのですが」
「どんな解釈してんのよっ!? 普通、ここは悩殺されるところでしょ？」
陽乃は黒のビキニ。惜しげもなく晒された肌は白く美しい。そして引き締まった腰に豊満なバスト。普通の男なら前かがみになってしまうところだ。陽乃が胸を張って揺らした二つの物体が原因で、八幡が前のめりになったのが良い証拠である。
「比企谷くん、地面に感謝を捧げるなら、まずその顔を埋めるところから始めなさい」
「そんなことしたら死んじゃうだろっ」
「あら、社会のゴミが一つなくなれば地球環境には良いと思うのだけど？」
雪乃の冷徹な目が、八幡の八幡くんから元気を奪った。
「ゆっきー、ｄｏｎ，ｔ　ｍｉｎｄ」
「人の肩に手を置くのは止めなさい。そして、その少し涙ぐむのはもっと止めなさい」
雪乃は陽乃とは対照的な白のビキニ。清楚な感じが前面に出ているが、女性の象徴ともう言うべき部分が鳴りを潜めてしまっている。
引っ込み思案なのだろう。
雪乃の後ろから現れた二人はピンクと黄色。結衣とめぐりの水着はフリルの付いた可愛い系であるが、いかんせん、雪乃と比べると自己主張の激しい部分が凶暴さを生み出している。「お～」と秋太は簡単な声を上げた。
「秋太、私と反応が違うのだけど？」
「秋田くん、女性を一部で判断するのは間違っていると思うのだけど？」
雪ノ下姉妹が、ニッコリと笑って秋太に詰め寄った。
秋太はぐっとめぐり達に親指を立てると、逃走を開始。八幡を連れて、ロッジから猛ダッシュで退避した。
◆
「おーかーし～い！」

あっけなく捕まった秋太は腕を縛られ、川に放り込まれている。川の縁に丸太が刺さっており、そこに秋太を縛っている縄が括り付けられていた。底の浅い川でおぼれるような心配はないが、なぜ自分がこんな目に合わなければいけないのかと、さきほどから無駄に叫んでいた。

「沈めるわよ？」

監視のつもりか、はたまた秋太の安全を考慮した上なのか、雪乃が秋太の隣で腰を下ろしている。普段と違い、肌が惜しげもなく晒されているため、秋太としても目のやり場に困ってしまう。

「俺がなんの罪を？　というか八幡も同罪だ」

「貴方の罪は、女性を辱めたこと。それと比企谷くんなら由比ヶ浜さんが面倒を見ているから」

ぐふぁっー！　と溺れた人間が叫ぶ声が聞こえたが、雪乃が邪魔で先が見えない。

「八幡の悲痛な叫びが聞こえてきたんだけど？」

「由比ヶ浜さんったらはしゃいじゃって。子供なんだから」

「そんな子を見るような親のような目で言わないで。それとは対照的な八幡の悲鳴が凄く怖いから」

「大丈夫。ちょっと遊んでいるだけよ。死ぬようなことはないわ」

「川遊びって、こんな怖いものだったっけ？」

自分がそんな目に合わないように、秋太は静かに釈放を待つことにした。

それから３０分ほどして、秋太達は解放された。八幡はやたらとグロッキーだが、「乳引力は凄かった」とどこか満足した様子だったので、触れないことにした。

「さて、川で遊ぶと言ったら、やっぱりこれでしょっ！」

陽乃がじゃじゃーんと出してきたのは、ビーチボールだった。

「ビーチって名前が付くもので川遊びとは、これはいかに？」

「細かいことは気にしないの。バレーは動きが激しいから、ポロリもあるかもね♪」

「めぐり先輩、気を付けてくださいね」

「ふんっ」
「ぶはっ！」
「ひ、ヒッキーっ！」
陽乃はボールを投げつけるが、秋太はなんなく躱す。それが八幡に当たってしまったのは、日頃の行い。
「全く、失礼しちゃうわ。ね、雪乃ちゃん？」
「なぜ私に言うのかしら？」
姉妹において、絶対的に越えられない壁がそこにはあった。零れるほど、ないのである。
二子山の大きさが戦力の決定的差であることは世の常なのだ。
それから『ドキっ、ポロリもあるよ、水中バレー大会』が開催される。ただボールをつなぐシンプルな遊びだが、それゆえに奥が深い。
ぷるん、ぷるるん、ぷるりん
「俺はこれを見るために、ここに来たんだって実感できる」
「激しく同意だ」
揺れる乙女パラダイス。美少女たちの過激な運動に、秋太も八幡もしきりに頷いていた。
「……」
一人の少女からの凍るような視線で身震いしても、彼らは夢を見ているのだと、目の前に広がる楽園から目を離さない。
決して、やや側方の木陰で読書しながら、こちらを睨みつけている少女に視線が合わせられない訳ではなかった。
「八幡、あの岩まで競争だっ」
「お、おう」
少女のにらみつける攻撃により、防御力が低下した二人は、逃げるようにしてその場から立ち去った。
◆
「……」
「無言で睨むの止めない？」
「何のことかしら？　私は不快な男が隣に座っているのが我慢ならないだけよ」

「胸の大きさで、その人の価値は決まらない」
「とりあえず、五分くらい潜水してきてもらえるかしら？」
「それ、死ぬから」
　ふんっと雪乃は秋太から本に視線を向ける。秋太もごろりと、完全に横になった。
「意外ね」
「何が？」
　雪乃が本を読みながら秋太に話しかける。ちらりと視線は秋太の身体の方に向いていた。
「身体を鍛えているとは思わなかったわ」
　秋太の腹筋は程よく割れており、腕や足の筋肉もなかなかのものだ。陽乃にボールをぶつけられて、吹っ飛ぶ八幡と比べれば、その肉体の差は顕著だった。
「プログラマーは身体が資本。打って走って守って、なんならダンスだって踊っちゃうスーパースター」
「全世界にいるプログラマーの皆さんに謝りなさい」
「ごめーん」
「軽すぎるわよ」
　雪乃が本に視線を戻す。
「ねぇ、昨日は言わなかったけど、八幡と俺の会話盗み聞きしてたよね？」
「……何のことかしら？」
　雪乃の視線は本に留まっている。ただ、明らかに一点を見つめるばかりで、本を読んでいる様子ではなかった。
「顔に出すぎ。あの時、俺と八幡とゆっきー以外は外に居たんだから、扉の外で物音を立てれば誰かいるってことくらい分かるでしょ。で、居たのはゆっきー」
「たまたま通りかかっただけよ」
「なんでちょっと偉そうなの？」
「だって私可愛いもの」
　ふふっと雪乃が笑う。

「関係ないし」
「可愛ければすべてが許されるもの」
「なんて痛々しい。でも否定できないのがちょっとムカつく。まさか昨日の話を実践してくるなんて」
　雪ノ下雪乃が可愛いのは紛れもない事実。秋太もそこを否定する気はない。
　だが、やはり納得できるかどうかは別の問題である。
「貴方からすれば私は簡単に言うことを聞かせられるちょろい女ということになるのかしら？」
「もう開き直り過ぎだから。全部聞いてるじゃん」
「すべてではないわ。ちょうど、私のことを比企谷くんが話し出したところからよ」
「それをすべてと言うんじゃないの？」
「さあ、どうかしら？」
　小悪魔的に笑う雪乃。こいつ、ちょっと面倒になったと秋太が少しだけため息を吐いた。
「そう言えば、告白の返事は保留にしておいてあげる。希望があった方が、貴方も人生を謳歌できるでしょう？」
「はい？　とうとう頭壊れた？」
「だって、「負けず嫌いなところは好きだよ」って言っていたじゃない」
「ゆっきー、都合の良い耳してるんじゃないよ。その前にうじうじしているところは嫌いって言ってるから。それに告白してないでしょそれ？」
「今の私はうじうじしてないもの。つまり貴方の好きな私だけが存在しているわけ。そして、異性に好きだというのは告白ととられてもおかしくはない。結論、貴方は私に告白をした」
「なんて暴論。理論の神様に謝ってほしい」
「ごめんなさいね」
「謝っちゃうんだ」
　なんともやり辛くなったものだと、秋太は少しばかり後悔する。ただ、こっちの方が面白いとも思える自分がいるのだから、世の中不思

議であると思ってしまう。
「だから保留にしてあげるの」
「一生、そうしておいて」
「さあ、どうかしら？」
　そのフレーズ気に入ったんですかと、秋太はふて寝するように雪乃から顔を背け、眠りについた。
　その後無防備になった秋太が、陽乃に悪戯されたのは言うまでもなかった。小旅行は陽乃に弱みを、雪乃に自信を持たせるという秋太にとって最悪の結果で幕を閉じることになる。
「俺の顔に落書きした陽乃はどこだっー!!」
　犯人はすでに確定していた。

１２話　お久しぶり

「今日、振り込んだから。これで俺は自由になる」
【……好きにしろ】
「言われなくても。高校は今年中に辞めるよ。一応は感謝しておく、じゃ」
　電話を切り、ぐっと伸びをする。夏休みを残すところ、あと一日という所になって、秋太はようやく長年の呪縛から解放された。
　秋頃を予定した父親への返済が、本日をもって完了したのだ。
　これには理由がある。
「うぅ～もうダメ……」
「姉乃さんの能力の高さに、初めて敬意を持ったよ。今まで嘗めててごめーん」
「ぶっ飛ばすわよ」
　ぐだっと力なく秋太のベット倒れこむ陽乃。秋太の仕事が早く終わったのは、間違いなく彼女の力だ。
　――ねぇ、私にもプログラミングを教えてよ。
　このたった一言が、陽乃の夏休みの予定を大きく変えた。
　旅行の最終日、寝ている秋太の顔に落書きをした次の日の話である。
「ほほーう」
　部屋にこもり、仕事をしていた秋太だったが、乱入してきた陽乃の放った言葉で目を怪しく光らせる。
　陽乃としては悪ノリしすぎたことで、秋太が怒って部屋から出て来ないと思い、仕事を手伝うことで少しでも怒りを、もとい、ご丁寧に加工された自分の変顔を晒した画像を３０分に一度送ってくるのを止めてもらおうという、打算が元の発言なのだが、秋太が予想以上に食いついてしまった。
　それからは、流れるように事が進む。陽乃が常人よりもかなり優秀というのが、秋太のなにかを解放した。泣き言をいう陽乃を椅子に縛り付け、分からなければ容赦なく物理攻撃を加えるという体育会系ス

タイルで、一週間ほどで陽乃を立派なプログラマーに育て上げた。
後は、有無を言わさず自分の仕事を手伝わせる。
文句を言いながらも、物事を完璧にこなしてしまう陽乃は秋太のサポート役としては十分であり、彼の仕事を倍以上に加速させていった。
そして、今日晴れて仕事を完了し、振り込まれた給料とため込んだ今までの貯金を父親の口座に振り込んで、すべて完了した。
「ふぅ～、これでようやくだ」
「私を褒めて。私を甘やかして」
「うるさいよ。サイゼで良いでしょ？　奢ってあげるから」
「労働と全然等価交換じゃなーい！」
ぶーたれる陽乃を取りあえず、シカトする秋太。今は達成感の余韻に浸りたいのだ。
しばらく陽乃が騒いでいたのが、急に静まり出した。いきなりどうしたのかと、不思議そうに陽乃を見ると、珍しく真剣な表情をしている彼女が居た。
「ねえ、秋太。本当に学校辞めるの？」
「辞めるよ」
迷うこともなく即答した。そう返ってくるのが分かっていたのか、陽乃は特に何も反応を示さなかった。
「それじゃ、サイゼに行こうか♪」
「話の切り替えが急すぎて、付いていけないんですけど……」
相変わらずの陽乃の適当ぶりに、秋太は色々と諦めた。
◆
新学期が始まる。秋太からすればあと数か月も通えば、おさらばとなる学校だ。少しばかり、感慨も沸いてくる――わけもなく、つまらなさそうに登校した。
「あら、お久しぶりね？　姉さんが迷惑をかけていたようだけど、大丈夫だったかしら？」
「今回は、俺の方が迷惑をかけた感じかな。初めてあの人に感謝したよ」

「……おかしなこともあるものね？」
「人生なんておかしなことばかり。とりあえず、寝ます」
夏休みの小旅行以来の雪乃との顔合わせも、秋太には特に何かを感じるものではない。顔を伏せると、そのまま夢の世界の住人になった。
昼頃になって秋太は目を覚ます。
夏休みに入る前と何も変わらない。自分のノートパソコンを持つと、そのまま教室を出ていく。秋太にとっての日課なのだ。
「ちょっと待ちなさい」
だが、それを許さない者がいた。雪乃だ。
「なに？」
「貴方は眠りの世界の住人になっていたから、気づいていないようだけど、教えてあげるわ」
雪乃が黒板のやや上の方を指さす。するとそこにはこう書かれていた。
――文化祭実行委員　秋田、雪ノ下
「はい？」
「3限目のＨＲで決まったのよ。男女ペアで」
「いやいや、ゆっきーは分かる。総武の便利屋とまで言われたゆっきーが実行委員なんて苦行を引き受けるのは理解できるけど、なんで俺も？」
冗談はよしなさいと秋太は視線で訴えるのだが、雪乃はハアーと一息つくと、小さく首を振った。
「逆よ。貴方のせいで、私が被害を受けたの。わかるかしら？」
「わかるわけがない」
「では、無知な貴方に問題の解法を与えてあげる。まず定義ね。秋田秋太という人間はこのクラスでは意図的にのけ者にされている」
「異議あり」
「異議を却下するわ。で、そんな貴方が面倒ごとの代名詞ともいえる委員決めで眠りこけている。ではここで問題。クラスメイトのとる行動を答えなさい」

「……俺に押し付ける」
「正解」
　雪乃の天使のような微笑みが秋太に向けられる。
「さて次の問題よ。実行委員は男子女子から一人ずつ選出されるの。クラスでコミュニケーションというものを全くとってこなかった男子が相方という状態で、女子が立候補する確率はどの程度でしょう？」
　雪乃の優し気な笑みは続く。
「期待という幻想を抱いて、５％くらい？　このクラスは女子が多いし」
「不正解。０％よ」
　現実はいつだって厳しいのだ。
「さてここで本題に戻るのだけど、このクラスで貴方と会話をする人間は非常に限られているの」
「ゆっきーとか雪ノ下とか、雪乃さんとかですね」
「そうね」
　ボケにツッコむ気は全くない様だ。雪乃は天使のような微笑みから、少しだけ苛立ちをみせる。
「どこかの秋田さんの所為で、私にそんな役が回ってきたのだけど？」
「ひどい秋田さんがいたみたいだね」
「ええ、本当に。わかるかしら？　その酷い秋田さんに決まり、女子の立候補がないと分かった瞬間、クラス全員が私を見たのよ？」
「勝手にクラスの奴らが決めたんだし、俺に罪はなくね？」
「授業中に堂々と寝ている貴方の罪は重いのよ」
　雪乃はそれだけ言うと、自分の席に戻っていった。秋太が視線をクラスメイト達に向けると、訓練でもしていたのか、一斉に顔を背けた。
　面倒ごとを押し付けてきたクラスメイトに「絶対にこき使ってやる」と呪いのような言葉を吐いてから、秋太はクラスを後にした。
◆
「へぇ～秋太君、実行委員になったんだー」
「数の暴力ってやつです」

「ふふ、でも私も生徒会として参加するし、見知った顔も多いと思うよ」
「そこが唯一の救い。めぐり先輩が居なかったら、寂しくて泣いていたかもしれない」
「え～そんな秋太君、想像できないなー。なんか気持ちわるいね」
　純真な笑顔でナイフを心臓にたたきつける。これが城廻めぐりという存在。
「……えぐり先輩」
「めぐりだよっ！　もう失礼しちゃうんだから」
　ぷんぷんと怒って見せるめぐりだが、「先輩の方が失礼」と秋太は思った。時折出てくるめぐりの何気ない言葉は心が汚れている秋太や陽乃あたりには大ダメージを与えるのだ。
「雪ノ下さんも一緒なんだよね？　秋太君がいて雪ノ下さんが居れば、はるさんが居た時より凄い文化祭になりそうだよ」
「それはないですね。サボる気満々ですから」
「ダメだよ～」
「大丈夫です。気づかれないように手を抜くのは得意。見せてやりますよ、俺の真の実力を」
「変な方向で頑張らないでっ！」
　私が監視するからと、めぐりは秋太の暴挙を許す気はなかった。
「文化祭までの期間は、体調が悪くなると思います。病は気からって言うじゃないですか」
「テンションじゃないのかな？」
「要は面倒だということです」
　しょうがないなーとめぐりは苦笑すると、それ以上は何も言わなかった。なんだかんだ言って、秋太は任された仕事をきっちりやることを知っているからだ。
「あ」
　各々が仕事をしていると、めぐりが何かを思い出したかのように声をあげた。
「文化祭が始まると、生徒会も忙しくなるから、ここも使えなくなっ

ちゃうかも」
　めぐりではなく秋太の話だ。
「俺は先を見通す男です。こんなこともあろうかと、すでに第二作業場は確保済みです」
「おお～さすがだね」
　ぱちぱちと拍手をするめぐり。
「めぐり先輩とのイチャイチャもしばらくはお預けですね」
「そうだね」
「そこはツッコみを入れて欲しかった。めぐり先輩、腕が落ちましたね。高校卒業後は芸人養成所に入ることをお勧めします」
「もう～折角乗ってあげたのに、返しがそんなんじゃ、女子は満足させられないぞー」
「発狂でもすればいいですかね？」
「それは怖いよ……」
　それから、微妙な空気のまま二人は作業を続けた。

◆

　放課後になり、雪乃包囲網を抜け出した秋太は目的地に急いだ。
「八幡」
「うおっ!?」
　目的の人物が教室を出てきた瞬間を狙って、奇襲をかける。ただ声を掛けるという普通の行為だが、普段人に話しかけられることが極端に少ない八幡には十分に奇襲となった。
「……秋田か。てっきり俺を狙った嫌がらせかと思ったぞ」
「八幡を狙う（笑）」
「（笑）って口で言われるとかなりムカつくな」
「で、八幡。君には二つの選択肢を与えよう。ＹＥＳかＹＥＳの二択だ。真剣に考えてくれ」
「テストなどで、１～４の選択肢を与えられたとき、由比ヶ浜のようなお馬鹿さんは運任せに選択肢を選んでしまうが、俺クラスになると答えないという選択肢を選ぶことができる。つまり、お前の選択肢に対して無言という新たな選択肢を作ることができるんだ」

「うんうん。それで、八幡は文化祭の実行委員になることが決まったわけだけど」
「あれれ～？　俺の話が通じてないぞー？」
少年探偵に全く似てない八幡少年。
「で、実行委員の話はもうクラスで話し合われたの？」
「もう少し弄るとかなんとか……」
薄く顔を赤らめた八幡に「ヒッキーまじキモい」と結衣の声で反応して見せる秋太。
「ヒッキー」
「騙されんぞ。たとえ由比ヶ浜の声であっても、言っているのは秋田だ。心頭滅却すれば由比ヶ浜も秋田」
耳をふさいで、わけの分からないことを言い出した八幡に一人の美少女は呆れた視線を送る。
うなされるような八幡を見て、面倒くさくなったのか、話し相手の秋太の方に視線を向けた。
「アッキー久しぶりだね」
「そうだね。相変わらず元気そうだ」
「なんかそこはかとなくバカにされているような……」
うぅーとうなる結衣に、なぜ普通の対応をとってそんな反応をされるのか、秋太は首を傾げる。そして、少しばかり考えて、「なるほど、これがツンデレ」と何かをひらめいた。
「相変わらず、バカそうだね」
「直球で言ってきたっー!!」
む～と怒り出す結衣に、あれと再度首を傾げる秋太。予想した反応が返ってこない。
「ガハマちゃんの乙女心が分からない」
「アッキーの所為だよっ！」
「いや八幡が悪い」
「ヒ、ヒッキーは関係ないから」
「つまり、俺も関係ない。俺と八幡は一心同体」
秋太がそういったその時だった。結衣の後方で鮮血が舞った。

「一心同体……ぐへへへ」
顔をだらしなくした眼鏡女子が、鼻から熱いものを垂らしながら倒れている。そんな彼女に、呆れながらもティッシュを差し出した一人の女子生徒。
「あれ？」
結衣の肩から覗くようにして、秋太が介抱している女生徒を見た。いきなり肩に手を置かれた結衣は、一人真っ赤になって慌てているが。
「あーし？」
懐かしい顔が秋太の目に入ってきた。
†
「あ？　秋田じゃん。アンタがなんでいんの？」
教室の中に、一人だけやたらと目立つ女の子がいた。髪を金に染め上げ、クルクルと巻いている。鋭い眼光は、対人を委縮するには十分。
睨みつけるような目であったが、秋太を見たその子は、少しだけ表情を和らげた。言葉はきつかったが。
「やっぱり、あーし？　あーしか！　お久～。中学以来じゃん」
懐かしいと素直に再会を喜んだ。
「はぁ!?　アンタ、あーしと学校で何回かすれ違ってんの気づいてない訳？　マジでムカつくんですけど！」
「何言ってんの？　あーしはバカだから。俺と同じ高校なわけないじゃん。なに、凄い偶然だね。あーしもここになんか用があったの？
うちの制服を着ているけど、コスプレ？　まあ、よその生徒が他校に入るにはそこの制服を着るのが一番早いけどさ」
秋太が笑ってそう言い、周囲が固まった。
「……殺すっ！」
右腕を振り上げる。握り拳を作り、ためらいなく、遠慮なく、全力で殴り掛かる。
「やめろし」
後方に一歩下がって、攻撃を回避する。避けられたことにさらに腹を立てた女性は、追撃を掛けようと試みるが、秋太がその前に距離を

詰め、凸ピンで沈めた。
「った～！」
「あーし、すぐに手を出すなんて、全く。本当に全く」
「アンタがあーしの事、忘れてたのが悪いんでしょうがっ！」
「忘れてないじゃん。あーしはインパクト強いから忘れないって」
「あーしが総武高に通ってんの知らないくせにそんなこと言うなっ！」
「……はぁ？　あーしってバカだろ？」
「バカバカうるさいし。もうお前マジで死ね」
「……ホント？」
　周囲に視線を向けると、コクコクと頷いた。
「優美子は、総武高生だよ。俺たちと同じクラスだ」
「うわぁーごめん、あーし。あーしはバカだってイメージが刷り込まれてた」
「全然謝ってないからっ！　お前、マジで最悪だし」
　思いのほか凸ピンが痛かったのか、素で忘れられていたのがショックだったのか、優美子は少し涙目だ。それを悟られないように睨みつけるが、あまり効果はなかった。
「あーし、頑張ってたもんな」
「その上から目線止めろし」
「あーし、どんまい」
「その意味の分からなさ、本当に相変わらずだしっ！」
　荒ぶる優美子をなだめるイケメン。周りはいきなりのテンションに困惑するばかりだ。
「アッキー、優美子と知り合いなの？」
「中学が同じなの。前に旅行に行ったときに言わなかったっけ？　告白されたギャル系女子。あれがあーし」
「へぇー世間は狭いね」
「あーしの武勇伝を語ってほしいなら、一晩はかかるぞ？」
「あ、ちょっと聞いてみたいかも……」
「結衣っ！」

「じょ、冗談だから！　優美子、ごめんてば～」
　結衣を怒鳴りながら、しっかりと秋太も睨みつける。優美子の高度な威嚇行為。
「えーっと秋田くんで良いのかな、初めまして、俺は葉山隼人よろしく」
　さわやかに手を差し出す隼人に、秋太は感心した。
「なんてイケメン。秋田秋太。よろしく」
「俺は戸部、ヨロシクっー！」
「私は海老名姫菜。よろしくね」
　隼人に続いて茶髪の戸部と眼鏡っこの姫菜が挨拶を交わす。
「でもでも～、優美子と秋田くんが、知り合いなのマジ意外だわ～。なんつーか、お互い接点ない感じじゃね？」
「あーしは、気遣いのできる良い奴だったんだよ。見た目はアレだけど。だからクラスが一緒だったとき、色々と話したんだ」
「アレってなんだしっ！」
「頭は悪いし品もないけど、良い奴なんだ」
「よーし、その喧嘩買った、買いました！　お前、そこに立っとけし！」
　シュッシュっとシャドーを開始する優美子。完全に秋太が挑発しているので、今度は誰も止めようとしない。「秋田くん、ぱねぇわー」となぜか尊敬する戸部に、優美子は鋭い視線をぶつけて黙らせた。
「まあまあ、優美子。久しぶりの再会なんだろ？　仲良くやっていこうよ。秋田くんもそれでいいかな？」
「いや、これがあーしとの普段通りのやり取り」
「隼人、黙ってて。こいつは一回泣かすから」
　イケメンの制止も聞かず、二人がバトルを繰り広げようとしたその時、
「こら、八幡！　勝手に帰るな」
「なんだよ、お前視野広すぎるだろ。折角逃げれると思ったのに」
　三浦と言い争ってくれよと八幡が肩を落とす。
「……相変わらずだし」
「あーしも」

それだけ言うと、優美子はほかの面々を連れて教室の奥に戻っていった。
「戸部の言葉じゃないけど、意外だな」
「あーしのこと？」
八幡が何となしに尋ねると、秋太は一つ頷いた。
「うーん、別に仲が良いわけじゃないんだけど、こう、小粋なやり取りができる関係っていうか」
「挑発行動にしか見えなかったけどな」
「八幡とゆっきーたちのやり取りもあんなもんじゃない？　お、でもそうするとあーしと俺がめっちゃ仲良しに」
「どこがどうなれば、そういう結論に至るのんだ？」
「え、八幡とゆっきーたちって仲良しでしょ？」
「……違うんじゃね？　たぶん。少なくとも、お前と雪ノ下の仲には負けるよ」
「俺とゆっきーはすでにベストフレンドとも呼べる仲だから。普段はお互いのこと一切知らないけどね」
「お前、親友が多すぎだから。それにたぶん雪ノ下以上にその姉の方が――」
「八幡、それ以上言うと大変なことになる。具体的には、八幡のねつ造記事が校内中に配布されることになる」
八幡は無言で手を上げ、それ以上は触れないことを誓った。

◆

（なんで、あいついるし！　マジでムカつくし！）
優美子は苛立っていた。中学時代の級友にばったりと出会ってしまったからだ。
（秋田の奴、昔からあんなんだし。あーしをバカにして。悔しいから、アイツと同じ総武高受験してやったのに、アイツは別の科で受かってるし）
優美子は苛立っているが、別に秋太を嫌っているわけではない。元々、協調性という点では大きくかけている優美子だったが、目立つ容姿に加え、はっきり物を言う性格も手伝って、中学ではカリスマ性

を有していた。
ただ周囲に集まってくる人間は、人の顔色を伺うような人間ばかりで、それをずっとつまらないと感じていた。そんな時に、会話したのが秋太だった。
――あーし、あーしってバカみたい。
喧嘩を売られたのだと一瞬で優美子は理解した。やるならやってやると、攻撃の意思を示したが、秋太は特にそれ以上は何も言わず、眠りに入ってしまった。
何かが違う。優美子は秋太を見てそう思った。
秋田秋太という人物を注意深く観察すると、よく学校をサボる人間なのだと分かる。ただ勉強はできたため、教師からの受けは悪くなく、ただ病弱な奴というのが優美子が調べたみんなのイメージだった。
それからなんとなく気になって、優美子は秋太を追いかけた。昼休みになれば、消え、放課後は一目散に帰る。何をしているのか、よく分からなかったが、それゆえに興味がわいた。
――あんた、普段なにしてんの？
席替えで偶然隣になったことにより、優美子は試しに聞いてみた。
――親への反抗。
まさか真面な返答がくるとは思わなかったが、返答が予想外過ぎた。
――はあ？　あんた、バカなの？
――バカはあーし。子供は親に逆らって生きるものなんだよ。
こいつ、何言ってんだ？　優美子は本気でそう思った。
それから、なんとなく会話をするようになる。基本的にはからかわれ、バカにされる。それが腹立たしくもあったが、自分に合わせて意見を言ってこない周囲に比べれば、とても楽しかった。
――アンタ、高校はどこ行くの？
――総武。一応は名門だし、親の見栄には十分。
何を言いたいのかはよく分からなかったが、総武を受けるということは分かった。特に行きたい高校があるわけでもないため、このムカ

つく隣人が高校でどうするかを確かめるのも面白いと、優美子は総武高校の受験を決めた。親には泣いて喜ばれた。

――あーし、ホントバカだね

真っ赤になった問題集を秋太が見て、そんな一言を投げかける。

――うっさいし。つーか、頭良いんだから、アンタが教えろし。

――教えてくださいって言ったら考える。

――……教えてください。

――うん、考えた結果やだ。

殺す。優美子が初めて、人に殺意を覚えた瞬間だった。

冗談、冗談とその後は秋太はからかいながらもちゃんと勉強を教えてくれた。

説明の仕方が上手かったのか、教えるべきところが分かっていたからなのか、優美子の成績はどんどん上がっていった。

そして入試前日。

――あーしはバカだから。無理をしなくていい。できない問題はできないから、できる問題を確実に当てること。まあ、どこ受けるか知らないけど。

お前と一緒だし、と優美子は言いたかったが、黙っておいた。もし落ちたら格好悪いと思ったから。

（まあ、あーしがこの学校に入れたのはアイツのおかげって部分もあるし、隼人や結衣たちに会えたことも、アイツのおかげってことになるのかな？　なんかムカつくし。つーかあのいつでも自信ありげなところが、本当に腹が立つ！）

過去を思い出し、そして少し離れたところで座っている秋太を見て、優美子は何とも言えない感情が芽生える。

「あーしのこと忘れてんじゃねーし」

べーっと秋太に見えないように優美子は舌を出した。

13話　貴方がいたから／納得いかない

八幡を強襲してすぐの放課後、秋太たちは会議室に集まっていた。普段は教職員の会議に使われる場で、教室二つ分ほどの広さを有している。

会議室には見知ったメンバーがいた。雪乃はもちろん、八幡に生徒会の面々だ。席は自由に座れるようで、すでに席に座っていた雪乃の隣に、秋太は腰を下ろす。八幡もそれに続き、秋太の隣に座った。

「……意外ね」

「そっちこそな。お前がこういうのに参加するとは思わなかった」

秋太を挟んで行われる会話。秋太はうんうんと頷いているだけだ。

「私の場合は、この男のせいよ」

隣にいた秋太を雪乃は指さし、ついでに非難の視線も向けた。

「……秋田が授業をサボっている間に、クラスメイトたちに無理やり決められたってところか。で、秋田と割と仲の良い雪ノ下にパートナーのお鉢が回ってきたと」

「……比企谷君にしてはなかなかの推察力ね。褒めてあげるわ」

「全然褒められてる気がしねえよ」

「ゆっきーは他人を素直に褒めることができない心が小さな人間なんだ。許してやってほしい」

「なぜそこで貴方が出てくるのかしら？　それに私は褒めるときはちゃんと褒めるのよ」

絶対に嘘だ。秋太と八幡の思考がシンクロした瞬間だった。自分が負けを認めたくない相手なら、絶対にそんなことはしないだろうと、普段の陽乃とのやりとりよく理解している。

「はい、皆席についてー」

なんとも暢気な声であったが、ざわついていた会議室の中でひと際通る声だった。生徒会長として現れためぐりの言葉に、話をしていた生徒たちが素直に従った。さすがは生徒会長と言ったところだ。

教師も合わせて全員が席に着いたところで、めぐりがぱちんと両手を合わせた。

それが合図となり、会議が開始される。
「えーと、生徒会長の城廻めぐりです。皆さんのご協力で今年もつつがなく、文化祭を開催できることをうれしく思います。それでは会議を始めたいと思いまーす」
とても明るい声だ。見知らぬ人が大多数を占めるこの空間でめぐりの存在は、張りつめていた何かを霧散させる。
「では、まず実行委員長の選出から行きたいと思います。やりたい人は手を挙げて」
手を挙げてくれる人がいることを本気で信じているのだろう。楽しそうにめぐりは片手を挙げて、賛同者を募った。だが、そんな彼女の思いとは裏腹に、しーんと黙りこくってしまった。
「城廻先輩がやればいいんじゃないですか？」
静まった空気の中、秋太は率直な意見を述べた。生徒会長という役職に就いているのだから、文実の委員長に就任しても誰も文句は言わず、理想的だとも思える。
「あー、秋田くんは知らないのかな？　文実の委員長は2年生がやることになっているんだ。この時期だと3年生は忙しいから」
普段は下の名前で呼んでいるが、こういった場では気を使い名字で呼んで違和感を周りに与えないように努めた。秋太としては、生徒会を継続しているのにと疑問を抱いたが、めぐり以外の3年生に適用できるわけではないので、一応納得した。
そして、めぐりという最有力候補がいなくなると必然、次に回ってくるのは2年生の面々であろう。そして、この場にいる2年生でおそらく最も知名度が高いであろう彼女に視線が集まるのも当然だった。
彼女とはもちろん、雪ノ下雪乃である。
だが雪乃は目を閉じるばかりで、うんともすんとも言わなかった。秋太がわざと雪乃を肘で軽く小突いたが、全く反応するそぶりも見せない。自分は傍観者であると言い聞かせているようだった。
それに痺れを切らしたのか、文化祭の担当になった教員が、怒鳴るように声をあげた。
「なんじゃい、お前らもっとやる気出せ。覇気が足らんぞ。いいか、文

化祭はお前ら自身のイベントなんだぞ」
やる気のない生徒に対し、やる気のある教師。明らかな温度差がここには存在した。教員の発破掛けも意味なく終わる。それを見て、露骨にため息をついた後、教員は辺りを見回した。
そしてというか、やはりというか、教師の視線は彼女のところで止まった。そして嬉しそうに笑みを浮かべると、彼女に話しかけた。
「……お、お前、雪ノ下の妹か！　あのときみたいな文化祭を期待しとるけぇの」
広島弁のようなしゃべり方で雪乃に話しかけた。そしてその言葉に、「お前が委員長をやるよな？」と暗にふくめていた。
「実行委員の一人として頑張ります」
強面の教師に、半ば脅しのような提案を受ければ、気の弱い生徒であれば頷いてしまうものだが、こと雪ノ下雪乃にはそれはない。言葉を選びつつ、明確に拒絶の意志を示して見せた。
「あはは……じゃ、じゃあ秋田くんはどうかな？　ほら成績も良いし」
良案を思いついたとばかりに、めぐりがそう告げた。
めぐりのような美少女に頼まれれば思春期の男なら頷いてしまうだろう。だが、秋太はめぐりとの付き合いは長い。そんなことで舞い上がったりはしないのだ。いらんことを言ってくれたなと思うだけである。
「どうかな？」
めぐりが困ったような顔で見つめる。相変わらずのあざとさだなと思う反面、これが彼女の良いところなのだろうと秋太には思えた。
「えーっと、やってもいいですけど、その場合完全なトップダウン制になりますよ？」
「うーん、もうちょっと詳しく」
ほかの生徒たちが首を傾げているのを見て、めぐりが補足するように促す。
「簡単です。上の命令は絶対。このシステムを導入するだけです。ここにいるメンバーの中にはやりたくてやっているわけじゃない人も多かれ少なかれいると思うんです。俺とか全然やる気ないですし」

その言葉に教員が立ち上がろうとするが、もう一人の教員が宥めることでなんとか収まった。問題発言した秋太を睨み付けることは忘れずに。

「ただ、任されれば仕事は果たします。組織とはそういうものでしょ？　本人のやる気いかんにかかわらず仕事を回してく。じゃあその組織の中で一番厄介なのは何か？」

「働かない怠け者。そしてさらに悪いのが、組織にとって損としかならない人間」

秋太の言葉に雪乃が澄ましたように答える。

「そう。バイトをやったことがある人間なら誰しもが思ったことがあるでしょ？　なんであいつと同じ給料なんだって。大して働いてもいないし、なんならマイナスにだってなっているのに、時給は同じなんてことが普通にあったでしょ？」

秋太の言葉に同意した者は、小さく頷いている。そしてその数は決して少なくなかった。

「俺が委員長になるならそういうのは許さない。課された仕事は必ず期限内に終わらせる。部活がとか、個人的な用件とか泣き言は言わせない。学校にいる間に終わらないのなら、家でもやってもらう。俺がトップに立った場合はそういった強権を発動するんですけど、それでも良いなら委員長になりますよ」

秋太がそう言うと一部の生徒は嫌そうな顔を浮かべる。八幡などその最たる例であろう。学校の文化祭程度になぜそこまで本気にならなければいけないのかと、秋太の考えに全く乗り気じゃない。

当たり前だ、文化祭の実行委員の中には嫌々やらされている者もいるのだから。

組織を運営する上で、自分のやりやすい環境に持っていくという至極真っ当な意見であっても、誰しも面倒を負うことはしたくないのだ。秋太がこう言った後で彼を委員長に推薦するというなら、それは彼の言葉に従ったことを意味する。つまり、文句は言えない。

秋太もそれを見越しての提案だろう。自分の意見が通るとは思っていない。万が一通ってしまった場合でも、自分のやりやすい環境づ

くりに成功しているのだから、取り立てて問題はない。
「あの……」
小さな声ではあった。ただ静寂が支配しているこの状況では、そんな声でもよく聞こえた。
「皆がやりたがらないなら、うち、やってもいいですけど」
秋太の感想でいえば普通な女の子。確かに今どきの女子高校生といえる雰囲気であるが、これと言って際立ったところもない。明るい茶髪にピアスとギャル系と言えなくもないが、由美子や結衣という存在を知っている彼からすれば、普通な部類に入ってしまう。
「本当？　嬉しいなー。それじゃあ、自己紹介からしてもらおうかな」
彼女の提案に飛びついたのはめぐりだ。秋太のせいで微妙になってしまった空気を変えるために、めぐりは素早く動いた。
「二年F組の相模南です。実は前からこういうのには興味あって、でも人前に出るのとかは得意じゃないから、敬遠してたんだけど、自分が成長できると思って、あれうち何言ってんだろ？　なんか恥ずかしいこと言ってるよ……」
顔を真っ赤にする南。ただ周りはそんな南を好意的に見ている。近くにいた女子は小さな声で頑張れと声援を送っていた。
「ありがと。自分が成長できる場があるならそこに飛び込んでいくことも大切かなって。さっきの人が言ったみたいに完全管理みたいなことはできないと思うけど、うちはうちなりに楽しくやれるように頑張っていきます」
上手い。秋太はそう思った。雪乃も秋太の隣で感心したように目を少しだけ見開いた。
協調性を重んじる高校という空間で独裁を打ち出した秋太の印象は最悪といってもいい。その中で秋太とは違う方針を示すことで一気に人心を掌握しにきた彼女の手腕に、二人は素直に驚いた。人の観察に長けているのだ。
それから秋太という異物に対し、高校生の正道とも言える南が受け入れられるのは明白であった。賛同した者が、拍手で南の委員長就任を迎えている。

「中々だね。その後の進行のグダグダがあるから、能力的には残念そうだけど」
「そうね。彼女のリーダーとしての能力は不明だけど、流れをつかむという一点においては優れていると言わざるを得ないわね」
　めぐりに代わって南が進行し、会議は進んでいった。慣れていないとの本人の弁もあって決して円滑に進みはしなかったが、そこはめぐりがサポートしたことで問題にはならなかった。
「ただ状況を理解しているのかは疑問だね。俺の提案を反対するように立候補しちゃったから、色んな制限がかかるはずなんだけど」
「普通の人であれば茨の道よね。綺麗ごとだけじゃ組織は回らないもの。周囲の人気を得るために大きく失われたものがある。体のいい言葉を吐くだけのお飾りさんではないことを祈るばかりだわ」
　秋太と雪乃は宣伝広報担当になり、今は二人でしゃべっている。さきほどの流れに乗った南に各々が評価を下していた。それと同時に危惧もしている。あの状況で立候補するという危険性を理解しているのか、それが二人には疑問だった。
「八幡は馬鹿だね。記録雑務担当なんて」
「そうね。たぶん、当日しか仕事があまりないから飛びついたんでしょうけど、全く状況を読めてないわ」
　班分けは次の六つである。
　宣伝広報、有志統制。物品管理、保健衛生、会計監査、記録雑務。
　事前説明では、確かに記録雑務が一番仕事量が少なく簡単なものであるのだが、安易に飛び込んではいけない仕事だ。
「雑務なんて体の良い言葉で、実際は何でも屋。面倒ごとを押し付けられる場所なのに」
「それに、普段の仕事量が少ないと思われているから押し付ける側の良心も傷まないし。一人が押し付けだしたら、後はもう悲惨な未来しか待ってないわ」
「役職的にも微妙だしね。こういう時でも上下関係とかってあるだろうし。八幡め、策に溺れたな」
　八幡の残念な未来に合掌する二人だった。

「でも、ゆっきーが広報担当なんてすると思わなかった。どうして？」
「それは貴方がいるからに決まってるじゃない」
にっこりと笑う雪乃はそれはもう可愛くて、綺麗だった。
冗談だ。それは分かっている。
ただ、雪乃の笑顔が今までの彼女がしてきた冗談のそれとは違うように見えた。
どこか余裕があるのだ。
「……なぜだろう、全然好意的な言葉に聞こえないんだけど」
「何を言ってるの？　パソコンが得意で、ポスター制作に必要な画像の編集ができて、仕事の関係上色んなところに人脈を持っていそうな貴方がいるのよ？　ここの仕事量は確実に少ないわね」
「もうちょっとオブラートに桃色な感じで言ってほしかった」
そう、雪乃は小さく答える。手を顎に当て、何やら考える素振りをしてから、改めて秋太を見つめた。
真っすぐに、はっきりと。
「貴方がいるから私はここを選んだの」
秋太は言葉を失った。冗談なのは分かる。自分でそういう振りを頼んだのだから、今言われている言葉が本気でないことは理解している。
だが、理解していても、本能がときめいてしまった。理性を本能が凌駕したのだ。
「ふふ、冗談よ。もしかして本気にしてしまったかしら？」
「分かっていても反応してしまった自分が情けない……っく」
「実は貴方って初心なんじゃないかしら？」
「……むっきーって発狂しようかな。恋愛上級者みたいでしょ？」
「それは怖いからやめなさい」
雪乃に良いようにやられてしまった。そのことが悔しくてたまらない。いつか仕返ししてやる、そう心に誓いつつ、昔のようにうじうじしなくなった雪乃にちょっとだけ悔しくなってしまった。

（か、顔が熱いわ）
すまし顔を装っていた雪乃はそそくさと、会議室を後にした。
初心であるのは彼女も変わらない。
◆
「……」
「何？」
秋太が作業場として使っている奉仕部に向かう途中、やたらと睨み付けてくる女子生徒と出会った。
中学からの付き合いなのだが、目の前の女の子が同じ学校に通っていることを知ったのは、本当についさっきのことだった。
「何でもないし」
「そっか。じゃ、またね、あーし」
「ちょっと待ちな！」
用はないと言われれば、秋太にとってはそれまでである。彼女を無視して、そのまま部室に向かおうとしたわけだが、それを女性のほうが止めてきた。
「もう、全くもうっ！　あーしは相変わらず面倒なんだから。言いたいことははっきりと言う」
「うっさいしっ！　あんたに文句があったから待ってただけだしっ！」
がるると威嚇するように少女は秋太を睨み続ける。自分を忘れていたことに対する彼女なりの復讐だ。
「どうして、俺の周りにはこんなに攻撃的な女子しかいないんだろうか？」
「……あんたが挑発するからじゃないの？」
「っく、あーしに物を教わる時がくるなんて」
「そういうところだからっ！」

少女は秋太を叩くように腕を上げたが、それが振り下ろされることはなかった。
「変わったね。昔なら叩いてた」
「どうせ避ける癖に」
「まあ、そうなんだけど、あーしも少しは大人になったんだなって思って。今、少し感動している」
「あんたは昔のまんまで嫌な奴だし」
「子供心を忘れない、そんな大人に俺はなりたい」
「知らないし」
少女は疲れてため息を吐くと、全身の力を大きく抜いた。
「あんたは変わらないままでいい。その方が張り合いがある」
「あーしは変わった方がいい。顔は綺麗なんだけど、品がないし。まあ、キャバ嬢とか向いてそうだから、そのままでいるというのもありかな。お金は稼げるだろうし、天職かもね」
「……なんで、あんたにあーしの将来を心配されないといけないんだし」
「綺麗……」とあーしはぽつりとつぶやいたが、それを隠すようにして、不満そうに返答した。
「ああ、でもなんか懐かしい。このどうでもいい感じの会話。中学の頃を思い出す」
「どうでもいいとか、かなり失礼だし。あーしが話しかけてるんだから、少しは嬉しそうにしろ」
「わあーすごくうれしいー」
「ぶち殺すっ！」
ふんっと全力で蹴りを見舞う。ただ予測していたのか秋太は軽くバックステップをしてかわす。
問題なのは少女の方だ。怒りに任せて全力で足を上げてしまったため、とある部分が秋太の眼前に晒されることとなった。
「あーし、恥じらいを持ちなさい」
「――ぁ」
急いで足を閉じて、しゃがみ込む。耳まで真っ赤にして、少女は秋

太を睨んだ。不幸中の幸いなのが、周りに人が誰もおらず、見られたのが秋太だけであったということ。
ただ、恥ずかしいことには変わりない。
「あーし、どんまい」
「お前、マジで最悪だしっ!!　つうか少しくらい反応しろっ!!」
少女はそう言ってから、逃げるようにして秋太から離れていく。
「秋田っ!」
少しばかり離れてから、少女は振り返って叫んだ。
顔を赤くして照れている。それでも楽しそうに笑ってから、突き出した親指を下に向けた。
「ば～かっ!」
「あーしに馬鹿呼ばわりとか納得いかない」
秋太は走り去る少女の後姿を不満げに見つめていた。

１４話　人気者の定義は難題

「あ、アッキー、やっはろー！」
　文化祭の会議を終え、ひと仕事しようと奉仕部に訪れた秋太。出迎えたのは、結衣のいつも通りの満面の笑みだった。その彼女の隣にはすでに到着していた雪乃が読書にいそしんでいる。
「……ガハマちゃん、ごめん」
「え!?　なに、そんな真顔で……？」
「実は、いまぱっと思ったどうでもいいことなんだけど、ガハマちゃんはここの部で仲間はずれであることが確定した」
「そんな嫌なことを面と向かって言わないでよっ！　なんでなんでっ!?」
　半泣きになりながら、秋太に縋る結衣。仲間はずれはやめてと、秋太の体を力いっぱい揺らす。
「いやね、八幡は比企谷でヒッキー。俺は秋田でアッキー。そして雪ノ下でゆっきー。ガハマちゃんだけ、この法則に当てはまらないっ！　くっ」
「くっ、じゃないよっ！　ホントどうでも良い理由なんですけどっ！」
「ここは由比ヶ浜を改名して雪ヶ浜にでも……あ、ダメだ、結局ユッキーで被る。ガハマちゃん、じゃあね」
「ちょっとっ！　やめて、やめてよっ！」
　捨てられた子犬みたいだなと秋太は思った。
「ま、冗談はさておいて、放課後になってもうるさいガハマちゃんに静かにしようって、そう言いたかったんだ」
「その一言のために、私を傷つけないでよっ！」
　ええーんと泣きながら雪乃の元に向かうが、読書に集中していた雪乃はそれを適当にあしらった。
　雪乃にも相手にしてもらえなかった結衣がわめいていると、ドアがゆっくりと開いた。
「え、なんで放課後でもこんなに騒がしいの？　リア充の特殊能力？」
「特殊能力うんぬんで言えば、八幡の腐ったような目もそれに当たる

ね。効果は相手を憂鬱にするかな？」
「お前、なに満面の笑みで酷いこと言ってくれちゃってるの？　もしかして、俺のこと苛めてるの？　言っておくけど、俺の戦闘力５だから」
「ゴミめと貶されたおっさんに謝れ」
「お前は俺に対して謝れ」
　遅れて部活にきた八幡が第一声にはなった言葉で大ダメージを負ってしまった。
「おお、よく考えればガハマちゃん以外は文実じゃん。ここでまたひとつ、仲間外れの要素ができた」
「まさかの追い打ち!?　傷口に砂糖を塗らないで！」
「惜しいっ！　でもガハマちゃんにしては頑張った方」
「まあ、実際塩でも砂糖でも同じようなもんだからな。由比ヶ浜なら正解で良いんじゃないか？」
　二人は褒めたたえるように、拍手を結衣に送った。指摘された間違いに気づかない結衣は「えへへ、そ、そうかな」と一人浮かれている。
「これが可愛さか」
「そこは同意しよう」
　結衣の無垢な心に二人の考えは一致した。乙女がバカであるというのは、一種の可愛さなのだと新しい定理が二人の中で生まれた。野郎には適応されない。
「相変わらず、貴方たちはおバカさんね」
「異議あり！　少なくとも俺はこの二人側じゃない！　ゆっきー側の人間」
「異議を認めましょう」
「それなら俺だって……」
「数学で赤点をとる人間はこちら側ではないわね」
　雪乃の言葉に八幡は押し黙り、結衣もぴくりと反応した。不毛な争いだ。
「テストの点数で人の価値は測れない。つまり俺は大丈夫だ」
「つまりの使い方を学びなさい。国語学年４位さん」

「うるせぇ学年1位」
「ちなみに学年2位はこのわたし様です」
　へっえんと胸を張る秋太。結衣は次元が違うのか「うぅ～」と今にも消えそうな声をあげて、小さくなっている。
「でもまあ、テストで人の価値を測れないってのには賛成かな。あ、ガハマちゃん、最低限度っていうのがあるから、そんな嬉しそうな顔はしないように」
　喜色満面になった結衣を一気に叩き落す秋太。決して、テストができなくて良いと言っているわけではないのだ。
「高校という場だと特にそう感じる。勉強ができるからと言って、その人が学校の中心ってわけじゃないし」
　雪乃も八幡も秋太の言葉に同意した。結衣は苦笑いを浮かべるだけだ。
「うちのクラスも葉山の集団がクラス上位カーストだからな。葉山は成績が良いから別としても、由比ヶ浜とか由比ヶ浜さんとかがいるからな。学力というか戦力ダウンの元凶がいてもクラスカースト上位は安泰なんだよな」
「……まさかヒッキーにここまでバカにされるなんて」
「驚くところはそこかよ。ま、俺が言いたいのは、他人というか、俺とか俺なんかの迷惑も考えずによく騒げるなってことだ」
「比企谷君、貴方も他人の迷惑を考えていないのだから、文句を言うものではないわ」
「はぁ？　俺とか超周りに気を遣って生活してるっての。気を遣いすぎて、周りに認知されないまであるからな」
　八幡の自虐に、秋太も雪乃も結衣も、言葉を見つけることができなかった。皆して、目元に手をやり、八幡の普段の生活を憐れんでいる。
「八幡……」
「比企谷君……」
「ヒッキーマジで可哀想」
「や、やめろよ。そういう普通の反応が、俺のガラスのハートを粉々にしていくんだぞ」

自虐ネタで戦闘不能に陥る八幡であった。
「我が物顔で振る舞うのが許される理由って何かな？　学業なら、確実にゆっきーがこの高校でトップの地位を取れるはずなんだけど。そして、完全な階級社会が出来上がるわけだ」
「はは、ゆきのん学年一位だもんね」
「私は猿山の大将なんて恥知らずな真似、ごめんだわ」
バカにしないでと雪乃が不機嫌さを露わにする。トップに君臨することができないとは言わないあたりが彼女らしい。
「でも権力的にはさ、クラスで言うなら委員長が一番じゃん。大抵は何の役にも立たないんだけど」
「クラスの委員なんて、余程の人望がない限り、押しつけられた役でしかないわ」
「じゃあ、つまりは騒いだもの勝ちってわけか。今度八幡と一緒にクラスのトップの座を奪いに行ってみようかな。どんちゃん騒ぎしてみよう」
「止めなさい。勝負にもならないわ」
「アッキー、それは悲しい未来しか待ってないよ」
八幡への嬉しくない信頼度の表れた二人の言葉だった。
「ふむ、夏休みの課題に生態調査があったけど、クラス内でのグループという生態を研究すれば良かった。面白い調査結果が得られたはずだ。くっ、姉乃さんに付き合わずに、調査を進めていれば、文化祭で研究発表できたものを」
「なんか変なスイッチ入ってるんですけど！」
「姉さんが悪いことには同意するわ」
「いや、それはお前らがおかしいだろ。さすがにあの人が可哀想だ」
謂われのない罪をきせられた陽乃に八幡が同情をした。
「いや、まだ間に合うかもしれない。これを論文にして発表したら学校教育の在り方が少しは変わるかもしれない」
「……確かに」
「ゆきのんまで同意しちゃったっ！」
二人でニヤリと笑う姿が実に怖かったと、結衣は後に語った。

「テーマは高校生の上下関係。何をもって偉いとするのか」
「なんか割と本気だし」
「まずは学力よね、いえ、でも中学、高校でも学力が一番の人間がトップ階級にはいなかったわね。情報源（ソース）は私」
「さりげに自慢入ったっ」
　ツッコミ役に回る結衣が大忙しだ。
「よし今日の部活の活動テーマが決まりました」
「部長は私なのだけど、今日の活動方針に関して異論はないわ」
　奉仕部ってなんだっけと結衣が本気で首を傾げる。きっと文化研究部を兼ねているのだと現実逃避を始めた。
「では、比企谷くん意見を」
　結衣に「無理無理、あの二人を私だけで止めるのは無理だからっ！」と本気の懇願をされて八幡に話が回された。
「えっと……」
「とりあえずクラス内での序列関係についての貴方の意見を言って欲しいの。色々思うところはあるでしょう？」
「その意味深な発言止めてくんない……序列ね、まあ、あれだリア充は爆発しろってことだな」
「結論からいったー！」
「比企谷君、貴方の妬みは置いておくとして、もう少し具体的に話してくれないかしら？」
「要するにだ、高校生っていうのはステータスに拘る生き物なんだよ。別に高校生じゃなくても社会全般そうだと言える」
　分からなくもないと他の面々が頷く。
「でだ、社会人なら働いている場所、その場での役職が物を言う。ただこれが学生という立場になると酷くあいまいになる」
「明確な上位者の基準が存在しないと言いたいわけね」
「まあ、そうだろ。基準があるなら、由比ヶ浜は別として、雪ノ下や秋田が完全にトップ階級だ。学業というものを重視する学校内でトップ層なんだからな」
「遠回しにバカって言われたっ！」

その学校の気風にもよるだろうが、学業トップの人間が学内トップというわけではない。
「高校生には学業面の他にいかにイケメン、美少女であるかが求められる」
「うわ、ヒッキーキモ」
結衣の心無い言葉が八幡にクリティカルヒットするが、日々奉仕部で罵倒訓練を受けている八幡はダメージを最小限に抑えることができた。そしてこう続ける。
「カッコいい男子と付き合っていればそれだけで、女子の評価が上がる。学内最高の男子と付き合えば、たとえその相手が最高の女子でなくてもなんとなく最上位の地位に就くわけだ」
「それは人によるでしょ。仮に八幡とゆっきーが付き合ったとしても、八幡を最上位に置く奴はいないと思うぞ」
「秋田くん、仮定の話でも言っていいことと悪いことの区別もできないのかしら？　訴えるわよ」
「俺が悪くないのに、なんでこんなにも心が痛くならなきゃいけないの」
この部室にいるとよくダメージを負う八幡である。
「ま、まあ、あれだ。プラス補正がかかることは否定しないだろ？」
「んー八幡とガハマちゃんのペアで考えても、八幡の地位は変わらないんだけど」
「ちょっ、ちょっとアッキー何言ってんのっ！　わ、私と、ヒッキーなんて、あ、りえないからっ！」
「全力で否定された俺、可哀想なんだけど」
「あ、ちが」
何かを言いかけた結衣は慌てて口を手でふさぎ、ぶんぶん首を振って、何かを否定した。
「比企谷君のことは例外としても、なるほどね」
「つまりゆっきーが男子にモテるのも、あのイケメン葉山君が女子にモテるのも、自分達の補正ステータスのためということか。なるほど」

「その言い方だと、私の容姿に文句があるように聞こえるのだけど」
「褒めてますよ、絶賛してます。美人さんは得だね。あ、ついでにガハマちゃんも」
「なんか全然うれしくない褒められ方っ！」
「……他意がないならいいのよ」
　昔の雪乃なら照れて顔を赤くしているところだが、そんな素振りを見せなくなり、少しだけ残念だと思った。嬉しいと思っているのは分かるのだが。
「総括すると、高校生は学力よりも人気。バカでも美男美少女であれば、地位は上ということか」
「悲しい世界だ。ボッチが住める世界じゃない」
「人気が基準になるとそうだね。でも、人気者の明確な定義ってなんだろ？」
「んーカッコいいとか可愛いっ！」
　結衣がはいと手を挙げて、宣言する。同じことを繰り返す、バカの定義である。
「八幡とゆっきーが人気者じゃないからアウト」
「同列扱いはさすがに嫌なのだけど」
「雪ノ下さん、人気者には思いやりが大切なんですよ。だから俺をもっと思いやって」
　八幡の発言を雪乃は聞き流した。
「あ、でもヒッキーの言うことが当たりかも。やっぱ、優しい人ってみんなから好かれるし」
「由比ヶ浜さん、優しさは時に残酷よ。優しくしている自分に酔ってる輩が一番たちが悪いわ。状況を悪化させていくから」
「なんかすごく重みのある言葉」
「ゆっきーの経験談か。ちなみに八幡は？」
「ばか、俺なんて超優しくされたし。何かというと話しかけてくれる女子が居たんだが、ちょっと勘違いして告白してみたら、次の日には公開処刑されたわ。黒板に書かれたあの絵は上手かったなー」
　八幡が遠い目をし、他の面々が顔を抑えた。あまりに見ているのが

辛くなったようだ。
「……比企谷君の話から、優しさは人気者の定義に反することが分かったわ」
「ていうか、ヒッキーに語らせたらどんな人気者でも、悪人にしかならなそう」
　結局、人気者の定義は決まらなかった。
「学校で人気者にしてくださいって依頼が来たら、俺らにはできないよね」
「４人中３人が個人プレーを得意としてるからな」
「あら、一人は完全に孤立してるの間違いじゃないかしら？」
「ゆきのん、これ以上ヒッキーを苛めるのは可哀想だよ」
「由比ヶ浜、どちらかと言えば、雪ノ下の罵倒より、お前の気遣いの方が辛い。なんか死にたくなる」
「私の方が嫌なのっ!?」
　人は慣れる生き物である。昔から陰口や悪口を言われ続けた八幡にはその手のことには耐性がついている。
　優しくされることに慣れていない八幡からすれば、こちらの方がダメージがでかい。
「高校生って大変だよね」
「そうね」
「だな」
「なんで皆納得しちゃうしっ!?」
　結衣は思った、こいつらはもうダメかもしれないと。
「でも、なんで人は人気者になりたがるんだろうな」
「比企谷君、貴方が言うとただの僻みになるからやめなさい」
「なんだよ、ちょっと思ったことを口に出しただけだろ」
「八幡はちょっと口走ったことでも、人に不快感を与えるんだね。凄い」
「お前らタッグを組むなよ。俺が激しく傷つくから」
「俺とゆっきーはベストカップルだからね」
「……違うわ」

雪乃の鋭い目つきが少しばかり鈍ったが、それでも否定の言葉は強かった。
「でも、ヒッキーの言うように、なんで人気者になりたがるんだろう？」
「厭味か。お前もどっちかと言えば、人気者だから。バカだけど」
「最後の余計だしっ！　それに厭味でもないからっ」
結衣が慌てて否定する。
「人は往々にして人を傷つける。さすがはガハマちゃん、最低だ。八幡狙いなんて普通の人にできることじゃない」
「由比ヶ浜さん、もっと思いやってあげなさい。比企谷君が可哀想よ」
「いやいや、二人にだけは言われたくないしっ！」
全くもってその通りだ。秋太と雪乃の二人が慈しみの笑みを浮かべているが、傍から見れば邪悪そのもの。被害者である八幡は慣れたのか、特に気にはしていない。
「人気者ねー……成りたい人」
秋太が尋ねる。見かけに反して、根は内気な結衣はもちろん、我が道を行くを信条としている雪乃と八幡も反応を示さない。この場で人気者になろうとしている奴などいなかった。
「誰もなりたくないと？　人気者になればちやほやされるのに」
「そう考えると私は小学生の頃、とても人気者だったわね。きっとファンが多かったのよ。上履きとかリコーダーとかよく無くなっていたもの。人気者の特権ってやつね」
「バカ、俺なんてもっと凄いぞ。放課後になって帰ろうとすると、必ず「比企谷菌、帰るのかよ！　早く帰れ！」とか「ヒキガエルが帰るぞ。さっさといなくなれっ！」とか、よくクラスメイト達からの熱いエールを送られたものだ。帰り際に大歓声とか、超人気者じゃん」
二人にとっての人気はあまりプラスの方向に働かないらしい。
「アッキー、なんか過去のつらい話大会になってるんだけど」
「しょうがない、ここは俺も参戦して」
「待って！　アッキーまで行っちゃったら、私だけ仲間外れだよっ」
「はい、出ました、苛められたことない発言。俺、これからガハマちゃ

んを苛めるように心がけるよ」
「や、やめてよっ！」
「もう、ガハマちゃんは我がままなんだから。こうなったらガハマちゃんを学校一の人気者にして――」
「それはいい意味で？　それとも悪い意味で？」
　八幡の疑問に、秋太がニヤリと笑う。
「もちろん、いい意味で。学校生活が一変するよ。皆が求める由比ヶ浜結衣をずっと演じてなくちゃいけないから。姉乃さんみたいに頭のネジが外れているような人じゃないと、なかなか務まらない役職だよ」
「役職とか言っちゃったよ」
「うぅ～そんな人気者になりたくない」
　嫌な未来を想像したのか、結衣は顔をしかめる。
「人気者なんて職業だよ。タレントとかアイドルと同じ。ファンというか信者ができた瞬間に自由なんて言葉はなくなるの」
「貴方の価値観で行くと、アイドルを夢見る子供がいなくなるんじゃないかしら？」
「先に現実を知るって言うのは良いことだと思うけど？　それを知ったうえで苦難の道を選ぶ人だけ、人気者になる権利が得られる。最近は安売りしすぎて、スキャンダルのバーゲンセールだよ。全く、アイドルとかタレントって言うのは、精神的苦痛を伴う厳しい仕事だという自覚が、契約をする側にもされる側にも足りない」
「お前はどんな評論家だよ。アイドルは一種の幻想を楽しむものだろう？　ああなりたいとか、そういう人の願望を実現させたものだから」
「だからこそだよ。自分の理想が壊されるのは嫌でしょ？　だから人は願うの。自分の理想でいて欲しいって。変わらないでいて欲しいって。そしてそれが鎖となって相手を縛る。ま、お金が発生しているんだから、プロとしての行動を求められるのは当然だけどね」
　話を聞いていた結衣は「げ、芸能界ってなんて過酷な世界……」となぜか畏敬の念を抱いている。彼女の芸能人を見る目が完全に変

わった瞬間だった。
「でも、そう考えると文化祭という企画は上手くできている。ここで目立てば、一気に人気者の仲間入りだ」
「逆よ。人気者がより人気を得る企画なの。普通の生徒には関係がない話だわ。クラスの催し然り、部活の催し然りね。元々人気のある者だけが、舞台に上がることを許されているの」
「なんか、雪ノ下の考え方を聞くと、文化祭が悪しき習慣にしか聞こえてこないんだけど。え、もっと、クラスメイト達とわいわい楽しむものじゃなかったっけ？」
「では、質問するけど、貴方は今までにわいわい楽しくやってきたのかしら？」
八幡は無言を選んだ。だが、それだけで周りは理解できてしまう。ああ、できなかったんだと。時に沈黙とは圧倒的信頼を得るのだ。
「むむ、そうなると文実の委員長に立候補したあのさ、さ……委員長は選ばれし勇者ということか」
「相模だよ、相模。選ばれし勇者の名前を忘れんなよ。しかも選ばれたんじゃなくって自薦だから。自称勇者だから」
「自称ってつけるとすべての言葉に価値がなくなるわね」
「自称人気者」
秋太が言うと、結衣から乾いた笑いが返ってきた。
「自称八幡のベストフレンド」
「元々価値のないものは、なくなることができない。まさかの論破だわ。これは完全に私が間違っていたと認めざるを得ない。ごめんなさいね」
「いいさ、気にしなくていいよ」
「謝るのは俺にだから。お前ら、人をオチに使わないといけない病気にでもかかってんのか？」
「八幡が俺のベストフレンドであることを認めてくれれば、自称は取れるんだけど」
「お前と親友なんてごめんだ。いつの間にか俺の部屋に超高級な壺が置かれそうだわ」

「人を詐欺師扱いとかかなり失礼」
「日頃の行いのせいね」
「あはは……これはアッキーのせいかな」
女子二人の意見により、秋太に詐欺師の称号が与えられることになった。
そして、なんの意味のない部活動が終わろうとしたとき、コンコンとドアがノックされ、一人の少女が教室に入ってきた。
「あ、失礼しま……す？」
中にいた面々を見て、少女は少しだけ困惑した。
自称勇者、相模南の登場である。

15話　悪の帝王に任せていいのかい？

秋太が勇者と称した相模南は部室にいたメンバーを見て少なくない困惑をした。

南に連れられてついてきた友人たちも、想像していたものと違ったのか、困った表情を浮かべている。

「あ、あの平塚先生に聞いてここに来たんだけど……」

南たちが困惑した最大の理由、それは八幡――ではなく秋太の存在だ。

南と八幡は同じクラスだ。それは結衣に対しても同様である。結衣と違ってクラスメイトとあまり関わりを持たない八幡は浮いている。人にちやほやされたいタイプの南にとって、友達のいない比企谷八幡という男は見下す対象であった。自分の方が上なのだと、言葉に出さずとも顔や態度にありありと出ている。

この場の男子生徒が八幡だけであれば、特に問題はなかった。自分よりも下の存在など脅威になりえないからだ。だが、ここには秋太がいる。さきほどの会議で異彩を放っていた彼の存在は南にとって不気味でしかない。

「ここは奉仕部よ。平塚先生に聞いてきたのなら、用件を言ってもらえるかしら？」

部活動が始まる。

先ほどまで無駄話に興じていたが、部員でも何でもない秋太は、奉仕部の活動を邪魔しないように自分の定位置に移動した。

それを見て、南とその友達は首を傾げる。

「彼はいいのよ。彼は本当に人手が欲しい時だけの、臨時部員だから」

雪乃の説明に秋太は反論したくなったが、部室を借りている以上強くは言わなかった。

「へぇー」

苦手にしていた秋太がいなくなった。これは南にとって大変喜ばしいことだ。その思いが漏れてしまったのだろう、南の顔に嫌な笑みが張り付いた。

人の悪感情を読み取ることには天才的な八幡と、本能的にそういう人間を嫌う結衣はすぐに南の表情に気づく。
秋太の立場からすれば部員でない自分が奉仕部の案件に関わるのはおかしいと考えてのことだが、南には彼の行動が違って見えた。
先に行われた文実の会議において、秋太は実行委員から煙たがられる存在となったのだ。それとは逆に支持者を得た南は心理的に自分の方が上なのだとそう思い込んでいる。
そして今、秋太は自分の元から逃げた――そう思える。
立場が変われば見方も変わる。奉仕部の面々と南では現状の捉え方が全く違うのだが、少なくとも南にとって自分は優位な立場でいることは間違いないと確信していた。
「それで用件は？　冷やかしなら帰ってほしいのだけど」
南の心情など知らない雪乃は、当たり前のように言葉を告げる。そして、それはいとも容易く南に現実の立ち位置を理解させた。雪乃の鋭い目つきに、南は少しビビりながら答える。
「え、えっと……ほ、ほら、うちって文化祭の実行委員長になったじゃん？」
まさかという思いである。予想はしていたが、最初からはないだろう。相模南に対してかすかに持っていた期待を雪乃はここで失った。雪乃は彼女に呆れた。
「それで、それで、実はちょっと、自信がないというか、初めてのことだから心配なんだ。それで平塚先生に相談したらここを紹介されて……」
用件を言わない。面倒な人間ほど、話の内容に入るまでの前振りが長く、そしてその意味のない前段階に気づかない。
「要は、お前の仕事に協力しろってことか？」
なんとなく言いたいことが分かった八幡がそう尋ねると、一瞬嫌そうな顔をしながらも、「う、うん」と短く答えた。
露骨な態度に、結衣は怒りを感じた。それを表に出すようなことはしなかったが。
「貴方の掲げた自分の成長という目標から大きく外れると思うのだけ

ど？」
「ま、まあ、そうなんだけど――ほ、ほら！　やっぱり失敗して皆に迷惑かけるのが一番悪いじゃん！　それに、皆協力するってことも大事だと思うし、ね？」
雪乃や八幡ではなく、南は結衣に尋ねる。押しの弱い彼女なら、この場で否定してくることはないと分かっているからだ。
結衣は小さく頷く。そして自分の意見がはっきり言えないことに、情けなさを感じた。
ここで八幡は思った。
目の前の女子生徒を助けるべきなのかと。
彼女は無理やり実行委員長に祭り上げられたわけではない。自分から望んでその立場に就いたのだ。
だというのに、まだ始まってもいない段階から協力を求めてくるなど、彼女の思惑が簡単に読み取れてしまった。
（つまりはちやほやされたいだけで、面倒はごめんってことだな）
八幡は相模南のことをよく知らない。クラスメイトではあるが、会話などほとんどしたこともない。
だが、相模南を知らずとも彼女に似たような人間は何度も見てきている。小学校でも中学校でも、そういう人間は少なからずいたのだ。
（調子に乗った結果がこれか）
ちらりと秋太の方を見た。秋太は少しだけ目を輝かせてキーボードを叩いて仕事をしている。予想とは違う反応に疑念が八幡の中に生まれる。
「で、どうかな？」
心配そうに南は雪乃を見る。ここまで彼女は一度たりともお願いをしていない。協力を求める人間の最低限すら守っていない彼女に、雪乃の返答は至ってシンプルだった。
「お断りよ。貴女の自業自得でしかないもの」
「え？」
「自分で能力が足りないと分かっているのに、どうして立候補なんてしたの？　別に能力の有無を言っているんじゃないの。分かってい

たのなら、委員長を決める前に協力を要請するべきだったのよ」
雪乃は正論を告げる。
自分が劣っていると理解し、それでも文化祭で目立ちたい。そう思うのは勝手だし、そのことに関して文句を言うこともない。
ただ雪乃が許せないのは、そう言った自分への理解がありながら、なぜ事前段階で準備を怠ったのか。目立ちたいなら、ちやほやされたいなら、根回しをしていなかったのか。雪乃は彼女の怠慢に怒っているのだ。
そして突き刺すように秋太の方を指さしながら、続ける。
「貴女があの男を利用し、実行委員長に就いた流れは見事だったわ。ただそれはあの場限りのことだったのが残念ね。はっきり言うけど、やめておきなさい。貴女では人の上には立てないわ」
「な、なにを言って――」
「注目を浴びたかったのでしょう？　実行委員長なんて、その注目を簡単に集められる美味しいポジションだもの。でもね、貴女は見通しが甘すぎるの。甘い汁だけすすれる現実なんてないのよ」
南は顔を強張らせる。雪乃に的確に自分の内面を見抜かれてしまい、動揺を隠すことができない。身体が半歩後退した。
「そ、そんなつもりは――」
なかった、そう言えれば一番良いのだが、ここに来て彼女の本質が顔を出す。惨めな自分は嫌なのだ。
「で、でも、あの場合は誰かが貧乏くじを引くしかなかった。だからうちが引いたんじゃん！」
「違うだろ」
八幡がここに来て割って入る。
「あの時、秋田は自分がやっても良いと言っていた。まあ、条件を提示していたけどな。もしあのまま、誰も何も言わなければ秋田が委員長になっていたはずだ」
「何よ、アンタには関係ないでしょ」
自分より下だと思った人間に反論されるのは納得いかない。そんな彼女の悪い部分がどうしても出てしまう。

「比企谷君を関係ないというのなら、奉仕部も関係ないわね。一応、彼も部員だもの。部員がいらないと言われれば、私たちの出る幕はないわ」
雪乃はそういうと、南から視線を外した。用件は終わった、どうぞ帰ってくれと言わんばかりに、手に持っていた本に視線を移した。
「あ、あんたは良いの？　もし私が委員長を下りたら、あんたに回ってくるよ？」
雪乃には勝てないと思った南は、逆転の一手として教室の片隅にいた秋太に話を持っていく。
「別段問題ないよ。独裁が行えるわけだしね。ある意味君のおかげ」
秋太が事実を告げる。南が委員長を下りてしまえば、候補に挙がっていた秋太にもう一度お鉢が回ってくる。だが、そうなった場合、宣言通りのトップダウン制が敷かれるため、環境としては非常にやりやすい。
南は青ざめる。後ろに控えていた友人たちに視線を持って行っても逸らされるばかりだ。彼女たちは、南が委員長に立候補する際に、手伝うと発言しているのだが、その言葉も女子特有のものでしかなかったのだろう。本当に面倒なことになったら、責任を負う気はない。彼女たちの今示している態度が、そう言っているようなものだった。
「ちなみにゆっきーに頼っても結果は変わらないと思うよ」
「ど、どういう意味よ？」
「わかんない？　仮にゆっきーの協力を得られたとして、君はどうする気だったの？」
南は考えていた。学年一の天才の力を借りれば、色んなことが上手くいくのではないかと。それが最初の段階で拒否されてしまって、困っているわけだが、とにかく雪乃の力さえ貸してもらえれば何も問題はないと思っていた。
「……雪ノ下さんの協力があれば上手く――」
「やれるわけないじゃん。ゆっきーだよ？　おそらく副委員長の立場で実権を握るんだろうけど、本当にいいの？　君は皆から、お飾りか、

無能として見られることになるよ？」
「何か他意があるように聞こえるのだけど？」
　南が何かを言う前に、雪乃が秋太をにらみつける。
「もうしわけ。言い直すよ。悪の帝王とも呼ばれるゆっきーに権力なんて渡したら、大変になることが分からないの？」
「より悪くなってどうするのよ」
　雪乃はため息をついた。
「で、話を戻すけど、制御できない武器は身を滅ぼすことにしかならないよ。きっと文化祭後に聞こえてくるのは、ああ、やっぱり雪ノ下雪乃は凄いな、みたいな言葉だよ。誰も君を褒めないし、労わない。だって、君は何もできないから」
　女子であっても容赦はしない。秋太の予想した未来は雪乃が了承した時点で、実現する。そう確信させるだけの能力を雪乃は持っているし、南が持っていないことも事実なのだ。
「……」
　南も、そして友人たちも押し黙ってしまう。南に至っては目に涙がたまっていた。
「八幡、ここでぐっと来る一言を」
「そういう空気じゃないから」
「さ、さがみん、大丈夫？」
　さすがに泣くとは思っていなかったのか、八幡は何とも言えず、結衣は心配した。
「まあ、俺としては奉仕部に手伝ってもらうって考えは賛成かな」
「え？」
　反対じゃないの？　南は当然であるが、この場にいる他の面々もそう思った。
「いや別に反対じゃないよ？」
「意外だな。お前は雪ノ下と似たような考えだと思っていたんだが」
　八幡が怪訝そうに秋太を見る。
「八幡のあんぽんたん」
「この流れで俺が罵倒されるのっておかしくね？」

「全く、八幡は分かってない。よく状況を考えて。ゆっきーがそこの委員長さんに協力した時の状況を」
「……さっきお前が言った通りじゃねえのか？」
「正解。ゆっきーの株だけ上がるわけだ。さてそこで彼女の掲げた目標を考えてみよう」
「自分の成長だっけか？」
「皆と協力するというのもあるわね」
　八幡と雪乃の答えに、秋太はとても嬉しそうに笑う。その笑顔に南はとてつもない嫌悪感を抱いた。
「な、なにを企んでいるのよ！」
　不安でいっぱいになった南はたまらず叫ぶ。
「企むとは失敬な。俺は別に何もしないよ。ただ、君にとってはさぞ辛い文化祭になるだろうなって思ってね」
「つ、辛い？」
　南の額に汗がたまる。
「だってそうでしょ？　君は俺の掲げた完全制御システムを否定して委員長に就任したわけだ。つまり誰に対しても強制はできないわけ。元々やる気のないメンバーがいるわけだから完全に烏合の衆ができあがる。そして彼らは素晴らしい権利を持ったわけだよ、君のおかげでね」
「う、うちのおかげ……」
「「委員長の方針」、これは魔法の言葉だよ。どんな仕事でも拒否できる。働かないことを周りに非難されてもこの言葉でうやむやにできる」
「働かない人が怒られるのは当然でしょっ！　うちはそんな方針じゃない！」
　南は秋太の言葉を否定する。
「まあね。でもそうなった場合、君があのタイミングで立候補してしまったことが彼らの頭によぎるわけだ。怠けたい人間の思考は大抵、楽はしたいけど怒られたくない。周りがちゃんとやっている場では、そこそこ働くんだけど、大義名分を得ると怠惰そのものに成り下が

る。委員長の方針、君が意図したものではないだろうけど、曲解できる考え方だ。たぶん使われると思うよ。そして、怠け者が出来上がると後は泥沼。仕事をやる人間とやらない人間で二分される。そしてやる側の負担は大きくなり、不満は募る。その不満はもちろん、委員長である君に向かう」

極論すぎる。だけどないとは言えない。南は会議に出席していたメンバーを思い出しながらそう思った。なぜそんな思考が生まれたかといえば、自分が一役員であった場合、確実にそっち側に回ると思っているからである。楽をすることは悪くない。そう思える状況であるなら、誰しもがそうすると南は思っている。誰もが自分に甘いのだと。

「ここでゆっきーの登場だ。ゆっきーなら多少の反論はゴリ押しできる。たとえ非難されるようなことがあっても、あくまで補佐。委員長から頼まれているからの一言ですべて解決。不満を持つ人間はすべて委員長を睨むわけだ」

ここに来て、南は理解した。自分が想像していた以上に状況がやばいのではないかと。

「高校の文化祭とはいえ、一応は名門校の行事。学外から人を招くわけだから失敗なんてできない。もし失敗した場合、ずっと言われるわけだ。あの時の文化祭は酷かった。委員長の相模南がダメだったんだってね。ゆっきーあたりは孤軍奮闘しているだろうから教師の受けも生徒の受けもきっと良いだろうね。人は自分以上に働いている人間に文句は言わないから」

つまり、南は完全に詰んでいるということだ。

奉仕部の協力を得ようと得なかろうと、評価が下がることに変わりはない。残された可能性として圧倒的リーダーシップを発揮して、南が率いていくという未来もあるが、それが現実に起こらないことは本人が一番理解している。

「奉仕部の力を借りれば評価は最悪。自分の力で頑張れば、まだ頑張っているという免罪符を得られるから最悪の評価にはならない。一生懸命な人間を非難する人は少ないからね。で、そうなると君が奉

仕部に依頼をするのは破滅願望があるとしか思えないんだけど、そういう趣味の人ならおススメ。そしてこれが君の掲げた自分の成長の第一歩。凄いね、どん底から這い上がるとか、なかなかできることじゃないよ。頑張って」
秋太はにっこりと笑う。
八幡と結衣はそんな秋太に陽乃並みの恐怖を感じた。本人が聞けば、確実に怒るところだが。
「成長率は半端じゃないね。将来有望だ」
南は全身を震わせて、しゃがみ込む。嫌な未来を想像してもう足に踏ん張りがきかないみたいだ。傍に控えていた友人たちは今すぐにでもこの場から逃げたい思いだった。
「……貴方、あまり女性を追い込むのは良くないわ。冗談にしてもやりすぎよ」
「……じょ、冗談？」
南がゆっくりと伏せていた顔を上げる。
「別に冗談ってわけでもないんだけどね。それに追い込む云々で君に言われたくはない」
「う、うるさいわよ。実際に起こらないのだから冗談でしょう？」
二人のやり取りに南の力が戻ってくる。
「う、うちは……」
「あ、希望的な観測はしないように。君がダメだと思われるのはたぶん確定。ただ文化祭が失敗に終わるってことはないよ、あくまで最悪にはならないってだけ」
「ど、どうしてよ!?」
「だってゆっきーと俺と八幡が居て、さらには生徒会メンバーがいるんだからどうとでもなる。ゆっきーは言わずもがなだけど、八幡はこう見えて、なかなか有能だ。仕事を押し付けても、文句を言いながら結局はやるというまさに社畜体質。不満を言うから周りからの評価は上がらない。まさに完璧な雑用」
「褒めてるの!?　貶してるの!?」
八幡の悲痛な叫びが部室に響く。

「後は貴女の問題よ、相模さん。自分が何をするべきかきちんと考えなさい」
　雪乃がそう言うと、しばらく無言になった。そして南は友人に引っ張られるようにして部室を後にした。
「うぅ～なんかゆきのんもアッキーも凄かった。ちょっと怖かったし」
　緊張で、黙りこくっていた結衣がはあーと息を吐いた。
「貴方の追い込み方って姉さんそっくりよね。こう精神的に潰しに行くところが」
「なんて失礼な。俺の心は深く傷ついた」
「雪ノ下が言うのか」
「あら、比企谷君、何か言いたいことでもあるのかしら？」
「いえ、なんでもないです」
　雪乃の天使の微笑みに、邪悪な存在である八幡は敗北した。怖かったのだ。
「それにしてもお前ら結構ビシビシ行くのな」
「人生を舐めてる感じだったから」
「昔の私の熱狂的なファンと似たような感じだったから。私、ファンは大切にするの。私の物を勝手に持って行ったり、素敵な噂を流したりしてくれるファンには熱烈なファンサービスをしたものよ」
　要約すると、イラついたからということらしい。
「お前ら怖いわ。本当に高校生か？」
「あら、貴方こそ高校生なのかしら？　その目の腐り方とか、魚が死んだときにそっくりよ」
「高校生どころか、人間にもカテゴリーされてないんですけど」
「ゆっきーのお馬鹿さん。八幡の人生を舐めてる感じは、あの委員長以上だから。つまりもう手遅れ。高校生とか魚とかじゃなく、残念な存在」
「そうね。反論ができないわ」
　二人の仲良しっぷりに八幡はあきらめた。
　そんな八幡を見て、結衣は話を変える。

「ねえ、もしさがみんが本当に何もしなかったらどうする気なの？」
「どうもしないわね」
「そうそう。楽な方に逃げるもよし。その場合はガハマちゃんでも代役に立てれば、文化祭当日はなんとかなる」
「わ、私!?」
「俺の４７特技の一つ、圧倒的メイク術を用いてガハマちゃんを、あの委員長風に変身させる。あとは俺が裏からマイクでしゃべれば問題なし」
「そう言えば、お前には声真似があったな。っうかメイク術ってなんだよ」
「こんなこともあろうかと覚えたシリーズの一つ。一家に一台、秋田秋太とは俺のこと」
「お前はどこのネコ型ロボットだ」
翌日、相模南が文実委員全員に頭を下げて、委員長職を辞退した。不満の声も上がったが、そんな彼らに南は何度も「うちには荷が重すぎた。ごめん」と謝って許しをもらった。
秋太の言ったような未来にはならなかったかもしれない。ただ南は怖かった。だから、最悪にならないように立ち回った。調子にのったバカな生徒、そのレッテルを受け入れても学校で孤立するのだけは避けたかった。
そして、秋太が委員長に就任。
反論したそうな人間もいたが、「じゃあ、君がやる？」と一言。それだけで話は終わった。
出だしから躓きはしたが、文化祭実行委員会活動開始だ。

16話　文化祭準備がようやく始まる

【大事な話があります。予定が空いている日はありますか？】
珍しく丁寧な文章だった。そのあまりの珍しさに一度見て、さらにもう一度見て、電源を落としてから再度メールの内容を確認した。
結論、
【病院にでも行け】
そう返信した。
そしてそのメールを返信してから1分後、自宅のインターホンが鳴らされる。
嫌な予感だ。
居留守をしろという本能からの指令だったのかもしれない。
時に人間は科学では解明できない何かを発揮することがあるのだ。
ガチャリ。居留守をすると決意した次の瞬間だった。まるで初めから開いているかのように、事実鍵を閉め忘れていたのだろう、玄関の扉がゆっくりと開いた。
「警察に電話するか」
「こらこらこら」
雪ノ下陽乃の襲来である。
◆
「で、何このふざけたメールは？」
陽乃は当たり前のように秋太のベッドに腰を下ろす。ぐーっと伸びをするとそのままぽたりと背中から倒れた。
夏休みが明け、文化祭が始まるという時期である。蒸し暑かった季節が徐々に涼しさを取り戻していく時期だ。
本人の持っている上品さとは異なって、陽乃の格好は露出が多い。隠すべきところはちゃんと隠されているため、下品というわけではないが、年頃の男の前でもこうも無防備が晒されると、勘違いする者も出るはずだ。
「あ～それ？　シリアスな感じを出せば秋太の反応が変わるかなと思って♪」

ただ少なくともこの二人の間柄で、そんな過ちが起こるはずもなかった。
「自殺するとか、そういうたぐいじゃない限り反応しない」
「あ、そこは心配してくれるんだ」
「俺は姉乃さんと違って良識と良心を持ち合わせているんだ」
「それは私が無慈悲で残酷って言っているのかしら？」
「悪意１００％で錬成されているのが雪ノ下陽乃」
ふんっと陽乃は手近にあった枕を投げつける。適当に投げた割には恐ろしい速度だが、秋太は容易くキャッチした。
「で、こんなしょうもない事実の確認をするために来たの？」
「こらこら。私が悪意で構成されているなんて、そんな事実はない」
「あ、ごめん。悪意で構成されているんじゃなくて、悪意を構成しているんだった。悪の権化だもんね。ま、俺にだって間違いはあるから、許してほ――」
秋太が頭を下げる前に、陽乃は女子にはありえない身のこなしでベッドから飛び起きると、タックルを仕掛ける。秋太の背後にはパソコンが置いてあり、避ければ大切な仕事道具が壊れる可能性があった。
それを計算したうえでの突撃。秋太は簡単に捕らえられてしまった。雪ノ下陽乃１０８戦闘技術の一つ、コブラツイスト。人類最強女子もビックリの体さばきで、タックルからプロレス技への完璧な流れ。所詮は通信で学んだ程度の秋太の技術では逃げることはできなかった。
「オラオラオラァ」
「いたたたたた」
「謝りなさい。ごめんなさい陽乃様と謝りなさい」
「……む、胸……揉むぞ」
「秋太に揉まれてもなんとも思わないわよ。私は雪乃ちゃんと違って心が広いの」
「……大きい……の間違え」
雪乃がこの場にいたら、秋太はアバラ以外のダメージを負うことに

なっただろう。
「ゴ、ゴメンナサイ……ハルノサマ」
「片言発言は頂けないけど、まあ許してあげましょう」
　コブラツイストは見掛け倒し、そう思っていた過去の自分を叱ってやりたいと本気で思った。アバラが嫌な音を鳴らした時点で、危険な技であることを強制的に認識させられた。
「そ、それで俺の肋骨ちゃんに損傷を与えるのが目的なわけ？　ミドルネームにバイオレンスでも入れる気？　陽乃・V・雪ノ下とかちょっと怖い」
「秋太って頭良いくせにバカよね。相手を怒らせない方法とか分かるでしょ？」
「退かぬ、媚びぬ、省みぬを座右の銘としてるんで」
「あんたはもう死んでるわよ」
　ネタが通じたことに、なぜか満足感を得る秋太であった。
「俺が貴女の下手に出るなんてあるわけがない。死なば諸共。倒れるなら陽乃を埋めてからの精神」
「あんた、どんだけ私のこと好きなのよ」
　やや呆れたようにため息をつく。
「冷蔵庫の下から急に現れた黒光りの物体と同程度の好感――」
「殴るわよ？」
「殴ってから言うな」
　陽乃の脇腹への攻撃をギリギリでかわしながら、文句を言う。
　もう本当にこの人何なのと秋太が思い始めたその時である。
「ねえ秋太。文化祭でさ、私とバンドをやらない？　雪乃ちゃんとか、めぐりとかも誘って」
　突拍子もない提案がなされた。
　その提案に間髪入れずに答える。
「嫌に決まってるじゃん」
　簡潔にして明瞭な答え。
「というか、俺は楽器全般がダメ。おたまじゃくしは暗号だから」
「あら、意外ね。あんたなら、こんなこともあろうかと、とか言ってな

んでもそつなくこなすと思ったんだけど」
「楽器なんて人前で披露してなんぼでしょ？　さらに言うならチームプレー。友達の少ない人間には残酷な世界」
「確かに。あんたは友達が少なそうだものね」
「ブーメラン？」
　人当たりがよく誰からも慕われる陽乃。だが、彼女が本音をさらけ出せる人間などごくわずかしかいない。友達に関する発言は、自爆ものだ。
「で、本当の要件は何？　どうせめぐり先輩あたりから俺が文化祭の実行委員長になったことを聞いて、無駄に絡みに来たってとこ？」
「あ、やっぱ分かる？　わざわざ面倒なことをしたなって思って」
「まあ、流れ的に言うのが一番なんだけど、ちょっとだけ興味はあった」
「へぇー意外ね。さっきも言ってたけど、基本は前に出ないんじゃないの？」
「そ、基本はね。だから今回は偶然。色んな事がたまたま巡り合ったの。めぐり先輩だけに」
「全ー然面白くな～い！」
「うるさいよ。それで顧問の先生が言っていたけど、姉乃さんもやったんでしょ？」
「そうね。私の時はそれはもう盛り上がったわ」
　ふふーんとドヤ顔の陽乃。
「そ、だからその文化祭を記憶から抹消しとこうかなって。俺の持てる技術を使って、雪ノ下陽乃を亡き者にしようかと」
「殺人予告ね。警察に訴えておくわ」
「まあまあ、俺からの挑戦状だよ。正攻法で雪ノ下陽乃を倒すというのもやってみたいことの一つだからね。高校生活の記念には丁度いいかな」
　その言葉に陽乃はニッコリとほほ笑む。
「お姉さまの偉大さを再確認するだけよ」
「誰が姉だ」

「まあ、頑張りなさいな。あんたの泣きっ面を拝みに行くからね」
「あ、俺が委員長になったから、貴女の校内への侵入は許さないよ」
「侵入とか言うな。ふっふふ、私を甘く見てもらっては困るわね。許可証なんて簡単に貰えるの。これが権力よ」
「大人って汚い」
　満足そうに陽乃は帰っていった。
「全教師の弱みを握って脅しを――」
　物騒なことを企む少年が居たが、それは犯罪だ。

◆

　文化祭実行委員の活動が始まって数日。進行具合は概ね順調であった。
「ほい、ホームページの更新はおしまい」
「……なぜ高校のホームページにアニメーションが付いているのかしら？　劇場版って言葉が見えるのは、私の目がおかしいということなのかしら？」
「この学校のは普通すぎるからね。進学実績をメインに載せているけど、名門って呼ばれているところの実績なんてさほど気にしないよ。凄いって知ってるんだから。だから、これぞ総武ってところを前面に押し出してみました」
「どこら辺が総武をアピールしているのかしら？　生徒会長がどこぞの勇者になっているのだけど？　そして何よりも、文化祭の告知ページしか操作できないようにロックを掛けられているはずなのに、どうしてホームページそのものを編集できるのかしらね？」
　口角を上げる嫌な笑い方。秋太はそれだけですべてを伝えることが可能なのだ。
「それで、次は機材の方の確認は出来ているのかしら？」
　秋太が実行委員長になったことで、変わったことが二つある。雪乃の副委員長と八幡の雑務班長の就任である。
　雪乃は特に反論を示さなかったが、八幡の方はかなり渋った。仕事が少ないから記録雑務を選んだのに、秋太の下につけば、確実に仕事量が増えると分かっているからだ。

ただ、
「君の天使がニッコリ笑っているよ」
その言葉で十分だった。写真を受け取った八幡は、顔をだらしなくして、「マイエンジェル彩加」と呟きながら別世界の住人になった。
秋太によっていとも容易く落とされた八幡は、今必死になって報告書を作成している。
秋太、雪乃、八幡の三人は横並びで仕事を続けていた。
「今、生徒会の人が確認してる。故障なりしてたら、平塚先生に回すようにとも伝えているよ」
「私、貴方の補佐に就いた意味はあるのかしら？」
「あるよ。今から美術部に行って文化祭ポスターの件で交渉してくるから、ゆっきーはこの場の統率をよろしく。一応各班に指示は出し終えているけど、サボっている奴が居たら睨みを利かせてね。あと、もしＯＢの方が来たら丁寧な対応をよろしく。一人だけ例外がいるけど、それは来たらデストロイ。問答無用で叩きだして」
「任せなさい」
意志が言葉に乗っている。雪乃の返答はまさしくそれだ。彼女には珍しく、メラメラと熱い何かが燃え上がっている。
「つうかあの人のことどんだけ嫌いなんだよ、お前ら」
そう言う八幡も名前を口には出さなかった。何となく名前を言ってしまえば、現れそうな気がしたからだ。「気づいた時にはすぐ後ろ」、彼女を表すキャッチフレーズは、現実に起こりうるから怖い。
◆
秋太は美術部を訪れた。ポスター制作に関して、本日打合せすることになっている。
「失礼しまー……」
美術室のドアを開けると、目的の人物が席について何かを描いていた。それが美術部の活動に関係ないことは見てすぐにわかった。顔があまりにも酷かったから。
「きゃー八×隼はやっぱりやばい！　ぐへへ」
黙っていれば、そして普通にしてさえいれば美少女とも呼べるの

に、顔を真っ赤にして下卑た笑みを浮かべるその様は、いかんとも言葉にできないものがある。
「あ、秋田君。はろはろ～」
「えーっと海老名さんだっけ？　先日はどうも。部長さんは？」
秋太は空気の読める人間である。女性の醜態を目撃したとしても、そこを指摘するなんてことはしないのだ。
「一応、私ってことになるのかな？　うちの美術部は幽霊部員が多くてね、実質的に活動しているのは私くらいだよ」
「うそーん。顧問の話だとそれなりに活発って言ってたけど」
「あはは、顧問の先生はほとんど来ないから。実情をあまり把握してないんじゃないかな？」
それは顧問としてダメだろう。
「となると、海老名さんだけにポスターをお願いするしかないけど、さすがに悪いね。うーん、俺が作った方が早いかな」
「秋田君は絵を描けるの？」
「まあね。ただ絵を描くっていうより、画像の編集かな。パソコン使ってちょこちょこっと」
秋太の技術からすれば問題なくできる。
彼が最初からそれをしなかったのは、高校生らしくなかったから――ではなく、面倒の一言に尽きる。
だが、ここで姫菜一人に仕事を押し付けるわけにもいかないので、自分で作成することに決めたのだ。
「あ、それならお願いしようかな。私としてはクラスの方で忙しいから、実はちょっと困ってたんだよね。他の部員にも声を掛けてみたんだけど、あまり芳しくなかったから」
美術部として色々終わっていた。
「じゃ、話は以上ってことで。お疲れさん」
無駄な時間を過ごした。そんな感想を抱きながら、秋太が会議室に戻ろうとしたとき、旧友に出会った。
「海老名ー、部活終わった？　あーし、アイス食べに行きたいんだけど――ど……」

「じゃ、お疲れさん」
「待ちな」
やはりか。何事もなかったかのように、スルーできるんじゃないかと思った。だが、現実はそんなに甘くない。
がっちりと肩を掴んできた金髪美少女に、秋太はため息を吐いた。
「もーう、あーしは全くだよ。本当に。空気読んで」
「はぁ？　意味分かんないし？」
秋太にとってなのか、優美子にとってなのか、タイミングが悪かった。
「なんでこのタイミングで来るかな」
「どんな理不尽だし。あーしはただ海老名と帰ろうかなって……」
「じゃあ、帰れし」
「あーしの真似すんな」
「優美子、喧嘩腰になっちゃダメだよ。ほらスマイルスマイル」
「あーしがにぱーとかちょっと気持ち悪いんですけど……」
「ふんっ！」
乙女の怒りである。だが、無情にもそれは空振りに終わる。秋太の反射神経は常人のはるか上を行くのだ。
「あーし、はしたないぞ」
「明らかに秋田君が、挑発したんだけど」
「あーしと俺の仲ならこれくらい普通」
優美子も気にしてないようで、空振りに終わった一撃で怒りを収めていた。
腕を組んで、姫菜の方に歩いていく。その行動を見て、帰って良いんじゃないかと秋太は思ったが、それは優美子の鋭い眼光によって阻止された。
「二人の中学時代が少し気になるよ」
「それを語るのには二日必要。あーし誕生の序章から始まって、あーし乙女モードの第二章。なんやかんやあって、終章のあーし笑顔で旅立つの長編物語」
「嘘言うなしっ！　つーか、あーしとアンタが絡んだのは最後の一年

だけだから！」
「絡んだなんて」
「やだ優美子、いやらしい」
　ぐへへとおっさんのような笑い方をする二人。嫌な光景だ。
「海老名、そっちに行くなしっ！　変になるから」
「いや、たぶんもう手遅れ。俺とか関係なく、海老名さん、結構やばげ」
「大丈夫、大丈夫。私は腐ってるだけだから。秋田君と優美子がちちくりあってても平気で観察してるよ。あ、でもこれがアキ×ハチだと自制する自信はないな」
「なんて嫌な掛け算。俺の常識という方程式だと絶対に解けない」
「ぐふふ、最初だけだよ。小学生のころを思い出して。皆、最初は九九を覚えるのに手間取ったでしょ？　でも、すぐに自然になった。つまりはそういう事だよ」
「あ、ちなみにあーしは中三の時点で八の段を間違えるほどの秀才だから、その理論は崩れるね。掛け算は難しい。これが世の理なんだ」
　ばらすなっと優美子は秋太を叩こうとしたが、それも簡単に躱される。優美子のせいで自分の理論が否定されてしまった姫菜はムスッとしている。優美子、掛け算くらいしっかりしなさいと目で訴えていた。
「あーしとかガハマちゃんとか、ホントどうやって入試を突破したのか不思議でならない。うちってマークじゃないから運ってことはないだろうし」
「きっと採点者の目が腐ってたんだよ。ふふ、その先生とは仲良くなれそう」
「それ違う意味じゃない？」
「つーか海老名、少しは擬態しろし。秋田はバカだけど、アンタそういうの気を使ってなかったけ？」
「あーしごときにバカ呼ばわりとか、屈辱なんですけど」
「あー、まあ何となく大丈夫って分かるから。それに優美子の友達だからね。問題なし」
　Ｖサインをしながら姫菜は答えた。

「なんか納得がいかないんですけど」
「納得がいかないのはこっち」
　笑っている姫菜とは対照的に二人は睨みあうばかりだ。
「なんか優美子楽しそうだね」
「姫菜、目が腐っているから」
「それは正解なのでは？　本人が認めているし」
　意味は違う。
「さて、仕事に戻ります。あ、あーし？」
「何？」
「有志団体に参加したりしない？　お笑い部門で」
「ぶん殴るよ。それにもう参加済みだから。バンドする」
「へぇー。あーしはカスタネット担当？」
「お前、あーしのことバカにしすぎだから。あーしの歌、ちゃんと聞いとけし」
「ほー。それは楽しみ。耳鼻科の予約はしておくね」
「死ねっ！」
　手近にあった筆箱（姫菜の）が真っすぐに投げられる。秋太は片手で優雅にキャッチし、それをドア近くの棚に置いて出て行った。無駄な反射神経である。
「優美子？」
「……ごめん、マジごめん！　だ、だからそんな怒らないで、姫菜！」
　自分の筆箱（愛用のペン入り）が投げられ、激怒する姫菜がそこにはいた。

17話　文化祭準備がちゃくちゃくと

「帰れ」
　秋太が会議室に戻ってきてすぐの一言である。予想通りというかお約束と言えば良いのか、その場には魔王様が降臨していた。
「あ、秋太、やっはろー」
　パタパタと手を振り、満面の笑みを浮かべる。
「帰れ」
「それでね、秋太。私、総武の卒業生を集めて管弦楽の演奏をしようと思っているんだけど、どうかな？」
「帰れ」
　帰れの一点張りである。
　しかし、それで素直に帰るほど、魔王は良い性格をしていない。まるで秋太を挑発するように、ニコニコと笑うばかりだ。
「あ、秋太くん。校外からの有志参加は学校側としても喜ばしいことだから」
「めぐり先輩。俺が危惧しているのは、表情と中身がまるで違う偽りの仮面を被った上に猫を剥いで被るような似非人類が、問題を起こさないかというその一点です。良いんですか？　いつの間にか生徒会長の座に就いているかもしれませんよ」
「陽乃スマッシュ！」
　持っていた紙を素早く丸めて、秋太に襲いかかる。
　所詮は紙、避けるまでもないと油断した秋太は、頭部ではなく臀部に思いもよらない衝撃を受けた。
「それスマッシュじゃなくてキック」
「あら知らなかったの？　陽乃スマッシュの別名はキックなのよ」
　振りかぶった動作はおとりで、隙だらけの秋太は地味にダメージを受けた。ただ陽乃が本当に悪の化身なら秋太は泡を吹いて倒れていたかもしれない。もし蹴り上げでもされていたら、悶絶必至である。
「こらゆっきー！　姉の対応くらいちゃんとしろ！」
「くっ」

「くっじゃないよ。ゆっきーは本当に肝心なところで姉乃さんに負けるんだから！　情けない、本当に情けない。ポンコツここに極まれりだよ」
　秋太から隠れるように、八幡の背後に立っていた雪乃。だが、そんな程度では性悪たる秋太から逃げることなどできない。すぐに見つかり、非難されてしまった。
「秋田、一応皆見てるから」
「だからどうした？　頼んだ仕事を果たせない部下を叱りつけて何が悪い。八幡、甘やかすって行為は人を見て使いなさい。ゆっきーなんてポンコツ子と罵ってやるくらいがちょうど良いの」
「お前、その容赦のない感じ、ホント雪ノ下の姉さんそっくりなのな」
「なんて侮辱発言」
「こらこらこら」
　ぽこんと秋太の頭を陽乃が小突く。ただ秋太の発言を否定しなかったことから、彼女もまた甘やかしを許容する気はないようだ。
「まったく八幡は優しい奴だ」
「比企谷君はホントいい子だね」
「止めてくれませんかね？　その、子の巣立ちを見るような親のような目は」
「なんと蔑んだ目がご所望とは……」
「比企谷君はとんでもない性癖を暴露したね」
　様子を見守っていた文実（女子）は八幡から少しだけ距離を開けた。
「人を変態にするのも止めてくれませんかね。というより、二人の息が合いすぎて気持ち悪いです」
「姉乃さん、気持ち悪いって」
「秋太に言ったのよ」
　バチバチと視線でやり合う二人。もうこの段階で、周りは見守るのを止めて仕事に戻った。勝手にやってろと。
「それで、学校からの許可も得てなおかつここの卒業生である私が、同じ卒業生たちに声を掛けて有志団体を結成したわけなのだけど、それについて委員長の方から何かあるかしら？」

「結成者が気に入りません。つまり即解散で」
「私情しか入ってないじゃない」
「何か問題でも？」
「開き直るな」
「正論には暴論でを信条にしているので」
「それが一般社会で許されると思わないことね」
ちっと舌打ちをする。陽乃がここに現れた段階ですでに根回しは済んでいる。そして、実際問題、彼女側に問題など一つも存在していない。
正論に反論ができないなのは、すでに撃沈した雪乃が証明している。
「結局、秋田も雪ノ下と同じなのな。会話の内容もほぼ一緒だし」
「……」
「怖いよ、かなり怖い。お前、なんて物騒な笑顔を向けてくれてんの？」
「いや、最近八幡がぐいぐいくるから、海老名さんあたりにネタを提供しようかと。あー文化祭の日……楽しみだね」
「止めて、ホントに止めて！　あの人、本気で危ない本を出版しかねない。うちのクラスの出し物だってギリギリアウトなのに」
八幡が全力で頭を下げる。なんなら土下座するまである。
「さて問題発言が出たところで、仕事に取り掛かりましょう。姉乃さんは帰ってよし。申請の方はこちらで処理しておく。学校の施設を借りたいときは連絡をよろしく」
「……急に真面目になると、ビックリするわね」
仕事モードに入った秋太は自分の席に戻り、パソコンを叩きだした。
「負け太くん？」
「くっ」
隣に座る美少女のどこか勝ち誇った顔が、無性に腹立たしかった。
「負け乃」
「くっ」

お互いに傷口を広げて、二人のしょうもない勝負は終わった。

◆

委員会の仕事を終えると、秋太は八幡を誘った。文化祭期間中は奉仕部の活動が休止になるため、放課後が空いていることを知っている。

「八幡、どこに食べに行こうか？」

「え、なんで俺が行くことが前提になってるの？」

「俺と八幡はベストフレンド」

「お前、ベストフレンドってそんな使い勝手のいい言葉じゃ――いや待て、あれは確か中学の時、親友を語った大山が俺の宿題を勝手に持って行き、俺が怒られるという事件があった。あれが許されるなら、ベストフレンドも……」

「悲しい過去を暴露しない。どうせ、帰ってもテレビ見るとか、マンガ読むとかでしょ？　暇なんだから良いじゃん」

「ばっか。俺には小町の帰りを待つという大事な役目がだな」

「小町？　米？」

「妹だ。世界一のな」

「まあ、妹が一人しかいないならそりゃあ世界一の妹でしょ。ナンバーワン＝オンリーワン」

「……」

もっとツッコミが入ると思った八幡だったが、秋太は努めて冷静に返してきた。それによりどう反応したものかと考えてしまう。

「ほら、八幡行くよ。一応、仕事を増やしてしまった責任があるからね。ここらで胃袋を攻めて、俺の評価を上げておこうかと思う」

「本音を伝えるのは止めてくれません!?」

「サイゼでいいよね。安いし」

「話を聞いて！」

八幡の悲痛な叫びは、秋太には届かなかった。八幡がしくしくと涙を流しながら歩いていくと、校門が見えた。そして嫌なものも見えた。

「……八幡、戦略的撤退。生け贄になれ」

「いや、ここはどう考えてもお前に用があるでしょ。俺のことは良い。だから俺を置いて先に行け」
「名台詞も状況が変わると、悪意しか感じないよね。んーなら、さっさと行け、俺の気が変わらんうちになとでも返そう」
　言っていることは格好良いのに、やろうとしていることは醜い。
「貴方たち、漫才ばかりしてないで早く来なさい」
「魔王ハルーノの四天王が一人、ユッキーノ」
「じゃあ、後ろに見えるのはガッハマか？」
「ユッキーノは四天王一の小物」
「四天王の時点で小物じゃないけどな。でもそうなるとあと二人ほど必要だぞ」
「……いい加減にしてくれるかしら？　ただでさえ姉さんの相手をさせられて苛立っているというのに。貴方たちまで私を怒らせる気なのかしら？」
　普段から吊り上がっている目がより鋭くなった。睨んでいるのではない、睨みつけているのだ。
「八幡、お前がＮＯ．１だ。つまりゴー。俺はゆっきーとラブラブデートするから」
「お断りだ」
「……お断りよ」
「雪ノ下さん、今の間はなんなんですかね？」
「うるさいわよ比企谷君。貴方は間も空気も読めないからダメなのよ」
　八幡に対する暴言という名の剛速球が襲いかかる。当然送りバント主義の八幡では、犠牲になるしかなかった。
「三人でしゃべってないで、早く来てよ。私が一人でボッチみたいじゃん」
「『文実　ｏｒ　ｎｏｔ　文実』理論で行くと、ガハマちゃんはボッチ確定」
「酷いっ!?」
「由比ヶ浜さん、強く生きてね」

「ゆきのんまで!?」
「というかあの人笑顔で手を振り続けて怖いんですけど」
「ヒッキーはもっと構って！」
　かなり面白い子、由比ヶ浜結衣。
「さ、皆揃ったところで、一緒にお茶しましょう♪」
「姉乃さんの奢りで、超高級店なら」
「高校生の入れるお店で高級店ってどこかしらね？」
「こらこら私を破産させる気か」
「姉乃さんにとどめが!?」
「ちょっと待って。今、一番高い店を調べるから」
　秋太と雪乃が携帯で必死になって調べ始めた。「お前ら、仲良いな」と八幡はぼやき、結衣は苦笑する。
「近場のカフェに行きましょうか」
「逃げたな」
「逃げたわね」
「はーい、秋太と雪乃ちゃんは自腹で。比企谷君とガハマちゃんは何でも気軽に頼んでね」
「……ゆっきーデートしよっか。奢るよ」
「……そうね。なら奢られてあげるわ。では姉さん、由比ヶ浜さんたちと仲良くね」
　ナチュラルに帰ろうとする二人をがっしりと捕まえて、陽乃は歩き出した。
「なんか凄いね。普通にデートしようだってさ」
「あの二人だと本気で言ってる感じがしねぇよ」
「じゃあヒッキー、私とデートする？」
「……しねぇ」
　微笑んだ結衣に対して、顔を真っ赤にした八幡はなるべく顔を見られないようにそっぽを向いた。
「冗談だし、べー」
　やべ、なにあの子、可愛い！　八幡は走り去っていく結衣の背中を見ながらそんなことを考えた。

「煩悩退散、煩悩退散」
八幡は自分の煩悩を退散させるために、天使の写真を懐から取り出した。
その姿があまりにも気味が悪く、周りの生徒たちが引いていたことを彼は知らない。
◆
「はむはむ」
目の前に置かれたポテトの山から一つ、また一つと食べ進めていく。女性陣からの視線が非常に冷たい。
「ファーストフードってなんか無性に食べたくなる時があるよね」
「さすがにその量はどうかと思うのだけど？」
「うぇ～太りそう」
陽乃の提案を無視して、５人は近くの喫茶店に向かった。『当店おすすめのポテトフライメガ盛り』の看板に秋太が誘惑されたのがこの店を選んだ理由である。
そして注文したポテトフライは予想以上の量だった。女子陣が完全に引いている。
「女子の羨望を一心に浴びる俺」
「それは違う意味だろ。ダイエットに苦しんでいる世の女性たちに喧嘩売ってるぞ」
「だそうです。世の女性たち」
秋太の言葉に反応を示したのは結衣だけだった。一人だけお腹に手をやっている。
「八幡がガハマちゃんを傷つけた。なんて酷い」
「い、いや別に由比ヶ浜は太ってないだろ。栄養とかちゃんとむ――無理なく摂取されているはずだ」
「セクハラだね」
「セクハラだわ」
「セクハラだよ、比企谷君」
「……」
非難の言葉が３人から飛び、結衣は自分の豊満な胸を隠すように身

構えた。フォローに回って、評価を下げる男、それが比企谷八幡である。
「なんて誘導尋問。これがプログラマーの実力か」
「プログラム関係ないから。八幡が思春期なだけ」
恥ずかしいと顔を伏せる八幡。
「そう言えば、ゆきのんのクラスって何するの？」
「喫茶店よ。うちは女子の方が多いから接客系に向いているし、例え残念な料理を出したとしても、ニッコリ笑えば許してもらえるってそう言っていたわ」
「あくどいよねー。女子の怖さを見た気がするよ」
「あーよくある。私の時もそういうクラスあった」
陽乃が懐かしみながら、そう告げた。
「でもゆきのんの接客かー。なんかちょっと見てみたいかも」
「私はやらないわよ。当日は委員の仕事で忙しいだろうし」
えー、と不満そうな声を上げる結衣と陽乃。結衣は純粋な思いからだが、陽乃は確実にからかえないことに対する不満だ。
「バカめ、俺が取り仕切っている時点で、ゆっきーのウェイトレスは決定なのだ」
「え？」
「クラスメイトを脅は――もとい説得しましてね、文化祭当日はゆっきーに接客してもらいます。衣装は決めかねているけど、メイド服みたいなあれな感じじゃないから大丈夫」
裏で手を回されていることを初めて知る雪乃。
「もちろん、委員会のスケジュール管理もバッチリ。なんのために八幡を雑務の責任者にしたと思っているの？　こういう時のため」
「お前、雪ノ下に嫌がらせをするのに、俺に嫌がらせをするとかどんだけだよ」
うずくまっていた八幡が復活する。
「バカ、ボケカス、八幡」
「八幡は悪口じゃないだろ」
雪ノ下姉妹がクスクスと笑い出す。笑いのツボは同じらしい。

「普段からさんざん罵倒されているゆっきーに合法的に命令ができるんだぞ？　頑張りたくなるよね？　頑張っちゃうよね？　ニッコリと笑うゆっきーを見れちゃうんだぞ」
「……」
　八幡の脳内パソコンに雪乃の微笑み画像が表示された。
「比企谷君？」
「えーここは俺なの？　悪いのは秋田じゃないの？」
「この男には必ず然るべき制裁を加えるから大丈夫よ。それより貴方は変な妄想をしてにやけるのは止めなさい。虫唾が走るわ」
　過去最大級の暴言である。
「ご、ごめんなさい」
「ヒッキーまじ最悪だし」
　顔を膨らまして、結衣がにらんでいた。
「でも秋太の言う通り、雪乃ちゃんに命令できるんだよね。あ～文化祭が楽しみ」
「あ、うちのクラス、雪ノ下陽乃はＮＧなんで」
「なんでよ!?」
「ゆっきーが穢されるのが見るに堪えない。当日は姉乃さんが演奏しているときにゆっきーの接客が入るようにするから」
「おーぼーだー」
　ぶーぶーと不満を言う陽乃。
「そもそも私はまだ了承してないのだけど？」
「俺を除く、クラス全員が土下座をする覚悟ができているよ。ゆっきーが頷くまで」
「……嫌な脅迫の仕方ね」
「数の暴力って怖いなー」
「さすが秋田、用意周到すぎる」
「俺に実行委員を押し付けた奴らには、俺の提案を拒否することは許されない。快く引き受けてくれたよ。若干名は、むしろ抵抗なく土下座して罵りを受けたいって言ってたし」
「貴方がどういう取引をしたのか、理解したわ」

「完全にアウトな若干名が混じってないか？」
八幡の疑問には誰も触れなかった。
「あとは文化祭を盛り上げるだけ。秋田秋太の終身名誉委員長と殿堂入りを残すのみ」
「バカの殿堂入りね」
「姉さん、それは酷すぎるわ。せめて変人の殿堂入りよ」
「黙れアホ姉妹」
「でも、普通に委員長しただけじゃそんな御大層な称号は貰えないんじゃないのか？」
「もーう、八幡の八幡」
「いや、だから八幡は悪口じゃないから。あとそこの姉妹笑いだすな」
陽乃と雪乃がお腹を押さえて机に突っ伏す。彼女たちの中で八幡という言葉は笑いのネタにしかならないようだ。
「俺が秋田秋太だってところをお見せするよ」
ニッと笑う秋太に、「やば、格好いい」と誰かが心の中で声を上げた。その誰かは分からない。

◆

カタカタカタと忙しくなくキーボードが打たれ続ける。隣で仕事をする雪乃は慣れたもので、打ち込む速さが異常なことには感心するも、自分の仕事を黙々と進めていた。
「秋太君、ちょっと良いかな？」
作業をいったん止めて、申し訳なさそうな顔をするめぐりを見た。委員長の承認が必要な書類を持ってきたようだ。
「大丈夫ですよ」
めぐりから書類を受け取ると、ささっと目を通し問題ないかを確認する。問題がないことが確認できると承認印を押してめぐりに返した。
「秋太君、頑張りすぎてない？　私たちにやれることなら手伝うよ」
「んー今のところはないですかね。まあ本番が近くなったらモニターとして生徒会に協力してもらうことにはなりそうです」
「モニター？」

「今作ってる奴の感想をお願いします。一週間前には終わらせるんで。で、問題点なんかが出てきたらその都度修正していく感じですかね」
「よくわからないけど、手伝いが必要なら遠慮なく言ってね」
　めぐりはそう言って、できた書類を関係各所に配りに行った。
「城廻先輩の言葉ではないけれど、少しは休んだら？」
「なんで？」
「貴方、ずっと働き詰めじゃない。倒れるわよ」
「ゆっきーはプログラマーを分かってないな。真のプログラマーの第一歩は休憩って概念を捨てることから始まるの」
「そんな境地に誰も達したくないわよ」
　はあーと呆れた雪乃は立ち上がると、そのままどこかに行ってしまった。
「八幡はほどほどにサボってるから、休みなしでいいよね？」
「お前、何言ってくれてんの？　俺、めっちゃ頑張ってるでしょ？　休みとか、休憩とか、休息とか必要だと思うんですけど。心の中の小さな八幡がそう言ってる」
「ふむふむ、つまりまだ行けると？」
「なんでだよ！　俺に何を求めてるの!?」
「限界突破」
「そんなアニメの主人公みたいなことできるかよ」
「八幡、自分を信じるんだ」
「もうやだ」
　秋太と口論しても勝てないことを八幡は知っている。
「しょうがないから１０分だけだぞ？」
「え、なに、怖い」
「紅茶、午後的なやつをお願い。購買の自販機に行って戻って１０分」
「パシリじゃねぇか」
　そう文句を垂れつつも、秋太からお金を受け取ると八幡は会議室を出て行った。
　二人がいなくなったことで、秋太は作業を再開する。

「あれ、ヒキオは？」
　秋太が仕事をしているとやたらと目立つ女子生徒が現れた。優美子だ。そしてその隣にはイケメンを代名詞とする隼人がさわやかに笑っている。
「八幡は雑用中。そしてあーしは帰れ」
「来て早々喧嘩売るとか、やっぱりあんた、あーしのこと嘗めてるでしょ」
「あーし、後学のために一つ教えてあげる。喧嘩っていうのは同レベルの相手としかできないから」
　言われた意味が一瞬分からなかった優美子だが、よくよく考えて理解する。つまり、自分はバカにされているのだとそう確信した。
「むっか！」
「優美子、落ち着けって。秋田も優美子を挑発するのを止めてくれ」
「女性を後ろから抱きかかえるとか、イケメンにしかできない行為……もげろ」
　秋太に襲い掛かろうとした優美子を羽交い絞めで止めた隼人。世の男性の大半はその行為を許されないだろう。それを平然とやってのける隼人に、秋太は男たちの代弁を伝えた。
「ごめんな、優美子。あのままだと問題になりそうだったから」
「……別にいいし」
　ハハっと笑う隼人とは対照的に、優美子は顔を赤くする。恥ずかしすぎるのか、優美子は秋太と目を合わせようとしなかった。
「で、用件は？」
「ああそうだった。ステージでの練習許可をもらいたくてね。やっぱりリハーサル前に一度はあの場所を体験しておきたくて」
「却下。ステージでの練習は外部優先だし、文化祭の準備期間中といっても部活をしているところはあるんだ。邪魔にしかならない。外部の人たちなら、俺たちの授業中に、体育とかち合わないところでやってもらえるから問題ない、ただ、校内の有志の練習を許すと、俺もって声を上げる奴が出てくる。そうなったら時間の調整は難しいし、体育館を使う部活動に迷惑だ」

ひとグループだけを特別扱いというわけにはいかない。リハーサル自体は文化祭の前日に行えるのだから、それで我慢しろと秋太は告げる。
「そうか、なら仕方がないな」
隼人も出来たらいいな程度の考えだったらしく、秋太に無用に迫ることはしなかった。
そして隼人達が帰ろうとしたときである。
悪女が一人、笑顔を振りまいてやってきた。
「あ、秋太、やっぱりここに居た♪　ちょっとステージの貸し出しで相談があって」
「さ、３人ともお帰りを」
自然に隼人達＋１名にお帰りを願う。
「こらこら、文化祭実行委員長――あれ、隼人じゃん。久しぶり」
「相変わらずですね、陽乃さん」
陽乃を苦手としているのか、親し気な挨拶の割に隼人の顔には苦笑いが浮かんでいる。
「隼人」
ちょんちょんと優美子が隼人の袖を引く。目の前の美人は誰なのかと尋ねているようだ。
「こちらは、雪ノ下陽乃さん。雪ノ下さんのお姉さんだよ。親同士が知り合いだからね、その関係上、小さい頃からよく世話になっているんだ」
先ほどまで張り付いていた苦笑から、今度は完璧なまでのイケメン笑顔。切り替えの早い奴だなと、秋太は感心した。そして、それと同時に同情した。
「Ｄｏｎ，ｔ　ｍｉｎｄ　気にするな」
「いきなり何だい？」
「つーかそれ、同じ意味だし」
「あーしが英語を理解するだと？　驚愕」
「マジで驚いた顔するなし！」
青天の霹靂とも言うべき優美子の英語力に秋太は動揺を隠せな

かった。
　ただ優美子ばかり構っていられない。ニッコリと邪悪な笑みを浮かべた陽乃が秋太を真っすぐ見ている。
「さて秋太、さっきの言葉はどういう意味かな？」
「小さい頃から、貴女に迷惑を掛けられ続けた葉山苦労人に同情から出た言葉。本来なら発狂してもおかしくないのに、この爽やかフェイス。やばい、泣けてきた」
「丁寧な解説どうもありがとう……陽乃チョップ！」
　ぱちんと陽乃の手の甲を叩いて、秋太は攻撃を防いだ。
「生意気な奴。隼人からも言ってやってよ。いかに私に世話になったかを」
「止めておくんだ。自分の悪行を白日の下にさらすことになるんだぞ」
　キッと睨み合う二人。
「き、君は……」
　隼人は何を思ったのか、秋太を見て黙り込む。
「随分と賑やかね？　仕事をサボっている秋田くんは誰かしら？」
「誰だろうね？　つーかゆっきーのセリフじゃなくね？　どこでサボってたし」
　雪乃がどこからか戻ってきたことから、場の雰囲気が少しだけ変わった。

18話　舞い上がった俺を許してほしい

雪乃が会議室に戻ってきた。トレイを持っており、その上にポットとカップ、それに小さな袋が置かれていた。
「まさかのティータイム。これだからブルジョワは。悔しいからお椀で味噌汁をがぶ飲みでもしようか」
「訳のわからないことに熱意を注ぐのは止めなさい。それにこれは貴方用に持ってきたものよ。一応、委員長という立場なのだし、倒れられても困るから、気晴らしにと思ってね」
雪乃はトレイを秋太の邪魔にならないところに置いた。
「そこで顔を赤らめて、別にから始まる名言を言ってこないゆっきーにマジでがっかり」
「べ、別にあんたのために用意したわけじゃないんだからね！　ふんっ！」
「姉乃さんは速やかにご退場。殺意がわく」
「はい、殺人予告いただきました。警察に訴えてやる」
「……コントする気なら文化祭当日にしてもらえるかしら？　それに秋田くん程度にお茶を用意したからといって、私が照れると思っているのかしら？」
ちょっと強気な雪乃に秋太と陽乃は顔を見合わせた後、クスクスと笑い出す。
「照れると思った（笑）」
「うんうん、雪乃ちゃんが逞しくなってお姉ちゃん嬉しい♪」
「言いたいことがあるならはっきり言いなさいな」
二人の煽りに雪乃が噛みつく。
「髪で隠してるつもりだろうけど、首元が真っ赤になってるから」
「雪乃ちゃんが恥ずかしがってるときは、耳と首が赤くなるのよね～」
「なっ!?」
雪乃は慌てて首元を隠すが、その行動で二人の笑顔は深まった。どうやらハメられたらしい。
「ゆっきーは嘘をつくのがホント下手だよね。ゆっきーが嘘をつくと

きは微妙なタメがあるんだよ。自分の嘘がバレないか、一瞬考えちゃうんだろうね」
「あら、秋太はよく見てるわねー」
「俺とゆっきーはベストフレンド」
「それ、比企谷君にも言ってなかった？」
「嫌だなー姉乃さん。友達の少ない界隈だと、皆ベストフレンドなんだ。あ、ちなみに姉乃さんは除外で」
　満面の笑みで、お前は友達じゃないと告げる秋太。それに対して陽乃も笑顔で返し、ついでに右ストレートも返してみた。躱されたが。
「な、なんかあーしら空気な感じ」
「あーしはいつも空気が読めないから、空気の気持ちになれて良かったじゃん」
「ぶん殴るよ」
「優美子、抑えて。秋田もあまり挑発しないでくれるかな。このままだと四面楚歌状態になるけど」
　右に雪乃、左に陽乃、そして正面に優美子。これで背後に八幡がいれば、完全に項羽状態である。
「え、なにこの状況」
　そして空気を読んだのか、読まなかったのか、八幡がお使いから帰ってきてからの一言。秋太を取り囲む美少女たちにかなり困惑している。
「おお、ベストフレンド八幡。パシリありがとう」
「ホントだよ。休憩のはずなのに、階段の上り下りでちょっと疲れたじゃんか」
　触らぬ神に祟りなし。八幡は、3人の美少女には全く触れず、秋太に午後的な紅茶を渡し、そのまま流れるように自分の席に戻った。八幡の席は秋太の隣なのだが、八幡の人間観察スキルが発動したのだろう。秋太からちょっと離れたところに座り、状況を見守ることにした。戦略的撤退だ。陽乃がいつの間にか八幡の席を占領しているからという理由ではない。
「あ、これ美味しい」

「なぜ姉さんが食べているのかしら？」
「秋太のものは私のもの。私のものは当然私のもの」
「さすが雪ノ下ジャイ乃。暴論がここまで似合うのは珍しい」
「陽乃エルボー」
「エルボー返し」
　陽乃肘打ちに拳で受ける。ちょうどいい所に入ったようで、陽乃がびくんっとなってから、痛い、痛いとわめき出した。
　ただそれを心配する人間は誰もいない。
「悪は滅びろ」
「滅びるじゃないところが味噌よね」
「こんな陽乃さん久しぶりに見たな」
　隼人のイメージする雪ノ下陽乃は完璧人間であり、そして何より怖い人間だ。触れるものを皆壊していく、そんなイメージが彼には有った。
　だが今目の前のいる陽乃は、彼の知るイメージとは大きくかけ離れていた。楽しそうに振る舞っているだけで、その実、他者をじっくりと観察する陽乃が、本当に楽しそうに見える。
　隼人にはそれが驚きでしかなかった。
「イケメン、それは君の眼が腐っている。姉乃さんは九分九厘がボケで出来てるから、いつもこんなん」
「俺の知る陽乃さんと随分違うんだな」
「姉乃さんだよ？」
「どういう意味よ！」
　ばしっと横から手刀を入れる。私を馬鹿にするなと陽乃は言いたいようだ。
「……俺にとって陽乃さんは」
「あ、サボりすぎた。さ、仕事を再開しましょう。ゆっきーは差し入れありがとうね。あーしたちは練習を頑張って。姉乃さんは刑務所へＧＯ！」
「こらこらこら」
　隼人が何かを言いかけたところで、休憩時間が終わった。追い払わ

れるように、部外者は会議室を出て行った。
「何が言いたかったんだろうな、葉山の奴」
「俺を見捨てた八幡が帰ってきた」
「バカ、空気を読んだんだよ。それに雪ノ下の姉ちゃんが俺の席に座ってたし」
「そして今、姉乃さんの残り香を堪能している八幡」
「比企谷君、ひくわ」
あらぬ疑いを掛けられた八幡は、弁解することなく黙々と作業に戻った。否定しようと、この二人には勝てないと経験から判断したようだ。
「お、ホントだ。美味いねこれ。ゆっきーの手作り？」
「……そうよ。家で焼いてきたの。奉仕部に行けば、ティーセットはあるから取ってきたのよ」
「このクッキー一枚一枚にゆっきーの何かが入っているのかと思うと」
ばしんっと秋太の背中がとんでもない音を立てた。秋太の反応できない速さの攻撃だった。
「今のは秋田が悪い」
「うん、自覚してる」
「変態」
雪乃から率直な罵倒を受けたのは初めてだったのか、珍しく秋太が静かになる。
「ゆっきーめんご。冗談だから。普通に美味しいし、ありがとう」
「貴方の謝罪はどうしてそんなにも軽いのかしら？　普通にセクハラよ？」
「いやー同年代の女子から手作りなんて、初めてで舞い上がっちゃってね。舞い上がった俺を許してほしい」
「……考えておくわ」
そういうと、雪乃は自分の作業に戻った。
怒らせてしまったか、と反省する秋太。
なんだこのカップルは、とちょっとイラつく八幡であった。

◆

放課後。部活動を行っている生徒も帰宅する時間である。

「もう、上がってくれていいよ。他の人は帰ってるし」

「貴方がいるじゃない」

「なに、その俺がいるから意地でも帰らないみたいな感じ」

「……私と二人っきりで居れて嬉しいでしょう？」

「はいはい嬉しー。惜しむらくは、一呼吸置かずに言って欲しかった」

照れるならやるなと秋太は言いたい。

窓の外を見れば確かに暗い。

さすがにこの時間に女子生徒を一人で帰すというわけにはいかない。

秋太は荷物を片付け始めた。

「さて、なら帰るか。レディを一人で帰すなんて、紳士のすることじゃないしね」

「誰が紳士なのかしら？」

ふふっと笑う雪乃を見て、秋太は不満そうな顔を見せる。それを見て、雪乃がまた小さく笑うのであった。

校舎を出ると、やはり肌寒さを感じる。残暑がある状況ではあるが、太陽が沈む時間帯ともなると、少しばかり気温が下がってきているようだ。

「少し寒いわね」

「もうすぐ秋だし」

「貴方の季節ね」

「それ自分も言われたでしょ。冬が来るたびに」

「雪ノ下雪乃だもの」

雪乃の誕生日は1月。まさに冬尽くしである。

「雪ノ下は嫌いだけど、雪乃って名前は好きだよ。なんか響きが格好いい」

「女性の名前で格好良いはないでしょうに。まあ、姉さんがいるから雪ノ下に良いイメージがないのは認めるわ」

二人ともやはり陽乃に対しては容赦がない。

「貴方の名前はあれよね、とにかく間違いやすいわ」
「初見で俺の名前を読めた人って今のところいないしね」
「あら自慢かしら？」
「そんな自慢は嫌だ」
　クスクスと小さく笑う雪乃。最近よく見るようになった顔だ。
「あともう少しで文化祭ね」
「そうだね、早く終わってほしい。解放されたい」
「貴方は自分で仕事を増やしすぎなのよ。自業自得だわ」
「他にしわ寄せが行ってるわけじゃないんだから問題なし」
「そのうち本当に倒れるわよ」
「大丈夫。もしそうなったらゆっきーに看病してもらうから」
　何かが面白かったのだろう、秋太は笑みを浮かべている。
「姉さんを送り出すから心配しないで」
「俺を殺す気か？」
「天に召されなさい」
　とても美しい顔で酷いことを言い出す雪乃だった。
「本当に大変そうなら見舞いに――」
「なんでおじゃる？　トラックの音で聞こえなかった」
　雪乃が口を開いたとき、タイミングよくトラックが二人の横を走り去っていった。
　恨めしくトラックをにらむ雪乃に、「とうとう無機物にまで喧嘩を売り出したのか」と変な解釈をした秋太。
「貴方は馬鹿ねって言ったのよ」
「突然の罵倒とか、さすがはゆっきー」
「褒め言葉として受け取っておくわ」
「褒め言葉として受け取れる精神が半端ないっす」
　漫才のような掛け合いをしているうちに、雪乃が暮らしているマンションに着いた。
「……金の無駄遣い。俺への当てつけか」
「……被害妄想よ。別にここは私が望んだ場所ではないのだし。安全性を考慮した結果よ」

「なんだかんだで親に大切にされてるよね」
「……そうね」
親に反抗している身分で親に頼っているという現状に、雪乃は顔を顰める。
しかし、まだ彼女は高校生であり、親に頼るのが普通なのだ。秋太という例外が彼女の認識を歪めてしまっているのだが、彼女はあくまでも普通なのである。
「貴方を見ていると、自分が恥ずかしくなるわね」
「また何か意味の分からないことを考えてる？」
「そうじゃないわ。単純に貴方は凄いわねってこと」
「お、素直に褒められるとは。ちょっと嬉しい」
「私は過大評価も過小評価もしないわ。凄いことには凄いって言うわよ」
それはどうだろうかと、秋太は首を傾げる。八幡や陽乃に関しては、素直な言葉が出ているとは言い難い。
「それじゃ俺は帰ります。夜更かししたり、身体は冷やしたりしないように」
「貴方は私の何なのかしら？」
「親友」
「ただの友達よ。送ってくれてありがとう。帰りは気を付けてね。さよなら」
足早に雪乃はマンションに入っていった。
「これはデレたのか？」
微妙だなーと思いながらも、帰る足取りは少しだけ軽かった。
◆
「はい、本日は文化祭のスローガンについて話し合いたいと思いまーす♪　今から紙を配るので、皆、格好良いのを考えてねー」
めぐりのそんな進行で会議が始まった。
文化祭が始まるという時期になって、大変重要なことを忘れていた。
学校活動である文化祭の、形式上ではあるが、目標的なものがない

のだ。
　全くそのことを考えていなかった、秋太、雪乃、八幡。実質の文化祭トップ役員が揃って為体ぶりを見せてしまった。皆で協力して何かをするという考えが希薄な彼らにはスローガンを考えるなどあまりにも高等技術だったようだ。
　会議室には、文化祭実行委員の他に、生徒会役員、並びに顧問教師、そして一般の部から参加の陽乃がいる。完全に部外者でしかない彼女であるが、なぜかこの学校は彼女に優しいのだ。秋太が事務員に抗議行動を起こしたのは言うまでもない。
「では挙手で！」
　めぐりが元気に手を挙げるが、それに反応する人間は皆無だ。
　こういった場で先陣を切るには相応の勇気が必要なのだ。
「うーん、いないか。じゃあ、委員長からお願いします」
　めぐりに振られて秋太が立ち上がる。
「『持たない、作らない、関わらない』 ボッチ三原則。括弧付で友達が入ると完璧です」
「はい却下！　文化祭に関係ありませーん！」
　ぶーとめぐりがバッテンを作りながら即却下した。
「ちょっと待ってください。これは昨今の、とりあえず皆で仲良くという胡散臭い思想に対して、異議を唱えた高尚なものです。ボッチで何が悪いと開き直る高校があっても良いじゃないですか」
「はい、次行きましょう！」
　秋太の抗議は完全にスルーされた。
「じゃあ次、雪ノ下さん！」
「『理想と現実』」
「なんか深い意味がありそうだけど、怖いから却下で！　じゃあ次は比企谷君」
　説明しようとしていた雪乃は不満そうな顔を浮かべる。ニヤニヤといい笑顔の秋太と陽乃の方をなるべく見ないように努めた。
「『団結　見方を変えればただの束縛』」
「はい次行きましょう！　今の三つはなかった方向で」

その後の会議中、ずっと不満そうな顔を浮かべる三人が居たという。

そして協議の結果、

『千葉の名物、踊りと祭り！　同じ阿呆なら踊らにゃｓｉｎｇ　ａｓｏｎｇ!!』

に決まった。若干名が不満を漏らしていたが、漏らした３人があれだったので、気にしない方向でその場は収まった。

19話　文化祭が始まる

文化祭まで最後の頑張りという時期になってきた。
「はい、分かりました、よろしくお願いします。はい、また今度お願いしますね。では」
スマホを切ると、秋太は小さくため息をついた。本日、何度目の電話か数えるのも億劫になるほどであった。
「お疲れさま」
雪乃がそっと紅茶を差し出す。雪乃にお礼を言って、秋太はティーカップに口を付けた。
「どうも。とりあえず機材の貸し出しは大丈夫そう」
「申し訳ないわね。私が代われれば良いのだけど」
「まあ、完全に俺のコネだからね。高校の文化祭という枠組みでやるのはどうかと思うけど、使えるものは使っておこうと思う」
秋太が微調整を終えると一息ついた。
今会議室にいるのは、秋太を除けば雪乃と八幡だけだ。生徒会や実行委員は秋太が文化祭用に作った出し物のために校内に散らばっている。
八幡は問題があった時の連絡用に残されており、先ほどから携帯で喋りっぱなしだ。
「実は八幡って何でも屋だよね。企業では絶対に欲しい人材」
「そうね。何でも屋であるから、一つ一つの事業への貢献が薄く、給料を安くできるからとても魅力的だわ」
「ゆっきーは将来、ブラック企業の社長になるね、絶対」
「私の職業は決まってるわ。お嫁さんよ」
八幡の電話の声がやたらと会議室内に響く。秋太が無言、それが雪乃の首から上を真っ赤に染め上げる要因の一つだ。
「……せめて何か言いなさいよ」
「……無理はしない方がいい。キャラに合わない。めぐり先輩あたりなら納得なんだけど」
「……素直に頷けるから困ったものね」

雪乃にもめぐりがにっこり、「お嫁さんになる♪」と言っている姿が容易に想像できてしまった。
「さて御ふざけはこの辺で。八幡が電話しながら、仕事しろって視線で訴えてきてるから」
「なんで自分が忙しくしてるのに、お前らは怠けているんだと言いたげね」
「俺たち、八幡検定1級取れるんじゃないかな？」
「要らないわよ、そんなもの」
雪乃はため息をつくと、手元に視線を移す。
「哀れ、八幡」
なんで俺が傷つくことになってるの!?　と八幡は器用に視線で訴えるのだった。
「さて、俺の作ったアプリはどうなったかな」
「今、検証中なのでしょう？」
「アプリのシステムは問題ないと思うけど、校内限定イベントだから、何かしらの問題が出ちゃうかもしれないしね。文化祭である以上、安全面は考慮しないといけないし」
めぐり先輩に期待だ、そう言った秋太はぐて～と机に突っ伏した。
「じゃあ、私は各員からの報告をまとめてくるわね」
「よろしくー」
雪乃に手を振り、一息つく秋太。ようやく準備も終えられる段階になった。
「おい、俺がこんなに必死に労働してるのに、委員長のお前が休むなんてどういうことだ？」
「分かったよ、八幡。なら俺と仕事を交換しよう。軽く倍以上の仕事になるけど、八幡がそこまで言うなら仕方がない」
「委員長という大役お疲れさん」
「なんて変わり身の早さ。さすがの八幡」
「褒めるなよ」
「貶してるんだよ」
八幡の扱いはもう完璧な秋太であった。

秋太に二，三小言を言ってから、八幡は自分の仕事に戻る。
文化祭がやって来る。
奉仕部を含め、文化祭実行委員会は万全の準備を整えていくのだった。
†
文化祭当日。待ちに待った祭りが始まる。
「やっと、って感じかしら？」
「そうだね。今日が終われば職務から解放される」
「……貴方、頑張りすぎなのよ。資材発注やら、宣伝ポスターやらホームページやら、色々とやりすぎなのよ」
「外部との連携は、それが得意な人間がやるべきだし、他のだって他人に任せるより俺がやる方が早いからね。ただ内部との交渉とか、時間調整はゆっきーと八幡がやってくれたから楽だったよ」
「来年の文実の最低限のラインが上がったのは確かね」
「マニュアルとか全く残してないからね。これが独裁の弊害。下が育たない」
「分かっててやるんだから、質が悪いわ」
ニッと笑顔を見せる秋太に、「はぁ～」とため息を雪乃はもらした。
「苦労は買ってでもしろって言うじゃん」
「姉さんが好きな言葉のうちの一つね」
「……俺、二度と言わないことにする」
「……冗談よ。まあ、好きそうではありそうだけど」
「ゆっきーが姉乃さんの趣味趣向を知ってるわけないか。仲悪いもんね」
「予想はつくのだけどね」
考えることが似てるからかな、と秋太は思ったが、それを口にすれば物理的カウンターが返って来そうなので、言葉にはしなかった。
「ゆっきー」
「……何かしら？」
「警戒が半端ないんだけど」
「貴方が満面の笑みを浮かべると、怖いのよね」

「俺は期待に応える男。今日のクラス模擬店が楽しみだね」
「……」
雪乃はいまだに、何を着せられるのかを知らされていない。
喫茶店をやることは分かっているのだが、衣装に関しての情報が一切入っていないのだ。
秋太の統制の下、一つの軍隊のような動きをみせたクラスメイト達から、何一つ有益な情報を得られなかった。
彼らは、秋太と雪乃が文化祭の仕事をしている時しか衣装作成を行わず、絶対に雪乃にはわからないようになっている。
一度、校内展示の視察名目で、見回りに向かった時ですら、それを予感した秋太によって雪乃襲来の警報が発令され、即座に作業を中止したクラスメイトにより、雪乃が目にすることはかなわなかった。
「いや、さすがに犯罪になるような衣装じゃないから」
「そこまで貴方を下種だと思ってないわ」
「ちょっとは思ってるってことだよね、それ？」
「姉さんと似てるから」
「人生最大侮辱だ。これは姉乃さんとゆっきーの満面笑ツーショットを作って、校内に飾らないと、精神が保てない」
「ごめんなさい。本当に申し訳ありませんでした」
雪乃は綺麗に４５度の角度で頭を下げた。
「雪ノ下さんが頭を下げた!?」
「おいおい、弱みでも握ってるんじゃないか!?」
「そう言えば、委員長の親ってどこぞの……」
その光景を見ていて文実委員は、根も葉もない話を始める。
「……壇上挨拶してくる」
「……ええ、よろしく」
「この学校の生徒って想像力豊かだよね」
「一応進学校だから」
微妙な空気の中、文化祭が始まる。
†
「それでは、実行委員長からの挨拶をお願いします」

めぐりが生徒会長として場を盛り上げたのち、秋太に場を託した。
「委員長の秋田です。定型文みたいな挨拶は嫌いなんで、短く。今日は、楽しく文化してください」
白衣を着た女性職員が「あのバカ……」と頭を抱える。来賓のお偉いさまに後で頭を下げに行くのは自分なんだと、秋太に呪いの言葉を送る。
「文化を祭る。祭りだ。祭りなら出し物が必要でしょう？　だから、今回の文化祭実行委員は面白いものを作ってみました。簡単なゲームです」
興味なさげに秋太を見ていた生徒たちが反応し始める。
「文化祭限定イベント。校内探索アプリを文実の方で製作しました。スマホは皆持っていると思うけど、持ってない人はこちらで貸し出すので言ってください」
秋太のコネを使って、機材は用意されている。本来なら多額の金がかかる行為だが、今回学校限定で使えるアプリを文実の方で製作しました。スマホは皆持っていると思うけど、持ってない人はこちらで貸し出すので言ってください」
秋太のコネを使って、機材は用意されている。本来なら多額の金がかかる行為だが、今回学校限定で使えるアプリを販売用に改修することを条件に、企業から機器を貸してもらっている。事前にアプリの説明は、営業に通してあるので、交渉は簡単に進んだ。企業側からすれば、試作アプリの検証をしてもらっているようなものだ。
「ざっくりと説明すると、〇ケモンＧＯのオリエンテーション版ですね。キャラは文実生徒とか俺の知り合いの人とかをデフォルメして作ったので、モンスターとかじゃありませんが、携帯を持って歩いていると出現します。出現したキャラは保存できるようになっているので、場所を選んでゲームしてください」
舞台袖からめぐりがデフォルメされた八幡の絵をパネルに張り付けた皆に見せた。八幡から苦情が上がったが、通信機器に異常が発生したらしく、八幡のインカムだけ回線が切れた。
副委員長は、何事もなかったように進行を続けるようにと指令を文実メンバーに送る。
「アプリをインストールしたら、まず最初のタイプを選択して下さい。まあ、名門校とも呼ばれるうちの生徒であれば、学力に自信があると思うので、選択は一択だと思いますが、基本的に選べるタイプは頭脳

タイプか体力タイプの二つです」
　学力という言葉に過敏に反応した生徒が若干名居たが、頭を使わなくてもゲームに参加できるとほっと胸をなでおろす。
「頭脳タイプの問題はさまざまです。受験で使うような知識から、総武の豆知識とか、単純にＩＱを問うような問題もあります。優秀な皆さんからしてみれば問題ないでしょうが、自信のない人は体力タイプをおすすめします。と・く・に、挨拶にやっはろーとか、一人称が「あーし」とかな人は体力タイプ一択ですね。ま、そんな人はいないと思いますけど」
　びくっと反応する二人の女生徒。全く隠されていない隠喩表現に抗議の声を上げようとしたが、周りに自分たちがバカだと気付かれてしまうので、自重した。金髪の少女は壇上にガンを飛ばしはじめたが……。
「体力タイプはアプリ内のカメラ機能を起動して、撮影してください。腕立て、腹筋、背筋、スクワットを選んでください。指定された回数を撮影すれば、終了となります。撮影は一人では難しいので、『友達』と協力してくださいね」
　いねーよ、と専業主夫志望のボッチがポツリと呟く。
　壊れていたはずのインカムが、なぜかこの時だけは正常に戻り、どこかのボッチの声が文実メンバーに届いた。
【比企谷君、悲しい発言はやめなさい。文化祭前に皆がかわいそうでしょう？】
【おい、ちょっと楽しそうな声が聞こえるぞ。くすくすと。それとかわいそうなのは俺だから】
【幻聴じゃないかしら？　そして、かわいそうなのは、貴方の友達事情を聞かされる私たち】
　ひでぇーという言葉を最後に、通信は切れた。
「当然、文化祭の出し物だから、各クラスにしか出てこないキャラとかもいるので、クラスの出し物にも参加してくださいね」
　文化祭である以上、文実だけが評価されても面白くもないのだ。各クラスに人が集まるようにする配慮も、秋太は忘れない。

「ちなみに。キャラを倒していくとポイントが加算されていきます。当然、難易度によって加算されるポイントも違うし、レア度によっても違います、一発逆転を狙って、レア度の高いキャラを倒すというのもありです」
「すいませーん！　それってポイントが高いと何か貰えるってことですか？」
　生徒の一人から声が上がった。
「はい。学校としても奮発してくれました。上位１０人に入った皆さんには、あの夢の国へのチケットが進呈されます。その他にも有名大学の赤本数冊等、実用性のある賞品も用意しているので、皆さん参加して下さい」
【平塚先生が崩れたぞ。秋田のやつ、学校に言ってないんじゃ……】
【あら比企谷君、繋がったのね？　それと大丈夫よ。チケットは彼がなんとかしたからそれ以外の賞品に関しては学校が用意してくれた予算で間に合ったから問題ないわ】
【俺のインカムが壊れているような言い方やめてくれませんかね？　インカムのオンオフは副委員長――】
　またしても、通信が途切れた。電波障害がひどいらしい。
「では、ＱＲコードを体育館入り口で受け取ってください。今日は、文化祭を楽しく盛り上げていきましょう！」
『おおーー!!』
　文化祭がスタートだ。
†
「帰れ」
　短すぎる言葉だった。
　実行委員会の会議室で、本日のスケジュールを確認していた秋太が放った言葉だ。
　当然、その対象は世界征服を目論むと、妹に噂される魔王だ。
「文化祭実行委員長に忙しい中、挨拶にやってきた偉大なる先輩に対してその態度……許せぬ」
「さっさとオケの準備始めてください。つまりは帰れ」

「いやいやいや、それオケしてないから！」
「おっと、つい本音が。すみま――」
「生意気！」
　魔王の一撃。騎士Ｂは華麗に回避した。
「相変わらず、はるさんと秋太くんは仲が良いな～」
「めぐり先輩、眼科行ってください。もしくは精神科。きっと受験勉強で疲れているんです」
「こらこらこら。私たち、仲良いじゃない」
「俺の常識という名の辞書だと、罵倒から始める会話とか、仲が良いの定義に入らないんですよね」
「秋田と雪ノ下の会話ってだいたいそんな感じじゃね？　――な、なんだよ。やめろよ、無言で笑みを浮かべるの。怖えよ」
　ぼっちの精神ポイントが３０下がった。
「全く、八幡は全くだよ。そんな八幡を題材にした一部の女子に人気な画集でも展示しようかな。委員長特権で」
「おいやめろ！　うちのクラスの眼鏡女子が暴走するだろうが！　たださえクラスの出し物で、出血多量なのに」
「俺は文化を発展させる男。腐のつく女子に文化を提示して何が悪い」
「色々とアウトだろうが！」
　会議室が賑やかになる。
　文化祭が始まり、委員たちもまたテンションが上がっているようだ。
「貴方たち、漫才がしたいならどうぞ、体育館でやってきなさいな。失笑という言葉を実感できるわよ」
「その時は雪乃ちゃんもメンバー入りだね」
「……姉さんはこんなところで油売ってないで、早く自分の準備に取り掛かりなさい」
「怒られちゃった――じゃ、またあとでね」
　可愛くウインクすると魔王は去っていった。
「三人で漫才か」

「ボケ担当はゆっきーで」
「ボケ二人が何を言っているのかしら？」
「八幡が二人分か」
「そこは現実見ろよ」
「それを言ったらゆっきーが一番ボケてるから」
「ああ、それなんとな――やめて！　その人を凍らせるような冷たい目で見るのやめて。お前ら、俺に対して怖すぎるんですけど」
にらみつけるを発動した美少女の前に、ボッチは謝るしかできない。
「八幡は八幡だからね」
「比企谷君だから」
「俺ってなんなの？」
悩むボッチを残し、文実メンバーは各々のクラスに向かうのだった。

２０話　男同士のお話

「……」

無言でたたずむ雪乃。

そんな雪乃に満面の笑みを浮かべるクラスメイト。

雪乃は思った。

（少しでも信じた私がバカだったわ）

もしかしたらという可能性。

たとえ、その可能性が低いとしても、一縷の望みにかけてしまうのが人の性というもの。

それは雪乃も同様だった。

心優しいクラスメイト達が、普通の接客着を作ってくれるものだと……。

「クラス渾身の力作♪」

雪乃の目の前でハイタッチして喜ぶクラスメイト。

秋太はうんうんと満足顔だ。

「着ないという選択権が欲しいのだけど」

「まさかまさか、一度着ると約束した雪ノ下雪乃さんが、この期に及んで逃げるなんて真似――しないよね？」

秋太の笑顔にビンタを叩きこみたい衝動に駆られる。ああ、これが秋太に感じている憎たらしいという感情なのだろうと、変なところで姉を理解してしまった。

飛び出しそうになる右手をぐっとこらえると、雪乃は観念し小さく頷いた。

「分かったわ」

その言葉を最後に、雪乃は更衣室に連行される。姉が演奏でいないことがせめてもの救いだったと、少しだけ安堵し、そして小さくため息を吐いた。

◆

「わあ――！　ゆきのん、超かわいい!!」

「……に、似合ってるぞ」

純粋な感想を言ってくれる二人。
結衣は写メ取って良い？　と確認を取り、八幡は顔を赤らめながらも、ちらちらと雪乃を見ている。
クラスの出し物の都合上、二人が空いている唯一の時間に、期待していた雪乃の接客を味わいに来たのだ。
「お客様、当店ではカメラの撮影はご遠慮願います。それとそちらのお客様は、気持ち悪いのでご退場を願います」
凛々しい。少なくとも声だけは。
ただし、その外見は凛々しさからは程遠いものだった。
「雪ノ下さん、かわいすぎ！」
「ぐはッ！」
「俺、このクラスで良かった」
クラスメイトからの絶賛の嵐。
その声が聞こえてくるたびに雪乃は耳を赤くしていく。
唯一良かった点を挙げるなら、衣装に隠れて、真っ赤になった耳元が周囲に見られないということだ。
「いつか絶対に泣かす」
雪乃は屈辱に塗れた自分を奮い立たせるように、深く心に誓いを立てた。
「秋田、やっぱあいつはスゲーな」
「ゆきのんが陽乃さんみたいになってるもんね」
雪乃に会いに来た八幡と結衣はこの状況を作り出した男に尊敬と、そして同情の念を抱いた。
「比企谷君、さっさと食事を済ませて出て行ってほしいのだけど？」
「秋田が居ないからって、俺に当たるなよ。怖ぇよ」
雪乃のにらみつける攻撃に八幡の防御力はがくんと落ちた。
「そう言えば、アッキーは？　こんな状況ならめっちゃ楽しそうにしてそうなんだけど」
「あれでも文化祭の実行委員長だから色々と忙しいのよ」
クラスに秋太はいなかった。
「お、噂をしていると秋田からメールだ」

「比企谷君……」
「ヒッキー……」
「おいやめろ。いくら俺がボッチだからって、メールを偽装したりしねぇよ。ホントにあいつからメールだから」
そう言うと、八幡はスマホを見せる。
【敗者の惨めな姿を世間様に見せる俺――超鬼畜（笑）】
雪乃が満面の笑みを浮かべる。
それを見て、結衣と八幡は顔が引きつった。
ヤバい、怒っているぞと。
「わざわざ比企谷君に送るあたり――私を挑発しているのね」
「ゆきのん、抑えて抑えて！　あっきーもちょっとふざけてるだけだから！」
結衣がかばった瞬間だった。
八幡のスマホにメールが届く。
【パンさんになったゆっきー……天使（爆笑）】
そう、雪乃が着せられた衣装。衣装とは名ばかりのものである。
秋太的に言えば、夢を叶えてあげた、である。
これが周囲に見られない、自室のような環境なら雪乃も喜んだかもしれない。
ただ、やはり環境というのは大事だ。
学校内ではクールビューティーと評価される雪乃である。秋太や陽乃に言わせれば、それは勘違いだと声を大にして言うが、少なくとも雪乃の学校での評価は、凛としたお嬢様で一致しているのだ。
そんな彼女が、
「パンさんの着ぐるみを着せるとか、たぶん秋田にしかできないだろうな」
そう、雪乃が愛してやまない某夢の国のマスコットキャラクターであるパンさんの着ぐるみを雪乃は着せられていた。
著作権等の問題を秋太が全力のコネを使って、この学園祭でのみ可能としたのだ。
「く、屈辱だわ」

「でも、ゆきのん可愛いよ？」
結衣の素直な言葉に、ぐっと唇を噛みしめる。さすがに雪乃であっても嫌味一つない結衣の言葉を否定する気にはなれないのだ。
「不幸中の幸いは姉さんが、演奏中でこの場に来ない事ね」
これが唯一の救い。秋太も陽乃に弄られる雪乃を見たくなかったのか、わざわざ陽乃が外部協力の一員として体育館で管弦楽の演奏中に雪乃の接客時間を当てたのだ。
「……」
「どうしたの、ヒッキー？」
雪乃がほっとした表情を浮かべたのと対照的に、ぐっと何かを堪える八幡。
その様子を心配した結衣が声をかけると、八幡は絞り出すような声で、こう言った。
「す、すまん雪ノ下。俺も命は惜しいんだ」
心からの謝罪。そして罪人は自分の罪を認め、昨日送られてきたメールを雪乃たちに見せる。
【比企谷君、お姉さんからのお・ね・が・い♪　雪乃ちゃんの衣装を撮影して、私に送ってくれるかな？　送ってくれるよね？　くれなかったら――ふふ、楽しみにしてるね♪】
有り体に言えば脅迫文。オブラートに包んでも脅迫文である。
下手人は、既に仕事をこなしてしまったと、雪乃にとって残酷な事実を告げた。
「変態。盗撮魔」
「ヒッキー最低」
二人の美少女から絶対零度の視線と罵倒が送られる。
この二人の視線を逃れるために魔王を裏切るような真似をすれば、次の日には九十九里浜に埋められている可能性だってあったんだと八幡は強く熱弁したが、それが二人に受け入れられることはなかった。
「やはり一番楽なところを落としにかかったわね。さすがは姉さんだわ。変態君が変態であることを見抜いての行動だなんて、防ぎようが

ない」
「ごめんなさい。せめて名前を呼んでもらっていいですか？」
「なに変態君？　私のパンさん姿を貴方が愛用しているカメラに収めたのでしょう？」
「ヒッキー、本気で最低」
言い方の問題である。スマホは誰だって愛用しているのだ。
「俺にどうしろと」
八幡の心から叫びは、誰にも届くことはなかった。
哀れすぎる少年である。

◆

八幡が四面楚歌状態になっている時、秋太は屋上にいた。
校内の見回りに疲れて、少し休憩するためにやってきたのだ。
委員長という立場を使って、普段使われない屋上のカギを入手している。誰にも気づかれずにサボれる場所はここしかない。
「……は～疲れた」
腰を落ち着けると、全身の力を抜いた。文化祭が始まるまで、一切疲れを見せてこなかった秋太。人が誰もいないこの状況で、自分を縛っていた糸を緩ませた。
だからだろう、背後に人が近づいていることに気づかなかったのだ。
「やっぱり君はあの人に似てるんだな」
聞こえてきたイケメンボイス。
なぜという気持ちが真っ先に浮かんできたが、秋太は億劫そうに背後にいるであろう人物に振り返らずに話しかける。
「なんか用？」
「君が屋上に行くのが見えたんでね。ちょうど、休憩のタイミングだったし」
「答えになってないんだけど」
これだからイケメンは、そう秋太は嘆いた。
「悩み相談かな」
「それなら、友達にしなよ。たくさんいるでしょ？　わざわざ大して

親しくもない俺に話すことなんてないんじゃない？」
「そうだな。だけど、悩み事っていうのは友達よりも見知らぬ他人に打ち明けたい時があると、僕は思うよ」
　ならそうしてくれと秋太は短く告げる。
　ならそうするさと、隼人は答えた。
　そう、この場にやってきたのは秋太からすれば、ほぼ他人である葉山隼人だった。
「まあ、会議室で会った時に何か言いたそうだったからね。実行委員長として、生徒の悩みを聞くのも仕事」
「仕事なら仕方ないね。よろしく頼むよ――君は、自分というものを考えたことがあるかい？」
「哲学？　まあ、なんでも良いけど、普通の人はあるんじゃない？」
　可もなく不可もない返答。
「俺はあるよ。自分が何なのかいつも考えている」
「皆の葉山隼人なんでしょ？　八幡がそう言っていた気がするよ。俺の抱いた印象もそんな感じかな」
　何度かしか会ったことがない秋太でさえ、隼人の人気は感じ取れた。周りに人がいるのが当たり前。そういう印象を与える雰囲気が隼人にはあった。
「皆の……か。俺はいつからそれを望むようになったのかな」
「知るか。つーか望んでリア充になれるとか、どこぞの八幡が聞いていたら発狂しているぞ」
「それ、ものすごく限定的だな」
　小さく隼人が笑う。
「俺は、君が陽乃さんと話しているのを見て、あ、これかって思ったんだ」
「よく分からん。何？　もしかしてあの魔王のこと好きなの？　だとしたら、ちょっと仲良くなれそうにないんだけど」
「小さい頃は好きだったのかもしれない。でも、どちらかと言えば憧れに近い感情だったと思う。ほら、小さい時って色んな感情があるから」

「恋多きお年頃ですか。自慢ですか。へぇー」
「その適当な感じ、比企谷を思い出すな」
「なんて侮辱。俺は八幡みたいに目も性根も腐ってないぞ」
「いや、君の方が比企谷を侮辱してるから」
「俺と八幡はベストフレンドだから無問題」
　俺の知る友達とは違うなと隼人は返す。
「小さい頃から陽乃さんには世話になっていたから、憧れと好きの感情が分からなかったんだと思う」
「正気の沙汰とは思えない。あの悪の根源にお世話になるとか。ゆっきーの方が数百倍良いでしょ」
「雪乃ちゃん、あ、雪ノ下さんも好きだったときはあるよ」
　隼人はなんでもないように答えた。
　普段の自分なら絶対にこんなことは言わないのに、どうしてか秋太には伝えてみようと思った。
「雪乃ちゃんで良いんじゃない？　本人が居ないわけだし、幼馴染なんでしょ？　小さい頃から姉乃さんと一緒に居たら、セットでゆっきーとも遊んだりしてただろうから」
「好きだったってところには反応しないんだな」
「ゆっきーだよ？　それこそ、小学生くらいの時はクラス中の男子を虜にしてたんじゃない？　小学生の頃なんて、お盛んなお年頃なわけだし」
　隼人は少し思い出しながら、「確かに毎日のように告白されていたな」と呟いた。
「ゆっきーは見てくれは良いから」
「それ以外はダメみたいな言い方だな」
「ポンコツだからね」
「雪乃ちゃんをポンコツ呼ばわりできるなんて、陽乃さんくらいしか思い当たらないな」
「幻想を見すぎ」
「俺からみたら強い女の子だったよ」
「だから、苛められていた時も助けなかったと」

びくっと隼人が反応する。
そして、顔から笑みが消え申し訳なさそうに、肩を落とした。
「凄いな。雪乃ちゃんから聞いたのかい？」
「それはない。ゆっきーだよ？　無駄にプライドが高いあの子が、自分を助けてくれなかったなんて泣き言を言うわけがない。話の流れから分かるでしょ」
隼人が秋太に相談した理由。
――今の雪乃と楽しそうにしているから。
そんなくだらない理由だ。
隼人は自分が情けないと思いながらも、秋太が一人で屋上に行ったの見て、後を追わずには居られなかった。
自分とは違って、雪乃と上手くやれている秋太から何かを知りたかったのかもしれない。
「どうせあれでしょ？　姉乃さんに憧れて、皆の葉山隼人になろうとした。そして幸か不幸か、それができてしまった。でも、皆のって言うのが大きな枷になる。ゆっきーみたいにモテまくるいけ好かない美少女が小学生という残酷なコミュニティーで迫害されないわけがない」
「雪乃ちゃんを褒めてるのか貶しているのか分からないな。それにしても凄い洞察力だよ」
呆れを通り越して感心する隼人。
秋太の言ったことはすべて事実だった。
「小学生なんて、大人より残酷だよ。そして何より傷つきやすい」
「俺はそんな中で彼女を守れなかった裏切り者だ」
「それは仕方ないんじゃない？　小学生だったら何もできないのが普通だろうし。下手に手を出せばいじめの対象が自分に回って来る」
「それでも俺はやらなきゃいけなかったんだ。少なくとも、陽乃さんならうまくやれていたと思う」
ぐっと拳を握る隼人。
「陽乃、陽乃って、どこかの宗教みたい。そんなにあの雪ノ下陽乃は完璧に見えるのかな？」

「君には見えなかったのかい？　昔から、陽乃さんは皆の中心で――」
「葉山はさ、姉乃さんみたいになれなかったから後悔してるの？　それともゆっきーを守れなかったことを後悔してるの？」
隼人の言葉を遮って秋太が尋ねる。
「俺は雪乃ちゃんを――」
がちゃり。
隼人が何かを告げようとしたとき、屋上の扉のドアが開いた。
「やっはろー♪　なーに男同士で語りあっちゃってんのよ。もー青春してるわね～」
暢気な魔王様の降臨に、秋太は呆れ、隼人は唇を噛みしめた。

21話　最終回　前編

「ホント空気読め」
「嫌♪」
　秋太の言葉に陽乃は短く拒絶。
　隼人に至っては、陽乃に何かを言う気にもならなかった。
「あんたら二人でこんなところで会話なんて珍しいわね」
「仲良かったっけ？」と陽乃が笑顔で尋ねる。
「イケメンによるイケメン講座を聞いてたんだよ。だから帰れ」
「秋太がイケメンとか身の程知らず♪」
「よし、雪ノ下陽乃変顔展を開催しよう。大学にも画像を送りつけて、魔王の大学での地位を失墜させてやる」
「申し訳ありません、私が調子に乗っていました」
　陽乃が頭を下げる。情報社会に生きる現代人にとって、それに強みを持つ秋太に勝てないことは陽乃は理解している。
　理解しているなら、することは簡単だ。
　誠心誠意を見せること。
「陽乃さんが頭を？」
「魔王様なんて所詮この程度。ぽっと出の勇者に簡単にやられる、シナリオキャラ」
「くっ、秋太になめられるなんて屈辱だわ」
「ゆっきーもよくそんな顔してるよ。さすがは姉妹」
　秋太にとってみれば雪ノ下家はそこまで強大ではないのだ。
　勝てない分野だって当然ある。だが、絶対に負けるような相手ではない。
　そして、それはとても普通のことで、誰だってそうなのだ。
　要はそれを理解するかどうかなのである。
「陽乃さんが……ハハ、ハハハハハ！　そうか、そんな陽乃さんもいたのか！」
　隼人が急に笑い出した。
　突飛な行動に、「ヤバくない？」と秋太と陽乃がアイコンタクトを取

る。
「長年、魔王に苦労させられた精神がここにきて、崩壊したか。姉乃さん、ほら謝って」
「なんで私が悪いことになってるのよ！　これはあれよ、秋太が悪い」
「意味わかんないですけど」
　隼人の笑い声が響く中、責任をお互いに押し付けあう。
　犯人は十中八九陽乃なのだが、それを彼女は認めようとしなかった。
「ほら、秋太。隼人をなんとかしたら、お姉さんが良いことしてあげる」
「まじで？　とりあえず、向こう１００年くらい日本から出て行って欲しい」
「こらこらこら」
　ぺしっと秋太を叩こうとしたが、無駄に高い身体能力を持つ彼には通じなかった。
「私の威厳が失われるでしょ！」
「そもそも尊厳が失われているから、焼け石に水」
「あんたの中で、私はどういう存在なのよ！」
「人の皮を被った悪魔」
「陽乃ちょーぷ！」
　当然のようにかわす秋太。
「くっくくく。あーお腹痛い」
「姉乃さん、腹痛を起こしたらしいから病院に連れて行ってあげて。なんなら精神科にも」
「それだと私が悪いみたいじゃないの。違うわよね？　隼人。陽乃ちゃんは全然悪くないわよね？」
「ここに来て保身とは……ホント、がっかりです」
「うっ……」
　今度は陽乃がしゅんとなった。
「はは、違いますよ。陽乃さんが悪いわけじゃない。ただ、俺が勘違いをしていただけです」

ずっと笑っていた隼人が、そう言いだした。
「俺は陽乃さんにずっと憧れていました」
「ふふん」
ドヤ顔を秋太に向ける陽乃。だがそこに秋太が待ったをかける。
「姉乃さん、気づいて。憧れてたって過去形だから。今は、そんな気なんて全くないアピールだから」
「きーこーえーなーい」
「本当に子どもみたいに見える陽乃さんは久しぶりだな。今までの俺なら、たぶん怖がっていたと思う」
隼人は空を見上げる。
晴れ晴れとした素晴らしい空だ。
「よく言った。姉乃さん、怖いって」
「こ、これはあれよ。私も、ちょっとお姉さんキャラを出してたからで……」
「陰湿で、暴力的で、邪悪。普通に怖い」
「まあ、それにはちょっと同感かな。雪乃ちゃんを苛める時の陽乃さんは特に」
「こら、隼人！　あんたはどっちの味方なのよっ」
「普通に姉乃さんの敵」
幻の左ジャブが秋太を襲うが、当然のごとく余裕でかわす。
「見方を変えれば、俺ももっと違っていたのかもしれない。陽乃さんに対しても、雪乃ちゃんに対しても」
「悪魔とポンコツ」
「今ちょっと、真面目な話になるところでしょ。空気読みなさいよ」
「ホント、二人は似てるね」
隼人が小さく笑う。
「なんて屈辱」
「なんて侮辱」
「ほら」
秋太と陽乃がにらみ合う。それを隼人は楽しそうにみる。
「もしかしたら、俺と陽乃さんもそんな関係になっていたのかもしれ

ない」
「ならないわよ。隼人と秋太は別の人間だもの。アンタはアンタ。こいつとは違うわ」
「しょうがない子ね」と陽乃が隼人の頭をぽんと軽くなでる。
「面白味のない奴だと思ってたんだけどね」
「俺も自分をそう思ってました。だから、陽乃さんに相手にされなかった。そんな俺だから雪乃ちゃんにも……」
「俺、帰った方が良い感じ？」
「アンタの空気の読まなさはホント凄いわ」
「姉乃さん程じゃない」
「陽乃ロックっ！」
　ヒールではありえない動き。バックステップしながら、綺麗にターンを決めて秋太の背後を取った。
　さすがの秋太も急激な動きの変化に対応できず、陽乃に捕らえられてしまう。
「くっ！」
「ふふーん。お姉さんは偉大なのである」
「俺も、陽乃さんとそんなやり取りをしたかったですよ。普通に」
「葉山。よく見て！　これのどこが普通!?　地味に膝とか入れてきてるんだけど！」
　楽しそうに笑う隼人。
「雪乃ちゃんは陽乃さんが大好きだったから。今は――触れないでおきます」
「ちょっと！」
「陽乃さんに認められれば、雪乃ちゃんに認められる。好きになってもらえる。そう思ってた自分がバカみたいだよ。認められることとその人の真似をすることが全く違うことだってことに気づかなかったんだから」
　とりあえず、秋太は思った。
「俺、帰っていい？」
「なんであんたはシリアスになれないのよ」

「それをあんたが言うな。それと早く離れろ。バカみたいな胸を擦り付けるな痴女め」
「ふふーん。秋太の秋太が太くなっているのね」
「陽乃さん、それ完全にセクハラです」
結局シリアスにはならない。
「葉山、よく言った。やっぱりお前とは仲良くなれそうだ」
「それはどうかな？　今のところ、僕の初恋を打ち砕いた男と仲良くなれる気がしないけど」
「やーい、振られてやんの！　ぼっち」
「ぐぬぬぬ」
雪ノ下に関わる人間は総じて、性格アレであると改めて、認識した秋太だった。
秋太の睨みつけに爽やかに対応した隼人は、晴れやかな気持ちでこの場を去ろうとする。
「ね、隼人。アンタはさっき過去形にしたたけど、私たちの関係だってまだまだこれからよ？」
「……陽乃さんはずるいな」
陽乃の言葉に隼人は振り向くことはできなかった。
「これから変わっていこうと思います」
「楽しみにしてるわ」
「うわ～。一生姉乃さんに関わるとか、それなんて拷問」
秋太の首が即座に締まる。
今の体勢をどうやら忘れていたようだ。
素早く謝罪とタップを入れる。
「秋田、たぶん君もそうだと思うよ」
隼人はそれだけ言って帰っていった。
隼人の言った「そう」というのが何を指しているのか、秋太は考えないようにしていた。
◆
「全く、純真なイケメンをあんだけ狂わせるなんて」
「ふん、違うわよ。あいつが勝手に私を真似てああなったの」

「悪女の思考」
「女の子なんて皆そんなもんよ」
「そんな女の子がたくさんいてたまるか！　全国の女の子に謝れ」
「ごめんね」
「軽」
　二人だけになっても、何も変わらない。
　結局、この二人はこういう関係でしかない。
「好きよ、秋太」
「お断りだ、姉乃さん」
　だから、陽乃の想いは届かない。
「はぁ～また振られた。かなりショック」
「タイミングってあるでしょ。なぜ今言ったし。いきなりすぎるでしょ」
「……うるさいわよ」
　ばしっと秋太の頭を叩く。
　秋太はそれをかわさなかった。
「人を好きになったことってないんだもん」
「陽乃さんに好かれてもね」
　名前を呼ばれたことに、陽乃は理解した。
　これが秋太の正直な答えなのだと。
「やっぱりアンタは酷い奴よ。私の乙女心は粉々だわ」
「だって最初からそうでしょ？　バカやってるのが俺たち」
「ふふ、まあそうね。でも、ショックなのはホント。私は秋太が弟よりかは旦那の方が良い」
「直球すぎるわ。魔王様が奥さんなんて胃に穴が開く」
　ちょっと顔を赤くする秋太。
「弟になる可能性は？」
「知らん」
「雪乃ちゃんは可愛いから大変よ」
「それくらい知ってる」
「あ、やっぱり雪乃ちゃんなわけ？」

「うるさいよ」
　陽乃の方に顔を向けようとしない秋太。
「雪乃ちゃんの初恋が隼人って言ったら怒る？」
「別に」
「雪乃ちゃんが非処女って言ったら？」
「別に」
「あれ、ちょっと意外。まあ、雪乃ちゃんのことは嘘だけど」
　本当に意外そうに、陽乃はきょとんとする。
「好きになるってそういうことでしょ？　相手の過去とか全部をひっくるめて、今のその人が好きなんだ。過去を関係ないとは言わないけど、好きになった方が負けなんだから、しょうがないよ」
「意外の上に意外よ」
「どんだけだよ」
「比企谷君だったら怒ったかなって思う」
「八幡は……どうかな？　独占願望は強そうだけど、なんだかんだで許容するよ」
「ガハマちゃんがビッチだったらどうなるかな？」
「処女宣言してたし、それはないんじゃない。見た目に反してそこらへんはかなりしっかりしてるし、あの子」
「それ、失礼だから」
「姉乃さんも」
　二人だけの空気。
　心地が良い。
　それは二人の率直な感想。
「秋太が弟か。やっぱり楽しいだろうな」
「まだゆっきーと恋仲になるなんて決まってないんだけど」
「そこはほら、頑張んなさいよ。男の子」
「あの子、ツンデレだから」
「ふふ。確かにね。お姉ちゃん、大好きだから」
「そこは否定してない。まさか、ライバルが姉乃さんとか」
「私を倒して、雪乃ちゃんを手に入れてみなさい♪」

「よし、屋上から――」
「こら、物理的に行うな！」
二人の漫才が終了する。
「なら、雪ノ下陽乃を超える姿を見せるしかないか。あの子に」
「私の文化祭は盛り上がったわよ？」
「下をよく見なさい。超盛り上がってるから」
「知ってる。ここに来る前、皆が楽しそうにあんたのゲームをやってたわよ。ガハマちゃんが腕立てしてたのは面白かった」
「やっぱり、ガハマちゃんはそうだよね」
「う、腕が～」とか言って、泣きながら課題クリアを目指す、結衣の姿が秋太には容易に想像ができた。
「でも、ダメ。まだ負けを認めてあげない」
「姉乃さんじゃなくて、ゆっきーがどう思うかなんだけど」
「私を振ったのよ？　しかも2回。ちゃんと認めさせなさい、私を」
「1回目はちょっと違うでしょ」
「照れ隠しよ」
「嘘つけ」
「生意気！」
がばっと秋太に飛び掛かる。
秋太はそれを華麗に避けた。
「そこは最後だからって抱き着かせるところでしょ」
「あ、俺って貞操観念が固いんで」
「今までの自分を顧みなさいよ。私とかめぐりとか」
「男の子ですから」
「こらこら、雪乃ちゃんを泣かせたら、本当に――」
物騒な言葉の先は告げなかった。
東京湾か、富士の樹海だろうなと、秋太は嫌な想像をする。
「見せて頂戴ね」
「了解」
陽乃は、自信たっぷりの秋太の顔を見て、嬉しそうに笑うと屋上から出て行った。

「ハア～、どうしようかな」
先ほどまでの顔はどこに行ったのか？
何も考えていない秋太だった。
◆
文化祭が佳境を迎えていた。
「バンド演奏が終了したら、文化祭もおしまいね」
「そうだね」
最後の段取りに向けて、雪乃と秋太は話し合っていた。
「葉山君たちでラストだから、その後少しだけ時間が空いて、もろもろの結果発表の流れで良いかしら？」
「うーん、ちょっと変更」
「え？」
昨日までは、そういう段取りで終わるはずだったのだが、秋太の待ったの一声。
何を企んでいる、と雪乃は怪訝そうな顔で秋太を見る。
「ちょっと男の子になろうかなって」
「……貴方、疲れているのよ」
「その可哀そうな子を見る目はやめれ」
「どうかしたの？」
「小さい子をあやす様に聞くのもやめれ」
とりあえず、雪乃は秋太の額に手を添える。
自分の額の温度と確かめ合いながら、秋太に熱がないことを確認した。
「ゆっきー大胆」
周りから、「あの雪ノ下さんが！」と声があふれる。
雪乃としては、特に抵抗もなく、自然と行ったことだ。
だが、周囲はそれを普通だと思わない。
氷の女王などと噂される彼女が、異性に接触する。これは由々しき事態なのである。
「やっぱり委員長に弱みを……」
ただ桃色な展開を予想する人間は誰もいない。

秋太の素行に問題があることと、雪乃の普段の対応の所為だ。
「俺の名誉が傷つけられているんだけど？」
「私の所為じゃないわよ。貴方の所為よ」
「もう人に責任転嫁するところがホント姉妹」
「侮辱だわ」
「返しも一緒。あっぱれ」
ぐぬぬと雪乃が悔しそうな顔をする。
「さて、ちょっと時間をもらうよ。見てて」
「何をする気なのかしら？」
「男の子だよ」
何を言っているんだと、雪乃呆れた視線を背中に浴びながら、秋太はステージ中央に向かった。

22話　最終回　後編

「雪乃ちゃん」
「ね、姉さん……」
　秋太に見ていろと言われた雪乃は、舞台が良く見渡せる二階ギャラリーに居た。
　そんな彼女をどこから見つけたのか、陽乃が近づいてきた。
　二人だけの空間が自然な形で出来上がった。
「アイツ、ダンスなんて出来たのね。しかも憎たらしいくらい上手い」
「彼曰く、打って守って走れる、なんなら踊りもできるスーパースターらしいわ、プログラマーって」
「全世界のプログラマーに謝らせたいわ」
　自分も同じことを言ったなと、姉妹の共通点がこんなところで分かる。
「謝っていたわ。とても軽く」
「ごめーんって？」
「さすがは似た者同士ね」
「それ褒めてないでしょ？」
　ムムっと陽乃が雪乃を睨む。
「それにしても、ホントに凄いわね」
　雪乃は目の前の光景に、感嘆の声を上げた。
　秋太が出てきた時は、特に盛り上がったような様子はなかった。
　結果発表や文化祭の終了挨拶が始まるのだと誰もが思っていたからだ。
　だが今は違う。
　音楽に合わせた秋太のダンスに、時には驚愕し、時には喝さいを上げる。
　文化祭の終盤にして、最高の盛り上がりを見せている。
「普段は、陰気な男子生徒なのに」
「まあ、パソコンがお友達な高校生ってイメージが良くないわよね」
「でも、今彼に皆が集中している。皆が彼を見てる」

秋太と一緒に踊りながら、盛り上がりを見せる生徒たちがよく見える。
楽しそうだ。
これで最後だと、皆が全力で騒ぎまくる。
「同じ阿呆なら踊らにゃｓｉｎｇ　ａ　ｓｏｎｇ……さすが文化祭実行委員長。最後にスローガンを体現するなんてね」
皆が阿呆になって踊る。
これぞ総武高校文化祭。
「惹きつけられる。姉さんと同じね」
「あら、雪乃ちゃんにしては珍しい」
「私はいつだって正直者よ。過大評価も過小評価もしないわ」
「比企谷君が聞いたら文句言いそうね」
「……」
黙りなさいと雪乃が陽乃を睨んだ。
「アイツは、私とは違うわよ。全然……ね」
「姉さん？」
陽乃は手すりに両手を置き、その上に自分の顎を乗せる。
「私、さっきアイツに告白したのよ」
雪乃が分かりやすく反応する。
またか。
昔から、姉にすべて奪われてきた雪乃にとって、陽乃の告白はあまりにも衝撃的なものだった。
無意識に胸に手を当てる。
「なんて言ったと思う？」
「……」
「ふふ。そんな怖い顔しないで。あっさりフラれたから」
何でもないように、陽乃が小さく笑う。
ただ雪乃にはそれが悲しそうに見えた。
たぶん、自分が同じように告白しても断られてしまうのだろう。
あれほど仲が良く見えて、かつ容姿も完璧な姉がダメなのだ、自分なんて……そう雪乃は考えてしまう。

過去の経験が、そうさせる。
陽乃にできなかったことが、自分にできるわけがない。
そう思い込んでしまう。
「なんでそこで暗くなるのかなー。やっぱり雪乃ちゃんは情けない」
「姉さん！」
「だってそうでしょう？　今、雪乃ちゃんの頭には自分も同じ、それが一番に思い浮かんだんでしょ？」
図星だった。
雪乃は、声を詰まらせる。
「昔から、なんでも私のことを真似てたもんね。私ができなかったこと……なんてあんまりないけど、雪乃ちゃんはすぐに諦めちゃうもんね。いや、むしろ安心する、かな？」
「そ、そんなことはないわ……少なくとも最近は……」
頭に浮かんでくる憎たらしい顔。
その人物を思い出すと、自然と雪乃の身体に力が入る。
そうだ、自分は今まで違う。
誰かの真似をする必要ない。
自分が自分らしくあること、それを彼から学んだのだから。
雪乃は強い気持ちで陽乃を見る。
「あは、それって秋太の影響？　なんか顔つきが変わったわよ」
「……否定はしないわ。でも彼だけじゃない。由比ヶ浜さんや比企谷君だって――」
「でも、やっぱり秋太でしょ？　雪乃ちゃんを真っ向からねじ伏せてくるなんて、私かアイツくらいだもんね」
陽乃が苦笑いをする。
「見て。皆楽しそう」
「姉さんの時の文化祭もこんな感じだったわ」
「ふふ、姉の偉大さを改めて感じ取った？」
「寝言は寝て言いなさい。姉さんの時よりも、私たちの文化祭の方が盛り上がっているわ。つまり私の勝ち」
「えー」

今度はからからと笑いだした。
陽乃が素直に楽しそうにしている。
自分と二人でいる時に、こんな表情をするのはいつぶりだろうかと雪乃は思い返してみた。
そして、思い返して、すぐに分かる。
意外とごく最近だ。
そして、その時、一緒に思い出される人物。
「秋田秋太」
「アイツも変な奴よね」
「姉さん程じゃないわ」
「雪乃ちゃんに言われたくなーい」
二人が顔を見合わせて、声を上げて笑った。
傍から見れば仲の良い姉妹だ。
「ねえ、雪乃ちゃん。久しぶりに姉らしいことするね」
陽乃は雪乃の頬に手を伸ばし、優しく触れた。
「私はアイツのことが好きよ。フラれた今でもね」
「ええ」
頬を伝わって感じる姉の温もり。
そして、悔しさ。
たぶん、陽乃にとって今が一番悔しい時なのかもしれないと雪乃は思った。
「頑張りなさい」
「姉さん……」
「雪乃ちゃんなら、大丈夫――なんてことは言わない。もしかしたらダメかもしれない」
そう言いながらも、陽乃の目は優しさに溢れていた。
「アイツはバカでアホだから」
「ふふ、姉さんをふるくらいだものね」
「ホントよ。もう、絶世の美女じゃなければ認めてあげないんだから」
陽乃が添えていた手の形をくいっと変えた。
「にゃにしゅるのよ？」

陽乃に頬を引っ張られて、上手くしゃべれない雪乃。そんな雪乃の顔を見て満足したのか、陽乃は満面の笑みを浮かべて雪乃から離れる。
「よし、やることはやったから、私、帰るわね。それで今日の悔しさを思い出して、家で一人でえーんえーんて泣くの」
「動画撮影の許可をもらえるかしら？」
「生意気！」
ぺしっと雪乃の頭を陽乃が叩く。
こんなやり取りは、今までなかったのかもしれない。
そう思うと、随分と影響されたなと雪乃は思った。
「もーう知らない！　雪乃ちゃんなんてフラれちゃえ！」
ぷんぷん怒った陽乃は、そのまま帰って行った。
最後の瞬間に、振り向きざまに親指を突き上げ、ウインクすることを忘れないあたり、陽乃らしい。
「全く、私は告白するなんて言ってないわ」
姉の強引な流れで、そうなるようになってしまっているが、そこに嫌な感じは全くしない。
告白する気はなくても、姉をふった人物に対する気持ちまでは否定する気にはなれなかった。
「今どきは、女の子から行くものかしら？」
恋する乙女はダンスを踊り終え、全校生徒から拍手を浴びる男の子を見ながら、んーと頭を悩ませていた。

◆

「人が気合を入れて踊っている最中に姉妹喧嘩を始める雪ノ下家は間違っていると思う」
文化祭は終わりを迎えた。
近年最高の盛り上がりを見せて、文化祭は終わりを迎えたのだ。
秋太的に一番盛り上がったのは、最後の結果発表である。
全身が筋肉痛で動けなくなっているあーしと結衣が上位入賞者として壇上に上がってきた時が面白かったと八幡に語った。
そして彼女たちが、東大の赤本を手渡された時、爆笑が抑えられな

かったとも。
「別に喧嘩はしてないわ」
そうして、文化祭の片づけを終えて、今秋太と雪乃は会議室で最後の報告書を作成している。
ほかの面々は機材チェックや返却物の確認に出払っていて、この場には二人しかいない。
「なんか姉乃さんに叩かれていたように見えたけど？」
「よく踊りながら、そんな観察ができたわね。感心するわ」
「雪ノ下さん家のへっぽこ姉妹ってかなり有名だから。自然と目が行っちゃうよね」
「あら、その雪ノ下さんの次女の方は、どこかの秋田さんの長男に頭脳戦で圧勝するらしいわ。最強って有名よ？」
嘘は言っていない。
合宿の際、チェスのルールを理解していない秋太に雪乃は圧勝している。
「過去を振り返らないのは偉大な人間の第一歩」
「なら、貴方が頑張ったこれまでの功績も私は忘れることにするわ」
「く、ああ言えばこう言うようになって。一体、誰の影響を受けたのか」
「秋田家の長男よ。女の子を傷つけることに定評があるの」
「およ、ゆっきーは傷物にされたとか宣う気かい？」
「そうね、そうしておいた方が、何かと都合が良いわ」
秋田の軽い挑発に、雪乃もカウンターで返す。
陽乃との対戦を終えた後の雪乃は、心に余裕があるのだ。
自分の本心を必死で隠すときのみ、彼女の頭は冴えわたる。
ヘタレの特殊能力持ちである。
「何？　今日は随分とノリが良いじゃん。気持ち悪いよ」
「貴方、女性に面と向かって気持ち悪いってよく言えるわね？」
「ゆっきーやガハマちゃんが八幡によく言っているのを聞くけど？男女平等を謳う日本で、自分が女性だからという理由で罵倒を受けないなんて間違っている。俺、今良いこと言った」

「貴方にそれを言う権利はないでしょうに。比企谷君ならまだしも」
「なんと！　ゆっきーが八幡から罵りを受けたいときたか。よし、八幡にＬＩＮＥしとこ」
「やめなさい」
　雪乃が素早く秋太のスマホを取り上げる。
「人の物を強奪するとか、ホント手癖が悪い」
「貴方の口の悪さには負けるわ」
「八幡ほどじゃない」
「そこは同意」
　その場に居なくても、八幡は罵られる。
「さて、今年のやり残しはあと一つだけ。それが終われば、晴れて学校とおさらば」
「え？」
「あれ、言ってなかった？　今年中に学校はやめる。普通は、来年の３月とかなんだろうけど、あいにく俺は普通じゃない」
「貴方が普通じゃないのはいつものことだけど……本当にやめるの？」
「まあね。この学校に通ったのも親への義理だし。最終学歴が中卒になるのはいただけないけど、それを気にしないくらい俺は企業様方から信頼を得ている。この学校に居る意味は正直ない」
　意味はない。
　雪乃はその言葉を聞いて、胸が痛くなった。
　自然と涙がこぼれる。
「ちょっと！」
「へ？」
　急に涙を流した雪乃に慌てる秋太。
　雪乃は自分が泣いていることに、秋太に渡されたハンカチでようやく気付いた。
　ああ、目の前の男子生徒は自分にとって、ただの男子生徒ではなかった。それを雪乃は改めて実感した。
　そしてそれを実感したからこそ、胸が苦しくなる。

このバカで性悪な男の子が目の前からいなくなるのかと思えば、それはたまらなく嫌だった。
「泣くなよ」
「だって……」
言葉にならない。
こみ上げてくる感情を雪乃は整理できないでいる。
でも、伝えたい言葉がある。
それだけはぐちゃぐちゃになった気持ちの中ではっきりとしているものだった。
「私は貴方が――」
「おいーす。とりあえず機材の点検は……失礼しました」
雪乃が叫ぼうとした瞬間、会議室のドアが開いた。
ドアが開いた瞬間、中の状況を瞬時に理解する男。
自称、空気の読める、なんなら存在が空気な彼は即座に撤退を試みた。
泣いている女子生徒、困った顔を浮かべる男子生徒。何かを告げようと勢いよく立ち上がったであろう、その姿勢を見て、わからぬ八幡ではない。
ああ、自分は殺されるだろうと本能が警笛を鳴らし、戦略的撤退を細胞レベルで実現した。
「ちょっとあの男を沈めてくるわ」
どこへですか？　と尋ねる気にはならない。
樹の海と書いて樹海。日本が誇る日本一の山の麓に、可哀そうな少年が捧げられようとしている。
「ゆっきー」
怒髪天状態の雪乃が睨みつけるように、振り返る。もうすでにドアに手をかけており、狩りの始まりが告げられようとしていた。
「俺は雪ノ下雪乃が好きだ。この人と一生一緒に居たいと思った。俺と付き合ってください」
タイミング。
それはどのような場面においても重要なファクターなのだ。

「……」
「その目はやめて」
お前はなぜそれをこのタイミングで言ったのか？　雪乃は言葉にせずとも目で語った。
「告白は男がするもの。これが大和魂」
「わけのわからないことを言わないで頂戴。貴方、相変わらず空気の読めない人よね」
はあーと大きくため息を吐くと、雪乃は自分の座っていた席に戻った。
「貴方、学校をやめるんじゃないの？」
「やめるよ」
「私のこと好きなの？」
「好きだよ」
「ならなんでやめるのよ！」
べしっと近くにあった報告書を投げつけたが、紙であるそれに力はなく、ひらひらと見当違いの方向に飛んで行ってしまう。
「別に、学校に通う必要なくない？」
「同じ学校なら、一緒に――」
ご飯を食べたり、帰ったりできるじゃない。雪乃は恥ずかしくなってその言葉を必死に抑えた。
「俺とゆっきーだよ？　想像してみて。クラスで一緒に昼食」
「……ないわね」
クラスメイトたちからの奇異と嫉妬の視線を浴びながらの食事。うん、ない。雪乃は即答する。
「仲睦まじく一緒に登下校。家は基本的に真逆」
「……ないわね」
文化祭で帰りが遅くなったという例外がなければ、二人が一緒に下校することなどないだろう。
つまり学校で行われるイベントのほとんどが二人では起こらないものであるため、秋太が学校に居る意味はないのである。
「ここで僕が学校をやめたとする。仕事はあるけど、基本在宅でやっ

てるから、時間の管理は自分でできるわけだ」
「ちょっと食事でもって思ったら？」
「ワンコールでＯＫ。まだ車の免許は取れないけど、取れればお迎えもやぶさかではない」
「私たちが一緒に行動するなんて部活動を除けば、放課後くらい」
「そういう事。まあ、部活動とか楽しかったのは認めるけど、学校でイチャイチャはできないでしょ？　イメージ的に」
　結論、秋太が学校をやめるのは問題がない。
「なるほど」
「そういうこと」
　お互いが納得し、帰宅の準備を進める。
　雪乃が投げつけてしまったが、報告書は完成済みだ。
「そう言えば、この後打ち上げがあるらしいのだけど？」
「行くわけがない」
「由比ヶ浜さんあたりが騒ぎそうね」
「あの子は空気が読めるから」
　ニッと秋太が笑う。二人の状況を八幡が伝えているのは簡単に想像できる。
　秋太の笑顔に、雪乃はなんだか恥ずかしくなって髪で首元を隠した。
「二人っきりの打ち上げってのも良いんじゃない？」
「自分の言ったことを思い出しなさい」
「良いじゃん。今日は記念日。さすがの俺達でも記念日くらいはイチャイチャするでしょ？」
　もう！　と雪乃は顔を赤くして秋太の肩を叩く。
「……今日だけよ」
「それだとフラれたみたいなんだけど」
「わ、私はまだ返事してないもの」
　確かにそうだ。
「ほーではその話は近くのファミレスで」
　秋太がカバンを持ち、会議室から出ようとしたとき、

「好きよ。私は秋田秋太(あきたあきと)が大好き」
今度は名前を間違えられなかった。
そんなしょうもないことを思いながら、秋太は手を差し出して雪乃を待つ。
雪乃は恥ずかしくなって、足早に出て行ってしまった。
「全くツンデレめ」
そんな雪乃の後を秋太が追う。
秋太が追いつくと、雪乃が自然と速度を緩める。
「雪ノ下雪乃に恋するのは間違っているだろうか？」
恥ずかしげもなく、そんな爆弾を投下してくる秋太。
ただ、そんな言葉がなんだか非常に嬉しく、雪乃は自然と笑った。
「さあ、どうかしらね？　秋田秋太君(あきたあきた)？」
俺の彼女メッチャ可愛いわ、ほほ笑む雪乃を見て秋太はそんなことを思った。

人の名前を間違う雪乃は間違っているだろうか？
おしまい